



平 Ⅱ 遺 跡

(HIRA II ISEKI)

吉 佐 山 根 1 号 墳

(KISAYAMANE 1 GOUFUN)

穴 神 横 穴 墓 群

(ANAGAMIYOKOANABOGUN)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 10

1995年3月



建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

平ラⅡ遺跡

(HIRAⅡISEKI)

吉佐山根1号墳

(KISAYAMANE 1 GOUFUN)

穴神横穴墓群

(ANAGAMIYOKOANABOGUN)

一般国道9号(安来道路)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 10

1995年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして高規格道路安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

当道路においても道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成5年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成7年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 水 上 幹 之

序

鳥根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡の調査を行っております。平成5年度からは安来市島田町～吉佐町間（1-1区間）の調査に入りました。この報告書は平成5年度に実施しました安来市吉佐町の「平ラⅡ遺跡」、「吉佐山根1号墳」、「穴神横穴墓群」の調査結果をとりまとめたものです。

安来道路の建設が進められています安来平野一帯は、古代から文化が栄えた地域であり多くの遺跡が確認されております。今回調査を実施しました「平ラⅡ遺跡」からは、古墳時代頃の集落跡（5世紀頃の堅穴住居跡、7世紀頃の掘立柱建物跡）、横穴墓等が多くの遺物とともに発見されました。また、この遺跡に隣接して、古墳時代前期（4世紀頃）の四角い古墳（方墳）である「吉佐山根1号墳」が発見されました。さらに、これら2遺跡に近接する「穴神横穴墓群」では、3基の横穴墓と1基の小横穴等が発見されました。中でも、1号横穴墓は、すでに戦前に開口し、鮮やかな『赤い石棺』の存在が知られていましたが、このたびの調査で新たに石棺の前壁面に彩色壁面が描かれた貴重な遺跡であることが判明しました。

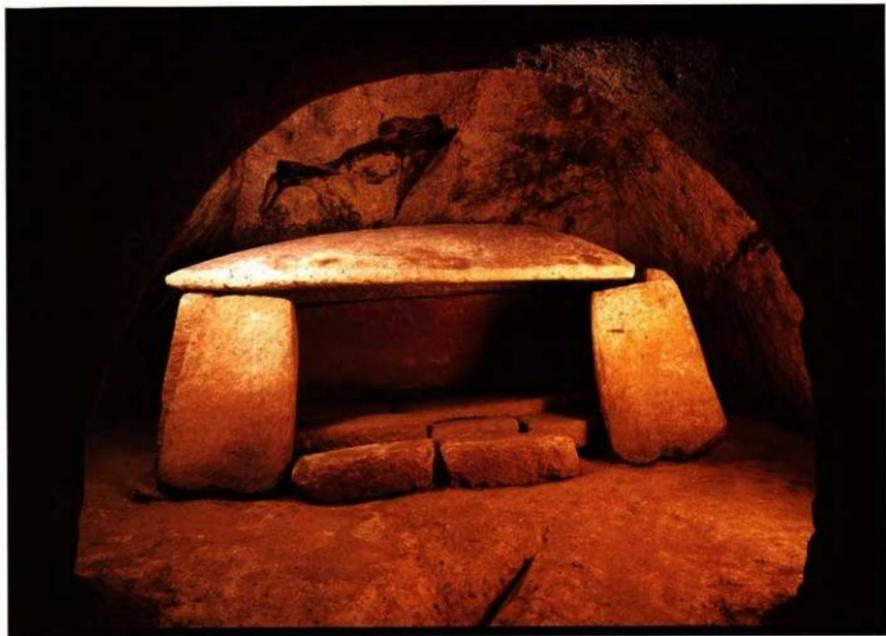
こうした祖先の営みを物語る数々の発見は、今後、郷土の歴史の解明に大いに役立つものと思われます。本報告書が地域史を解明する糸口となり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえでの一助となれば幸いです。

本書を刊行するにあたり、調査にご協力をいただきました建設省中国地方建設局松江国道工事事務所、安来市教育委員会等の関係各位に厚くお礼申し上げます。

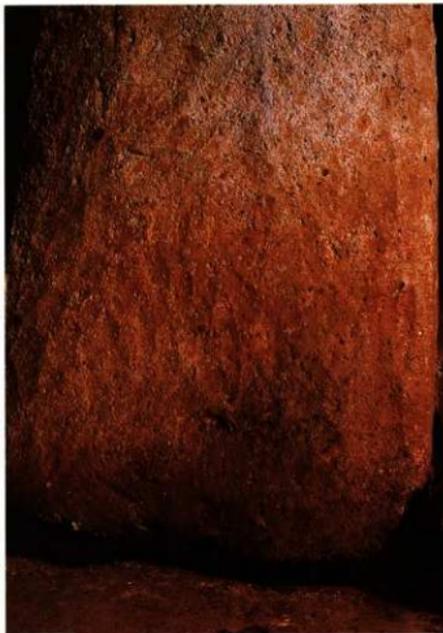
平成7年3月

鳥根県教育委員会

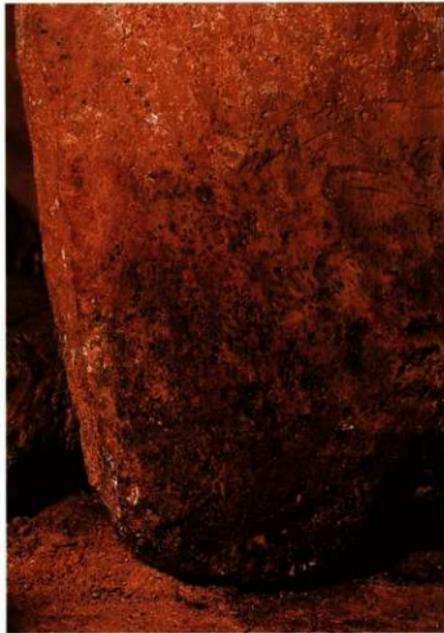
教育長 今 岡 義 治



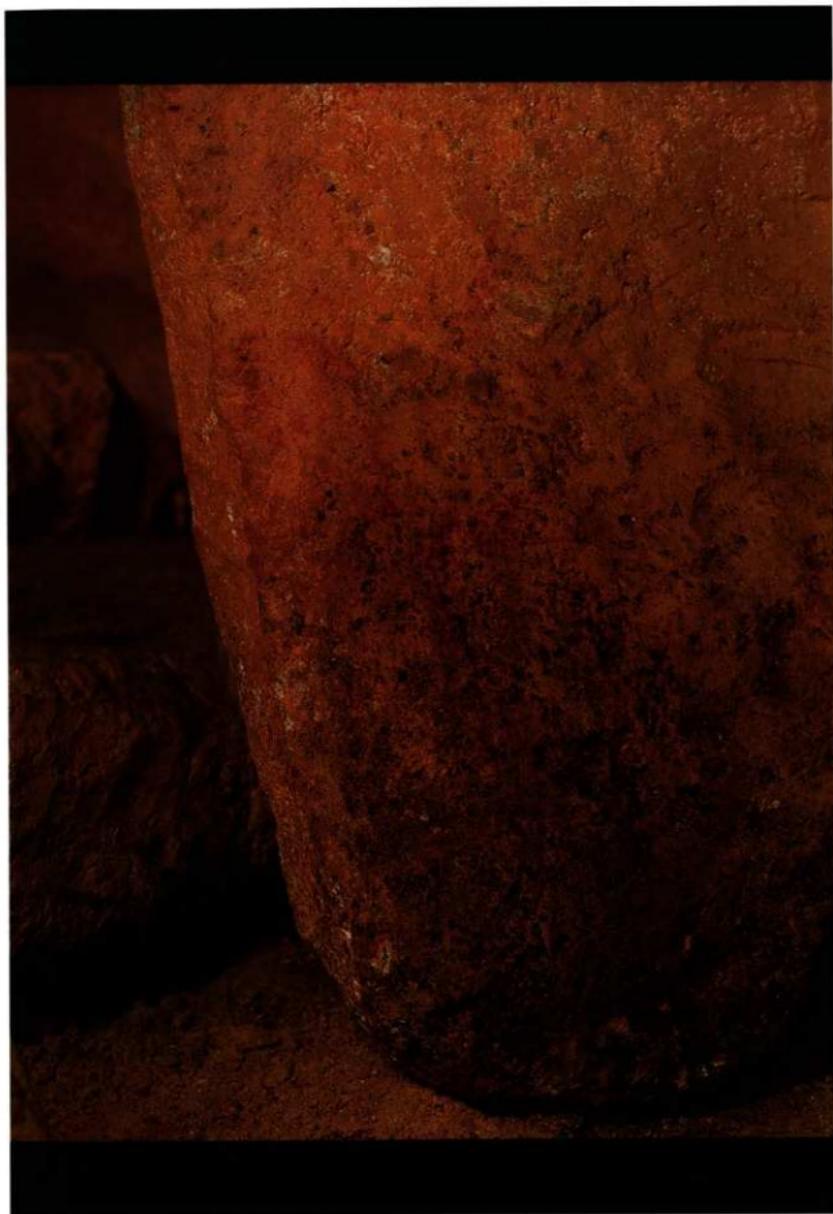
穴神1号横穴墓 家形石棺



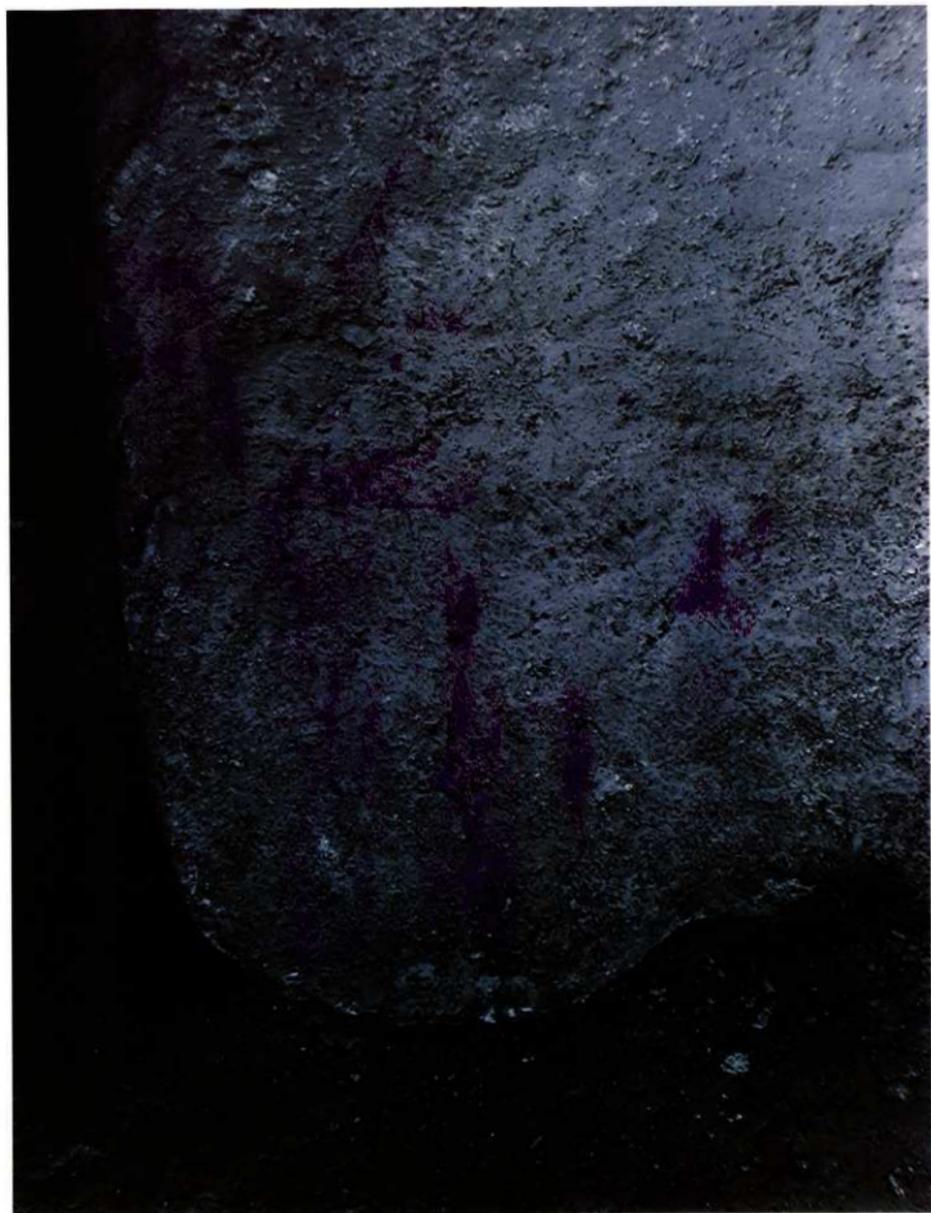
石棺左前壁 彩色壁画



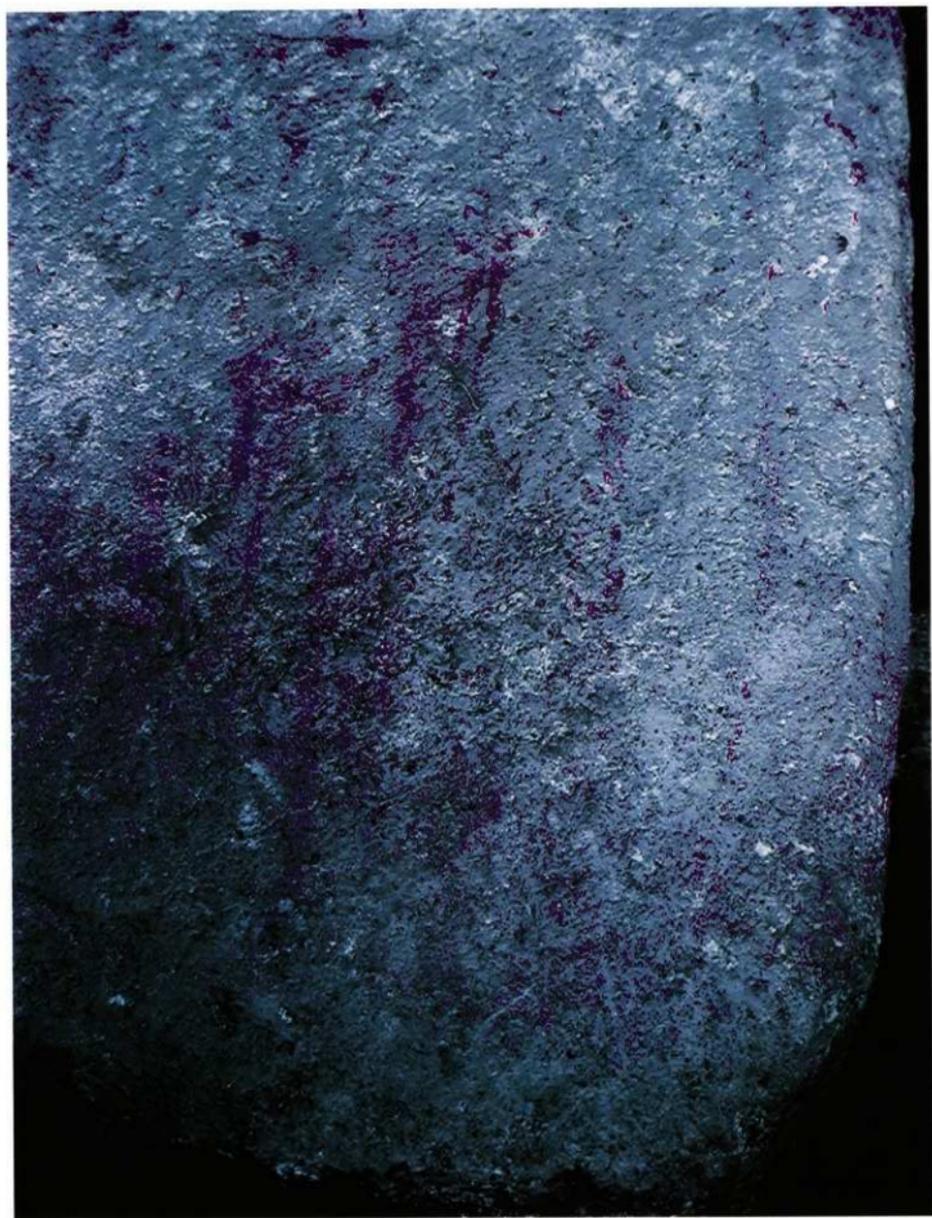
石棺右前壁 彩色壁画



穴神1号横穴墓右前壁 彩色壁画：株式会社SONY提供
(銀版写真からカラープリンターで出力した写真)



同 右前壁 彩色壁画：株式会社SONY提供
(画像処理後)



同 左前壁 彩色壁面：株式会社SONY提供
(画像処理後)

例 言

1、本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、鳥根県教育委員会が平成5年度から一部平成6年度に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内「平らⅡ遺跡」、「吉佐山根1号墳」、「穴神横穴墓群」の発掘調査報告書である。

2、調査組織は以下の通りである。

調査主体 鳥根県教育委員会

<平成5年度>

事務局

文化課 広沢卓嗣（課長）、山根成二（課長補佐）、中島 哲（文化係長）、伊藤 宏（同文化係主事）

埋蔵文化財調査センター

勝部 昭（センター長）、久家儀夫（同課長補佐）、工藤直樹（同企画調整係主事）、田辺利夫（鳥根県教育文化財団囑託）

調査員

埋蔵文化財調査センター 調査第2係

卜部吉博（主幹）、丹羽野裕（同主事）、池淵俊一（同主事）、錦田剛志（同主事）、岩橋孝典（同主事）、深田 浩（同主事）、斉藤 勉（同教諭兼文化財保護主事）、花井 浩（同講師兼主事）、原 昌徳（同臨時職員）、金山尚志（安来市教育委員会主事）

調査指導（敬称略）

山本 清（鳥根県文化財保護審議会会長）

池田満雄（同 委員）

田中義昭（鳥根大学法文学部教授）

渡辺貞幸（同 教授）

前田軍治（熊本県立美術館古墳館学芸員）

最上 敏（同 学芸員）

<平成6年度>（穴神横穴墓群追加調査）

事務局

文化課 広沢卓嗣（課長）、野村純一（同課長補佐）、中島 哲（同文化係長）、丸 宏治（同主事）

埋蔵文化財調査センター

勝部 昭（センター長）、佐伯善治（同課長補佐）、工藤直樹（同企画調整係主事）、田辺利夫（鳥根県教育文化財団囑託）

調査員

埋蔵文化財調査センター 調査第2係

ト部吉博（主幹）、丹羽野裕（同文化財保護主事）、袴真治（同上事）、岩橋孝典（同上事）、福島 浩（同教諭兼文化財保護主事）、渡辺 裕（同教諭兼主事）、山代 徹（同臨時職員）、錦出剛志（同企画調整係主事）

調査指導（敬称略）

山本 清（鳥根県文化財保護審議会会長）

池田満雄（同 委員）

町田 章（同 委員、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）

田中義昭（鳥根大学法文学部教授）

渡辺貞幸（同 教授）

小田富士雄（福岡大学教授）

白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）

和田晴吾（立命館大学教授）

新納 泉（岡山大学助教授）

坂井秀弥（文化庁記念物課調査官）

川野邊渉（東京国立文化財研究所主任研究官）

朽津信明（同 研究員）

牛嶋 茂（奈良国立文化財研究所技官）

北川正隆（ソニー株式会社）

野阪上郎（ソニー株式会社）

菊地哲也（ソニー株式会社）

- 3、発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、鳥根県教育委員会、（社）中国建設弘済会の三者協定に基づき、鳥根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施し現地調査に際しては、以下の方々のご協力を得た。

社団法人 中国建設弘済会鳥根支部 布村幹夫（現場事務所長）、吉岡勇治（技術員）、勝部達也（技術員）、原博明（技術員）、松本佳子（事務員）

- 4、現地調査については、上記調査指導の諸先生のほか、間壁忠彦（倉敷考古館館長）、菱田哲郎（京都府立大学講師）、坂本論司（木次町教育委員会）、大谷兎二（県立八雲立つ風上記の丘）、三宅博士（安来市教育委員会）、三輪 環（安来道路古佐地区対策特別委員会委員長）の各氏をはじめ、鳥根県警鑑識課、安来市古佐地区の皆様にご有益な助言と惜しみない協力をいただいた。
- 5、調査に際して実施した自然科学分野からの分析・鑑定は次の通りである。

- ・石材鑑定は、鳥根県立工業技術センターの井上多津男氏にお願いし、御教示を得た。
- ・土器の蛍光X線分析は、奈良教育大学の三辻利一氏、松井敏也氏にお願いし、玉稿を賜った。
- ・検出された赤色顔料の分析は、東京国立文化財研究所の朽津信明氏にお願いし、玉稿を賜った。

- 6、穴神1号横穴墓の石棺から検出された彩色壁画については、コンピューターによる画像解析を行った。東京国立文化財研究所の川野邊渉氏の指導のもと、ソニー株式会社には、デジタルカメラによる撮影、画像処理の全面的な調査協力をいただいた。
- 7、本書に掲載した巻頭カラー写真（穴神1号横穴墓家形石棺・彩色壁画）の撮影は、奈良国立文化財研究所の牛嶋茂氏にお願いし、写真を提供いただいた。
- 8、挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位に準じ、レベル高は海拔高を示す。
- 9、挿図の縮尺は、図中に明示した。
- 10、本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。
- 11、本書で使用した遺構記号は次の通りである。
P…ピット S I…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡 SK…土壇 SD…溝状遺構 SX…その他
- 12、本書に掲載した遺物の実測、遺構・遺物実測図の浄写は主として次の者が行なった。
<実測> 土器類…岩橋、錦田、陶山佳代 石器類…丹羽野、池淵、岩橋 鉄器類…錦田
<浄写> 金坂恵美子、来海順子、陶山佳代、錦田充子
- 13、本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は岩橋の協力を得て、錦田が行なった。
- 14、本書の編集執筆は上記調査指導の諸先生からの指導を受け、調査員が行った。
- 15、本遺跡出土資料及び実測図、写真等の記録資料は、島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	(卜部)	1
第2章 遺跡の位置と環境	(卜部・錦田)	2
第3章 調査の概要と経過	(錦田)	7
第4章 平ラII遺跡の調査	(錦田)	11
第1節 遺構と遺物		11
(1) 竪穴住居跡と出土遺物		12
(2) 掘立柱建物跡と出土遺物		21
(3) 1号横穴墓と出土遺物		29
(4) その他の遺構と出土遺物		36
第2節 調査の成果と課題		44
第5章 吉佐山根1号墳の調査	(錦田)	48
第1節 遺構と遺物		48
第2節 調査の成果と課題		68
第6章 穴神横穴墓群の調査		72
第1節 遺構と遺物		72
(1) 1号横穴墓	(錦田)	72
(2) 2号横穴墓	(丹羽野・錦田)	93
(3) 3号横穴墓	(岩橋・錦田)	112
(4) 4号横穴墓	(錦田)	133
第2節 調査の成果と課題	(錦田)	135
第7章 自然科学的分析		143
吉佐山根1号墳及び穴神1号横穴墓における赤色顔料	(朽津信明)	143
平ラII遺跡・穴神横穴墓群出土須恵器の蛍光X線分析	(辻利一・松井敏也)	151
付論 石棺に描かれた彩色壁画の画像処理方法について	(ソニー株式会社)	154

挿 図 目 次

第1図	調査対象地の位置と周辺の遺跡	4
第2図	平ラII遺跡、吉佐山根1号墳、穴神横穴墓群調査前地形測量図・調査区設定図	9~10
第3図	平ラII遺跡 基本土層断面図(第4図S'-S)	12
第4図	平ラII遺跡、吉佐山根1号墳 調査後地形測量図・遺構配置図(S=1/200)	13~14
第5図	SI01実測図	15
第6図	SI02・03実測図	16
第7図	SI01・SI02・SI03周辺出土遺物実測図(S=1/3)	19
第8図	SB01実測図	20
第9図	SB01出土遺物実測図(S=1/3)	22
第10図	SB02付近実測図	23
第11図	SB02付近出土遺物実測図(S=1/3)	25
第12図	SB03付近実測図	26
第13図	SB03付近出土遺物実測図(S=1/3)	27
第14図	SB04実測図	27
第15図	SB05実測図	28
第16図	平ラII遺跡1号横穴墓実測図	31~32
第17図	平ラII遺跡1号横穴墓遺物・閉塞石出土状況実測図	33
第18図	平ラII遺跡1号横穴墓出土遺物実測図(S=1/3)	35
第19図	SX01実測図	37
第20図	平ラII遺跡包含層出土遺物(須恵器)実測図(S=1/3)	41
第21図	平ラII遺跡包含層出土遺物(土師器・瓦)実測図(S=1/4)	43
第22図	平ラII遺跡包含層出土遺物(石器他)実測図(S=1/3)	44
第23図	平ラII遺跡包含層出土遺物(玉作関係遺物・石器)実測図(S=2/3)	45
第24図	吉佐山根1号墳平面実測図	49~50
第25図	吉佐山根1号墳墳丘土層断面図	51~52
第26図	第1主体部実測図	54
第27図	第2主体部実測図	57
第28図	第2主体部石棺内床面プラン及び遺物出土状況実測図	58
第29図	第2主体部石棺除去後掘り方実測図	59
第30図	第3主体部実測図・同遺物出土状況実測図	61
第31図	第3主体部石棺床面プラン実測図	62
第32図	第3主体部石棺除去後掘り方実測図	63
第33図	吉佐山根1号墳SK01実測図・同遺物出土状況実測図	64

第34図	吉佐山根1号墳SK02実測図	65
第35図	吉佐山根1号墳出土遺物実測図(1)(S=1/2)	66
第36図	吉佐山根1号墳出土遺物実測図(2)(S=1/2)	67
第37図	穴神横穴墓群調査後地形測量図・遺構配置図(S=1/200)	73~74
第38図	穴神1号横穴墓実測図	75~76
第39図	穴神1号横穴墓石棺実測図	79~80
第40図	穴神1号横穴墓石棺前壁彩色壁画・線刻図文実測図(S=1/3)	83~84
第41図	穴神1号横穴墓出土遺物及び松浦氏所蔵伝出土遺物実測図	85
第42図	穴神1号横穴墓後背墳丘土層断面図(第37図P-P'、O'-O)	87~88
第43図	穴神1号横穴墓後背墳丘周辺出土遺物実測図(1)(S=1/6)	89~90
第44図	穴神1号横穴墓後背墳丘周辺出土遺物実測図(2)(S=1/3)	92
第45図	穴神2号横穴墓前庭部縦断土層断面図(第46図C-C')	94
第46図	穴神2号横穴墓実測図	95
第47図	穴神2号横穴墓前庭部左側壁小横穴実測図	96
第48図	穴神2号横穴墓石床実測図	97
第49図	穴神2号・3号横穴墓前庭部遺物出土状況図	99~100
第50図	穴神2号横穴墓前庭部出土遺物実測図(1)(S=1/3)	102
第51図	穴神2号横穴墓前庭部出土遺物実測図(2)(S=1/4)	103
第52図	穴神2号横穴墓遺物・閉塞石出土状況実測図	104
第53図	穴神2号横穴墓玄室内出土遺物実測図(1)(S=1/3)	105
第54図	穴神2号横穴墓玄室内出土遺物実測図(2)(S=1/3)	106
第55図	穴神2号横穴墓玄室内出土遺物実測図(3)(S=1/2)	108
第56図	穴神2号横穴墓玄室内出土遺物実測図(4)(S=1/2)	109~110
第57図	穴神3号横穴墓縦断土層断面図(第58図C-C')	112
第58図	穴神3号横穴墓実測図	113
第59図	穴神3号横穴墓前庭部左側壁小横穴実測図	114
第60図	穴神3号横穴墓前庭部右側壁小横穴実測図・同遺物出土状況実測図	115
第61図	穴神3号横穴墓前庭部出土遺物実測図(1)(S=1/3)	118
第62図	穴神3号横穴墓前庭部出土遺物実測図(2)(S=1/3)	119
第63図	穴神3号横穴墓前庭部出土遺物実測図(3)(S=1/2)	120
第64図	穴神3号横穴墓遺物・閉塞石出土状況実測図	123
第65図	穴神3号横穴墓玄室内出土遺物実測図(1)(S=1/3)	125
第66図	穴神3号横穴墓玄室内出土遺物実測図(2)(S=1/3)	126
第67図	穴神3号横穴墓玄室内出土遺物実測図(3)(S=1/2)	129~130
第68図	穴神2号・3号横穴墓正面図(第49図S-Nラインより)	131
第69図	穴神2号・3号横穴墓前庭部縦断土層断面図(第49図S-N)	131

第70図	穴神2号・3号横穴墓前庭部前方サブレンチ土層断面図(Q-Q'・R-R')	132
第71図	穴神4号小横穴墓実測図	133
(朽津論文)	図1 穴神1号横穴墓における赤色顔料採取地点	146
	図2 顔料試料採取前後の比較(穴神5の資料の場合) ←カラー写真	147
(三辻・松井論文)	図1 平ラII遺跡出土須恵器のRb-Srの分布図	153
	図2 穴神横穴墓群出土須恵器のRb-Srの分布図	153
(株式会社ソニー報告)	図1 画像処理の流れ	156

図 版 目 次

図版1	①上空からみた調査対象地全景(調査前) ②同 全景(調査後)
図版2	①平ラII遺跡調査前全景 ②同 調査後全景
図版3	①平ラII遺跡SI01, 02, 03 ②同 SB01
図版4	①同 SB01 遺物出土状況 ②同 SB02 ③同 SB03
図版5	①同 SB04 ②同 SB05
図版6	①平ラII遺跡1号横穴墓全景 ②同 前庭部遺物出土状況と閉塞状況
図版7	①同 玄室内遺物出土状況 ②平ラII遺跡SX01
図版8	①同 石棺検出状況 ②同 墳丘盛土土層断面 ③平ラII遺跡包含層遺物出土状況
図版9	①吉佐山根1号墳全景 ②同 主体部検出状況
図版10	①同 第1主体部石棺蓋石検出状況 ②同 第1主体部石棺内
図版11	①同 第2主体部石棺蓋石検出状況 ②同 第2主体部石棺内小室 ③同 刀子出土状況
図版12	①同 第2主体部石棺内 ②同 第3主体部石棺蓋石検出状況
図版13	①同 第3主体部石棺蓋石(粘土除去後) ②同 石棺閉蓋状況 ③同 刀子出土状況
図版14	①同 第3主体部石棺内 ②同 SK01 遺物出土状況
図版15	①同 SK01 ②吉佐山根1号墳の立地(北東下方から) ③同(墳丘から北下方をのぞむ)
図版16	①穴神1号横穴墓と後背墳丘 ②穴神1号横穴墓全景
図版17	①同 玄室内家形石棺 ②同 家形石棺床石配置状況
図版18	①同 石棺内左側壁 ②同 石棺内右側壁 ③穴神1号横穴墓後背墳丘土層断面
図版19	①同 後背墳丘周辺須恵器出土状況 ②同 横穴墓前庭部小横穴検出状況 ③同 完掘状況
図版20	①穴神2号・3号横穴墓全景 ②穴神2号横穴墓全景
図版21	①同 前庭部黒色埋土堆積状況 ②同 前庭部縦断土層断面 ③同 前庭部遺物出土状況
図版22	①同 横穴墓閉塞石直上の炭化物出土状況 ②同 閉塞石検出状況 ③同 玄室内調査前
図版23	①同 玄門部大刀出土状況(1) ②同 出土状況(2) ③同 玄室内遺物出土状況(1)

- 図版24 ①同 玄室内遺物出土状況 (2) ②同 出土状況 (3)
- 図版25 ①同 玄室内遺物出土状況 (4) ②同 出土状況 (5) ③同 玄室内石床 (1)
- 図版26 ①同 玄室内石床 (2) ②同 玄室内石床 (3) ③穴神2号横穴墓前庭部左側壁小横穴
- 図版27 ①穴神3号横穴墓全景 ②同 閉塞石検出状況
- 図版28 ①同 前庭部縦断面層断面 ②同 前庭部須恵器出土状況 ③同 前庭部鉄鍬出土状況
- 図版29 ①同 玄室内調査前 ②同 玄室内遺物出土状況 (1)
- 図版30 ①同 玄室内遺物出土状況 (2) ②穴神3号横穴墓前庭部右側壁小横穴
③穴神4号小横穴墓閉塞石検出状況
- 図版31 ①同 玄室内 (石床状の石組) ②穴神2・3・4号横穴墓全景 ③穴神横穴墓群全景
- 図版32 平らⅡ遺跡S101, 02, 03周辺出土土器
- 図版33 同 SB01, 03出土土器
- 図版34 同 SB02出土土器
- 図版35 同 1号横穴墓出土土器
- 図版36 同 包含層出土土器
- 図版37 同 包含層出土土器
- 図版38 同 包含層出土土器、石器、瓦、玉作関係遺物
- 図版39 吉佐山根1号墳出土遺物 (鉄製品)
- 図版40 穴神1号横穴墓出土土器 (松浦氏所藏品他)
- 図版41 穴神1号横穴墓出土土器 (松浦氏所藏品) ・同 後背墳丘周辺出土土器
- 図版42 穴神1号横穴墓後背墳丘周辺出土土器
- 図版43 穴神2号横穴墓前庭部出土土器
- 図版44 穴神2号横穴墓前庭部出土土器
- 図版45 穴神2号横穴墓玄室内出土土器
- 図版46 穴神2号横穴墓玄室内出土土器
- 図版47 穴神2号横穴墓玄室内出土土器
- 図版48 穴神2号横穴墓玄室内出土土器・鉄器他
- 図版49 穴神3号横穴墓前庭部出土土器
- 図版50 穴神3号横穴墓前庭部出土土器
- 図版51 穴神3号横穴墓前庭部出土土器
- 図版52 穴神3号横穴墓玄室内出土土器
- 図版53 穴神3号横穴墓玄室内出土土器
- 図版54 穴神3号横穴墓玄室内出土土器・大刀
- 図版55 ①穴神3号横穴墓玄室内出土鉄器・耳環 ②吉佐山根1号墳公開調査風景

第1章 調査に至る経緯

昭和47年5月26日付で、建設省松江国道工事事務所から鳥根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基本設計資料として、鳥根県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30,3kmにおける埋蔵文化財の有無について照会があった。

そこで、県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て昭和47年、48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果等をふまえ建設省からルート案が提示され、昭和48年7月には松江市東地区の予定ルートにかかわる遺跡の取り扱いについて協議があった。昭和49年7月には安来地区の清水一月坂間のルート案について協議があった。つづいて、昭和50年1月22日付で県教育委員会あて松江東地区と安来地区のうち清水一月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受けて、昭和50年7月には建設省と契約を取り交わし、昭和50年度、松江市竹矢町オノ峠古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早打町大坪古墳群の発掘調査を、昭和51年度には、松江市平所遺跡の関連再調査、東出雲町出雲郷夫敷遺跡の試掘調査を実施した。平所遺跡では、埴輪窯跡から馬・鹿・家・人物などの形象埴輪が出土し、52年6月には国の重要文化財に指定された。

昭和55年度・56年度には、昭和57年に開催が決定していた「くにびき」国体の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた）東出雲町出雲郷から松江市古志原町に至る5,4km間の7遺跡（東出雲町の春日遺跡、夫敷遺跡、松江市の布田遺跡、中竹矢遺跡、オノ峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）のうち2車線分を緊急に調査した。

その後、「松江バイパス」は高規格道路に設計変更され「松江道路」となり、昭和60年に建設省から前回調査した7遺跡の残り4車線分の調査依頼があった。調査は昭和61年度から平成3年度まで順次行った。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6,9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷－安来市吉佐町間の18,7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で予定ルートにも変更が生じたため、昭和62年度・63年度に再度分布調査を実施した。

発掘調査は、まず、安来市赤江町から島田町に至る6,9km（インター部を含む）において平成元年度から同4年度まで7遺跡（安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、同 白コクリ遺跡、同 岩屋口遺跡、黒井田町越峠遺跡、同 オノ神遺跡、島田町島田南遺跡）で実施し、平成4年度からは安来市荒島町－東出雲町出雲郷を「安来道路西地区」として、さらに、平成5年度からは安来市吉佐町－島田町を「安来道路東地区」として実施中である。

第2章 遺跡の位置と環境

平ラII遺跡、吉佐山根1号墳、穴神横穴墓群は、鳥根県安来市吉佐町に所在する。安来市は鳥根県の東端部にあり、北は中海に面し、南は中国山地から続く標高300m以下の山々がいくつもの低い尾根筋となって湖に迫っている。したがって、山地に比べ、平野部の割合は概して小さいが、それでも市内中央部には、飯梨川、吉田川、伯太川の三河川によって形成された県下有数の「穀倉地帯」安来平野が広がっている。今回の調査対象地は、市内の最東端、鳥取県米子市との、まさに「県境」の地に立地している。ここでは、安来市内、とりわけ遺跡の存在する同市島田地区周辺の遺跡を概観し、本遺跡の地理的、歴史的環境の一端を整理することとした。

安来市島田地区は、もと能義郡島田村と呼ばれていた市内東部の地域で、吉佐町、門生町、島田町、中海町、黒井田町からなっている。「出雲国風土記」に記載の意宇郡安来郷、榎槌郷、屋代郷に比定される地域であったと考えられている。吉佐町の南約1.5kmには、手間割が設置されていたといわれている。この場所は、まだ点として確認されているわけではないが、大きくずれるとは考え難く古代山陰道と遺跡の関わりを検討し続けなければならない地域である。

同地区の北には中海が広がり、南には中国山地から連なる山塊がのび、その先端はいたるところで中海にせり出している。中海に注ぐ河川はいずれも小さく、和田、細井、島田、門生、吉佐に小規模な平地が存在する。多くの遺跡はこうした平地とその縁辺の丘陵上や斜面に集中して存在している。また、この丘陵地には、今日、筍や梨など地域の特産品が盛んに栽培されている。

以下、周辺に存在する遺跡について概観しておく。

安来市内では、縄文時代の遺跡は従来あまり知られていなかったが、安来道路予定地内の近年の調査で、同地区の島田黒谷I遺跡や明子谷遺跡で縄文時代前期から後期にかけての土器が多量に検出された。いずれも二次的に流れこんだ土層に含まれており、遺構は認められなかったが、付近に大きな集落跡があることが推定される。

弥生時代になると、前期の遺跡は明らかでないものの、中期の後半には山の神遺跡、高広遺跡などで堅穴住居跡が見つかっている。弥生時代後期には猫ノ谷遺跡、普請場遺跡、カンボウ遺跡、石田遺跡などで集落が営まれるようになった。また長曾土墳墓群のような群集する土墳墓も作られたり、島田黒谷III遺跡のような木棺墓も出現する。

古墳時代前期には、箱式石棺と古式土師器の土師器を埋葬施設とし鉄剣2本を出土した八幡山古墳(円墳)や、今回調査した箱式石棺3基が計画的に配置された吉佐山根1号墳(方墳)が知られている。また、島田黒谷I遺跡では古式土師器の出土する溝跡があり、生活の痕跡をとどめている。

古墳時代中期になると、島田地区の遺跡は一挙に増加する。まず、古墳としては、全長50mの前方後円墳で荒島石製の圓錐突起をもつ舟形石棺を埋葬施設とする鹿壳塚古墳が挙げられる。この古墳は、川原石を主とした葺石を施し、円筒埴輪も巡っている。遺物として、棺外からは鉄矛1本、鉄鏃3点以上が、棺内からは鉄剣2本以上、金銅製空玉3点が検出された。墳形が前方後円形であること、比較的豊富に金属製品を副葬していること、また、『出雲国風土記』にある語臣猪麻呂の説話に縁の古

墳として、月の輪神事と呼ぶ祭事が継承されていることは注目される。また、生産遺跡としては、出雲地方で最も古い須恵器窯跡の一つで山陰須恵器編年のⅠ期とされる門生古窯跡群が存在する。この古窯跡群は、高畑地区と山根地区からなっている。高畑地区は、従来高畑古窯跡群と呼ばれていたところで複数の散布地があり、窯の本体も複数存在するものと推察されている。なお、昭和56年に中国電力線の鉄塔建設に伴って安来市教育委員会が同地区で実施した発掘調査では、須恵器工房跡が確認されている。山根地区では、高畑地区より1段階古いと考えられる須恵器が採集されている。安来道路予定地内の発掘調査では、平成5年度の門生黒谷Ⅰ遺跡から、この地区に属す須恵器窯跡本体が発見され、6年度に本調査を実施し良好な資料が追加されつつある。また、市内の玉作関係遺跡については、平成4年度に発掘調査した安来道路予定地内遺跡の佐久保町、大原遺跡が著名であるが、このたび、プラⅡ遺跡からも玉作関係遺物が検出された。両者は時期的に近似しており、この時期の土作が市内の広範囲に分布している可能性も出てきた。この他集落跡としては、Ⅰ期の須恵器を伴う堅穴住居跡が確認されたものとして、長曾遺跡、門生山根遺跡、カンボウ遺跡などが知られている。

古墳時代後期になると、毘売塚古墳の東の丘陵に長持形石棺2基を埋葬施設とする客さん古墳が築造される。また、吉佐町には横穴式石室を埋葬施設とする神代塚古墳と吉佐只姫塚古墳が隣接して存在する。安来市においては、横穴式石室は飯梨川以西に主に分布し、飯梨川以東ではこの吉佐町の数例しか存在しない。その他、主要な谷には横穴墓が造られるようになる。四柱式もしくは擬似四柱式で平入りのタイプが主流を占めるのは市内の他地域と共通する。ただし、特筆すべき事例として、双竜環頭大刀が出土した高広Ⅳ区1号横穴と、今回調査した彩色装飾壁画を描き端正な丹塗りの横口式家形石棺を持つ穴神Ⅰ号横穴墓がある。集落跡としては、カンボウ遺跡、石田遺跡、山の神遺跡、高広遺跡、やや時期的に下って、このたびのプラⅡ遺跡が知られている。

奈良時代には、五反田遺跡、普請場遺跡、島田南遺跡などで集落跡が確認されている。とりわけ、島田南遺跡では、墨書土器、ヘラ描き土器、スラグが出土し、古代の役所との関連も考慮されている。

以上、縄文時代から奈良時代にかけての島田地区周辺の遺跡を時代ごとに概観した。

この地区は古代以来、飯梨、吉田、伯太の3河川が織り成す安来平野近隣の他地域とは、農業生産の基盤となる平野規模において隔絶の感が否めない。しかし、そうした地理的条件に関わらず、古墳時代中期に出雲で最古級の門生古窯跡群の出現をみたり、後期には飯梨川以東では極めて稀有な横穴式石室が吉佐町に築造されたり、彩色装飾壁画を持つ穴神横穴墓が存在するなど、地域の独自性を物語る多くの遺跡が存在している。こうした事象は、古代の島田地区を農業生産基盤のみの視点で語ることの限界を示し、おそらくは中海を介した水運と交易など、他の生産と流通に視野を拡大すべき必要性を訴える。今後の調査成果の蓄積と詳細な検討が進めば、特色ある地域史像の解明が大いに期待される「クニ境」の土地である。



第1図 調査対象地の位置と周辺の遺跡

周 辺 の 遺 跡 一 覧 表

番号	遺 跡 名	所 在 地	内 容	概 要
1	平Ⅱ遺跡 吉佐山根1号墳 穴神横穴墓群	安来市吉佐町	古墳 横穴墓 集落跡	土師器、須恵器、鉄器、 布目瓦、工作関係(碧玉等)
2	八幡山古墳	安来市吉佐町	古墳	箱式石棺、鉄剣、合せ土師棺
3	国吉山古墳群	安来市吉佐町	古墳	
4	吉佐古墳	安来市吉佐町	古墳	円墳3基
5	六の坪遺跡	安来市吉佐町	集落跡	土師器、須恵器
6	国吉遺跡	安来市吉佐町	石室・土墳墓	
7	カンボウ遺跡	安来市吉佐町	古墳、集落跡	堅穴住居跡、弥生土器、土師器、須恵器
8	神代塚古墳	安来市吉佐町	古墳	横穴式石室、須恵器
9	神宮古墳群	安来市吉佐町	古墳	円墳
10	吉佐貝塚塚古墳	安来市吉佐町	古墳	横穴式石室、須恵器
11	石田遺跡	安来市吉佐町	古墳、集落跡	堅穴住居跡、弥生土器、土師器、須恵器
12	四方神古墳	安来市吉佐町	古墳	方墳
13	油田・平古墳群	安来市吉佐町	古墳	
14	平横穴群	安来市吉佐町	横穴墓	直刀、須恵器、陶棺、円筒埴輪
15	山ノ神古墳	安来市吉佐町	古墳	
16	河原崎古墳群	安来市吉佐町	古墳	2基
17	八幡山遺跡	安来市吉佐町	散布地	土師器
18	茶屋畑地寺	安来市吉佐町	寺院跡	須恵器、土師器、布目瓦
19	小枝毛遺跡	安来市吉佐町	散布地	石斧
20	塚根山横穴群	安来市吉佐町	横穴墓	4穴、四柱式平入り
21	塚根山古墳群	安来市吉佐町	古墳	2基
22	嵩横穴	安来市吉佐町	横穴墓	四柱式平入り
23	平Ⅰ遺跡	安来市吉佐町	散布地	土師器、須恵器、布目瓦、陶磁器
24	松本古墳	安来市吉佐町	古墳	箱式石棺
25	山ノ神遺跡	安来市吉佐町	集落跡	弥生土器、土師器、須恵器
26	徳見津遺跡	安来市吉佐町	集落跡	須恵器、土師器、鉄製品
27	川越遺跡	安来市吉佐町	木棺墓	
28	瓦反田遺跡	安来市吉佐町	集落跡	土師器、須恵器、鍛冶炉
29	八坂古墳	安来市門生町	古墳	円筒埴輪
30	八坂塚塚	安来市門生町	塚塚	
31	小崎遺跡	安来市門生町	散布地	弥生土器
32	柳田古墳群	安来市門生町	古墳	円墳2基
33	下口古墳群	安来市門生町	古墳	円墳2基
34	常福寺山土墳墓	安来市門生町	土墳墓	
35	山根古墳	安来市門生町	古墳	前方後円墳
36	陽徳塚塚	安来市門生町	塚塚	一字、石路
37	陽徳遺跡	安来市門生町	集落、古墳	弥生土器、土師質土器
38	陽徳寺遺跡	安来市門生町	寺院跡	土師器、須恵器、陶磁器、五輪塔
39	大蔵神社古墳	安来市門生町	古墳	方墳か?
40	門生・山根遺跡	安来市門生町	集落跡	堅穴住居、埴埴土
41	岩崎山横穴	安来市須崎町	横穴墓	直刀、須恵器
42	赤崎山横穴	安来市島田町	横穴墓	丸天井形
43	ちょう塚古墳	安来市島田町	古墳	円墳、陶棺
44	東谷古墳群	安来市島田町	古墳	人物埴輪
45	門生古高瀬群高畑地区	安来市門生町	高瀬群	須恵器散布地、須恵器工房跡
46	黒谷古墳群	安来市門生町	古墳	方墳、円墳
47	門生黒谷Ⅱ遺跡	安来市門生町	集落跡	土師器、須恵器、スラグ、藤輪陶器
48	門生黒谷Ⅰ遺跡	安来市門生町	古墳、集落跡	五反田古墳群(円墳)、土師器、円筒埴輪、弥生土器
49	ウガフキ跡	安来市門生町	跡	スラグ
50	門生古高瀬群山根地区	安来市門生町	高瀬群	須恵器散布地
51	門生黒谷Ⅰ遺跡	安来市門生町	集落跡、窯跡	須恵器遺体、須恵器
52	島田黒谷Ⅱ遺跡	安来市島田町	墳墓群等	木棺墓、箱式石棺、土墳墓、菅玉 須恵器
53	島田黒谷Ⅰ遺跡	安来市島田町	散布地	
54	島田黒谷Ⅱ遺跡	安来市島田町	集落跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器
55	島田黒谷Ⅰ遺跡	安来市島田町	集落跡	堅穴住居、加丁段、弥生土器、土師器
56	普請嶋遺跡	安来市島田町	集落跡	
57	島田南遺跡	安来市島田町	集落跡	掘立柱建物跡、土師器、須恵器、黒雲土器、ヘラ掘き土器

【参考文献】

- ・加藤義成 『出雲国風土記』 昭和40年12月 今井書店
- ・山本 清 「山陰の石棺について（割竹形・舟形系の石棺）」『山陰文化研究紀要』7号 昭和41年
- ・同 「山陰の石棺について（長持形系の石棺）」『山陰文化研究紀要』8号 昭和42年
- ・同 「山陰の石棺について（家形系の石棺）」『山陰文化研究紀要』10号 昭和45年
- ・安来市教育委員会『長曾土墳墓群』 1981年
- ・永見 英 『島根県安来市門生の高畑遺跡の調査』『日本考古学年報』34 1984年
- ・大森隆雄・卜部吉博 「門生古窯跡群山根地区の古窯」『島根県生産遺跡分布調査報告書 窯業関係』（島根県教育委員会） 1985年3月
- ・東森市良 「7章 八幡山古墳」『安来市内遺跡分布調査概報Ⅱ－宇賀荘・島田・安来地区－』（安来市教育委員会） 1989年
- ・島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』 1984年3月
- ・同 『島田南遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』 1992年3月
- ・同 『大原遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』 1994年3月
- ・同 『明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡・猫ノ谷遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』 1994年3月
- ・同 『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』 1994年3月

第3章 調査の概要と経過

現地調査は、平成5年4月15日のトレンチ調査に始まる。当初、3遺跡を『平ラⅡ遺跡』と総称していたが、同年4月、トレンチ調査を進める過程で、古墳が丘陵頂部に存在することが明確となった。そこで、土地の字名から『吉佐山根1号墳』と呼称し、『平ラⅡ遺跡』と区別した。また、同月、周知遺跡の「穴神横穴」が道路予定地の境界付近に存在することが判明し、5月までに電気探査とトレンチ調査をすすめた結果、この横穴付近に新たに数基の横穴が開口する見通しとなった。そこで、これらも「平ラⅡ遺跡」と区別し、『穴神横穴墓群』と名付けた。

その後、トレンチ調査の結果を元に、同年5月21日には、発掘調査区を設定し(第2図)、平ラⅡ遺跡、吉佐山根1号墳、穴神横穴墓群の順で全面発掘調査に着手した。調査前はほとんどが山林もしくは竹林であった。その後発掘作業は、同年12月22日の作業員撤収を以て終了した。ただし、穴神横穴墓群は実測作業の補足、後述する彩色装飾壁画の発見に伴う追加調査を翌平成6年度に実施し、同年12月迄に全てを完了した。

なお、平成5年11月20日には、3遺跡で現地説明会を実施し、200名を超える見学者が訪れた。

以下、各遺跡(調査区)の調査経過の補足と調査概要を述べておく。

平ラⅡ遺跡(第4図)

調査地は、現在の中海沿岸から南へ直線距離で700~800m程陸地にはいった標高約50mを超える馬蹄形をした丘陵の尾根上と、その尾根に囲まれて南西方向に開く標高約45m以上の小さな谷の緩斜面に立地している。調査区の南方および東方は急傾斜面となっており、その下方には御茶屋川の流れる小さな谷と石田遺跡・カンボウ遺跡のある小平野が広がっている。西方も、急斜面が日立ち、下方には平ラⅠ遺跡のある狭小な谷が隣接している。北方には、穴神横穴墓群のある丘陵が尾根続きで隣接し、南北方向にのびている。当遺跡の立地は今でこそ山中に近い印象を持つが、古代の中海は現在の沿岸から数百メートルは湾入していたものと推測され、現状よりはるかに水辺に近い場所であったとも考えられる。

調査は、上記のとおり5月から12月の間、継続して全面発掘を行った。その結果、遺構としては馬蹄形の尾根に囲まれた谷間の平坦面から古墳時代中期頃(5世紀代)の堅穴住居跡3棟と緩斜面を断面L字状にカットして造出した古墳時代終末頃(7世紀代)の掘立柱建物跡5棟を検出した。しかし、そのほとんどは床面や壁面の半分以上が流失しており、柱穴の配列、建物の規模、切り合い関係は判然としなかった。また、この二時期の集落跡に加え緩斜面の中腹から古墳時代終末頃の横穴墓1基(1号横穴墓)と古墳の盛り土が流出したと思われる箱式石棺1基(SX01)を検出した。遺物は、堅穴住居跡の周辺から、多数の土師器片と須恵器片、碧玉片等の玉作関係遺物等が出土し、玉作工房跡としての可能性を示唆した。掘立柱建物跡の周辺からは、須恵器の蓋杯、土師器の甌、甕、壺や土製支脚など日常的な生活を思わせる多数の土器片が出土した。1号横穴墓の玄室内では、大小の角礫を用いた屍床が検出され、そこには土師器と須恵器の数個体が意図的に破砕されて敷かれていた。前庭部からは、完形の須恵器と若干の土師器片が出土した。その他、谷間の平坦面を中心に遺物包含層が

広がり、多量の上器片のほか、布目瓦、石鏃・石斧等の石器類、砥石・碧玉片といった玉作関係遺物等が出土した。

吉佐山根1号墳（第4図、第24図）

当古墳は、平ラII遺跡のトレンチ調査の最中、馬蹄形をした尾根の丘陵頂部を表土以下10cm程掘り下げた際、偶然鍬先が石棺の蓋石に当たったのが発見のきっかけであった。標高56m以上を測り、北方眼下には中海、弓ヶ浜、日本海、鳥根半島を眺望し、南東には大山の頂を見上げ得る見晴らしの大変良い土地にある。

調査は4月の発見から12月まで天候に留意しつつ断続的に行った。その結果、当古墳は1辺10m弱の「コの字」形の溝で周囲を画した古墳時代前期の低墳丘の方墳と判明した。埋葬施設としては、一部切り合いながらも各々の墓壇を持つ箱式石棺3基が検出された。その他に土坑2と溝状遺構1も検出されている。遺物としては、周溝の底面近くから古式土師器の小片数点と石棺内から刀子2点および赤色顔料が出土している。また、古墳との直接的な帰属関係は薄いと思われる土壌（SK01）から、環状の鉄製品2点、鈴状の鉄製品5点、刀子1点が副葬を推定させる状況で出土した。

なお、現地説明会とは別に、平成5年7月15日には、箱式石棺（第1主体部）の開蓋作業を一般公開し100名程の見学者や報道関係者が見学に訪れた。

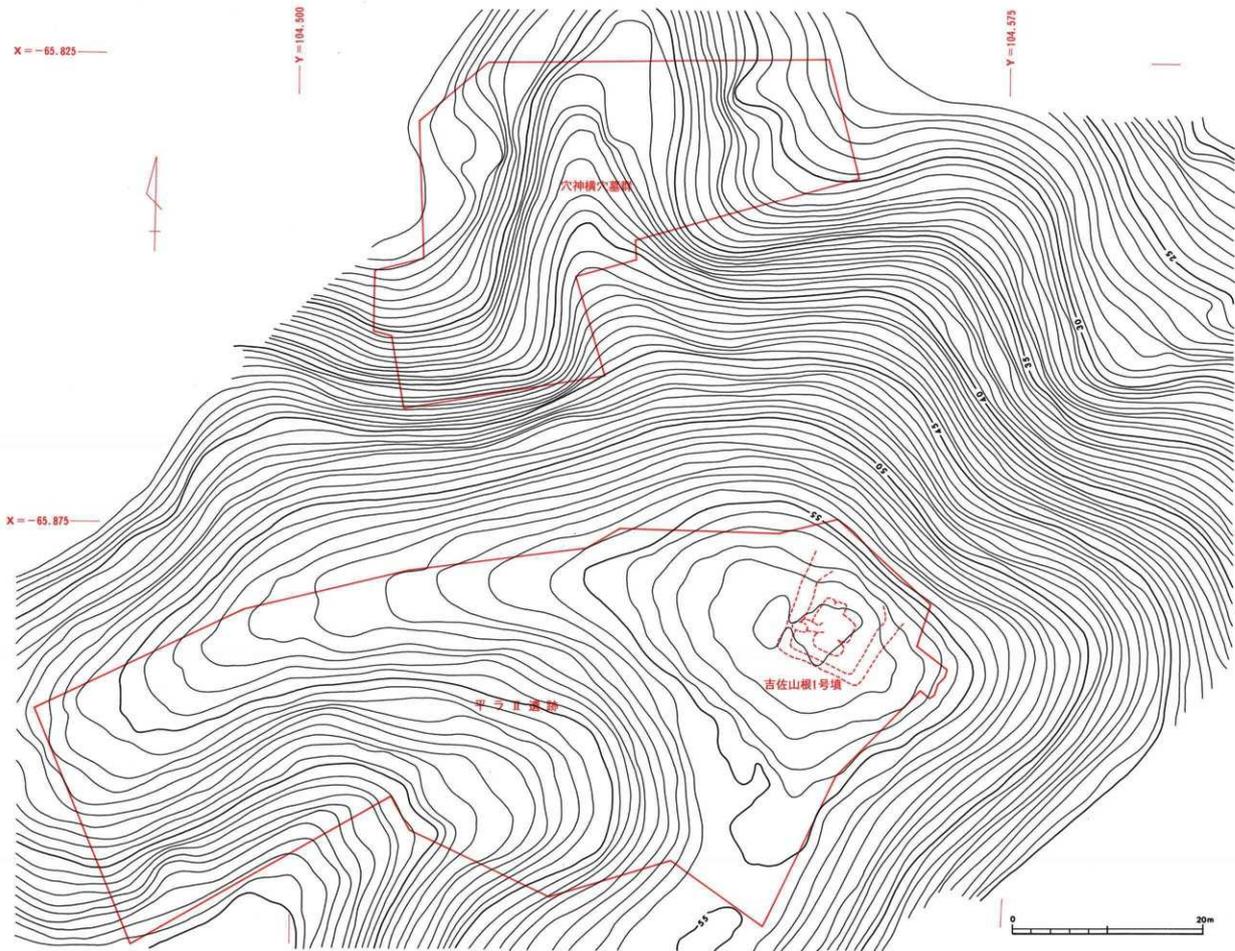
穴神横穴墓群（第37図）

当横穴墓群は中海から南北方向にのびる標高40m以下の丘陵斜面にある。この丘陵周辺には油田・平古墳群や平横穴群、四方神古墳など古墳時代の遺跡が多く確認されている。遺跡の南には平ラII遺跡、吉佐山根1号墳のある丘陵が急斜面を経て続いており、東西には平ラII遺跡同様、それぞれ石田・カンボウ遺跡のある小平野と平ラI遺跡のある小さな谷が広がっている。現地形では、「小谷の奥まった箇所」に立地する」といった印象を得た。

発掘調査は、まず平成5年9月から12月の間、戦前に発掘され精緻な丹塗りの家形石棺を持つことで著名であった穴神横穴（以下、穴神1号横穴墓）の再調査と、それと尾根を挟んだ反対斜面から検出された2基の未盗掘の横穴墓（穴神2号・3号）、1基の小横穴墓（穴神4号）の調査を実施した。その結果、1号横穴墓については、遺物は須恵器片数点を採取しただけだが、石棺の詳細が判明し、前庭部から小横穴1基を検出した。さらに、直上の尾根から後背墳丘らしきマウンドと破砕された須恵器片多数を検出した。2号、3号横穴墓については、前庭部、玄室内から須恵器をはじめ大刀、刀子、鉄鏃、耳環の金属器類など質量共に優れた副葬品が出土し、前者の玄室内からは、切り石を用いた有縁の石床が検出された。これらの横穴墓の玄室は、いずれも床面方形の擬似四注式平入りのタイプを呈していた。いずれも、古墳時代後期、6世紀後半から7世紀前後に築造され、7世紀前半にかけて使用されたもの推測される。

続いて、平成6年1月、1号横穴墓の石棺実測と精査を進める過程で、かつて『安来市史』でも触れられていた、左右前面の彩色壁画の存在が確実となった。古墳時代の彩色壁画の発見は県内初であり、石棺に描かれたものとしては九州地方を除き、本州唯一の事例となった。これは、当横穴墓の被葬者像と古代出雲と九州の交流を物語り得る貴重な発見であった。

その後、調査指導と慎重な分析を重ね、同年5月6日に記者発表し、5月8日には現地公開を行った。当日は300名を超える見学者が訪れ、その後も県内外から大きな関心が寄せられている。



第2図 平ラ耳遺跡、吉佐山根1号墳、穴神横穴墓群 調査前地形測量図・調査区設定図

第4章 平ラII遺跡の調査

第1節 遺構と遺物

基本層序 (第3図)

当遺跡は元山林として利用されていたこともあり、調査開始当初、表土には大小の木根がはびこっていた。そのため人力での掘削は難渋を極め、止むを得ず、トレンチ調査で遺構・遺物の確認されなかった尾根上から重機を導入させ、吉佐山根1号墳に影響の無い調査区全域について重機による表土掘削を実施した。遺構は、すべて馬蹄形の尾根上では無く、尾根に囲まれた小さな谷間の緩斜面と平坦面から検出されたが、基本的な土層堆積の状況は、図示したとおりS'-S断面(第4図)において代表される。

掘立柱建物跡の検出された斜面中腹では、表土から地山面へは約70~80cmの深さを測った。表土層は重機掘削によってはっきりしないが約10cm以下の腐植土の堆積(図示せず。)が認められ、その下に、淡褐色土(1層)もしくは、淡黄褐色土(3層、遺物包含層)、淡褐色土(7層)が堆積していた。この3層は緻密な砂粒子からなり、非常に近似した性質を示したが、色調と包含される遺物の種類を考慮して一応分層しておいた。さらに、地山面へは、この3層のいずれかが直接到達するか、それぞれの下層に暗褐色土(6層、遺物包含層)を挟んで到達する状況が、どの遺構においても普遍的に認められた。掘立柱建物跡の柱穴、溝等は、ほぼ地山面のレベルにおいて検出された。しかし、このレベルで検出される柱穴等の多くは概してその機能を果たし得ないほど浅く、また建物の床、壁などは半分以上が損なわれた状態で検出された。このことは、当時の遺構構築面が、遺構検出面(地山面)と等しくないことを物語る。おそらくは建物の廃絶後、斜面を流れる雨水に遺構構築面は侵食され、やがて流れこんだ土砂によって埋没したものと推測される。したがって、これらの建物跡の覆土に包含される遺物もただちに遺構との同伴関係を指すものではなく、他所からの流入が十分考えられる出土状況にあった。

一方、竪穴住居が検出された浅い谷底の平坦面では表土層は重機掘削のため判然としないが、およそ表土から地山面までは約90cmを測った。表土の下は、住居跡(SI03)においては、その覆土である淡黒褐色土(4層、遺物包含)が約30cm堆積し、その下に黒褐色土(5層、遺物包含)が約30cm堆積して地山面に到達した。遺構検出面、遺構構築面はともにほぼ地山面であった。しかし、遺構の床面・壁面は流失によって大きく損なわれていた。住居跡周辺の遺構外においては、表土から地山面までの深さは約80cmを測った。表土以下には、黒褐色土(4層、遺物包含層)が約20cm、暗褐色土(6層、遺物包含層)が約60cmの順で堆積していた。

これら浅い谷底の平坦面は、ちょうど摺り鉢の底のような地形を呈しており、堆積上の大部分は、風雨によって周囲の緩斜面の土砂が恒常的に下方へ流出し、再堆積を重ねたものと思われる。このことは、雨中の調査現場における泥水の激しい流出状況からしても体験的に認識された。

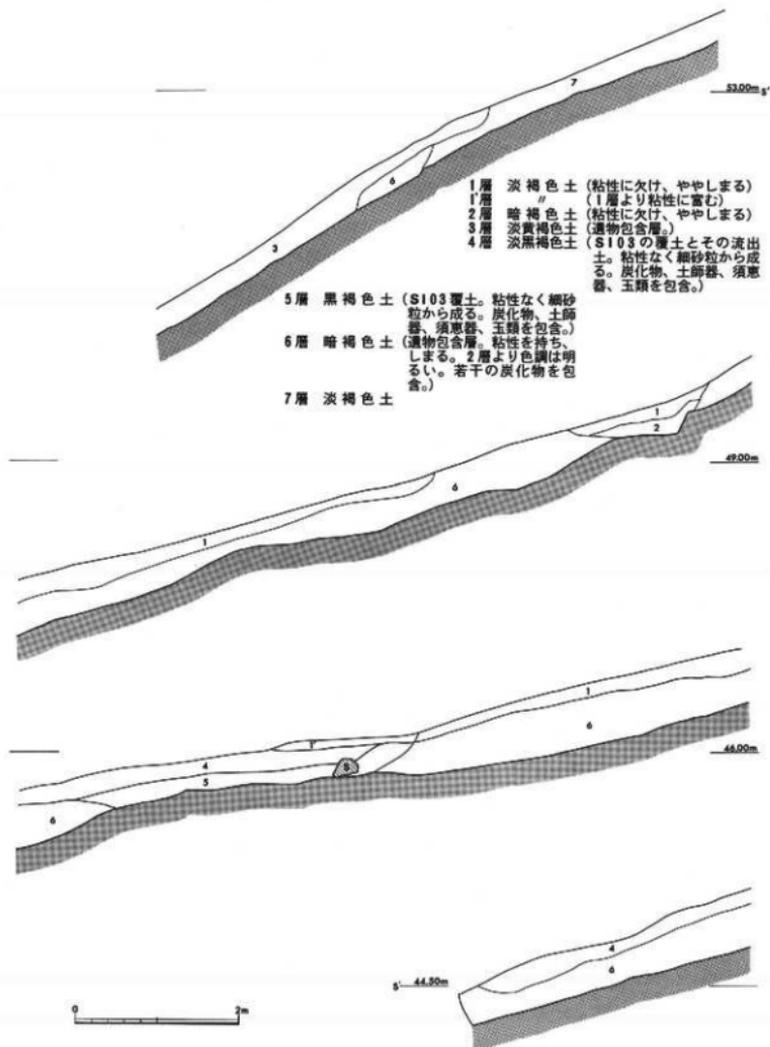
発掘調査は、以上の基本層序を把握しつつ、1層づつ平面的に掘り下げることを原則にした。ただし、前述のとおり、表土下の1層、3層、7層の淡褐色系の土層の分別は容易にできず、結果的に単

層扱いとして、確実な遺構検出面（地山面）まで掘り下げるが多かった。

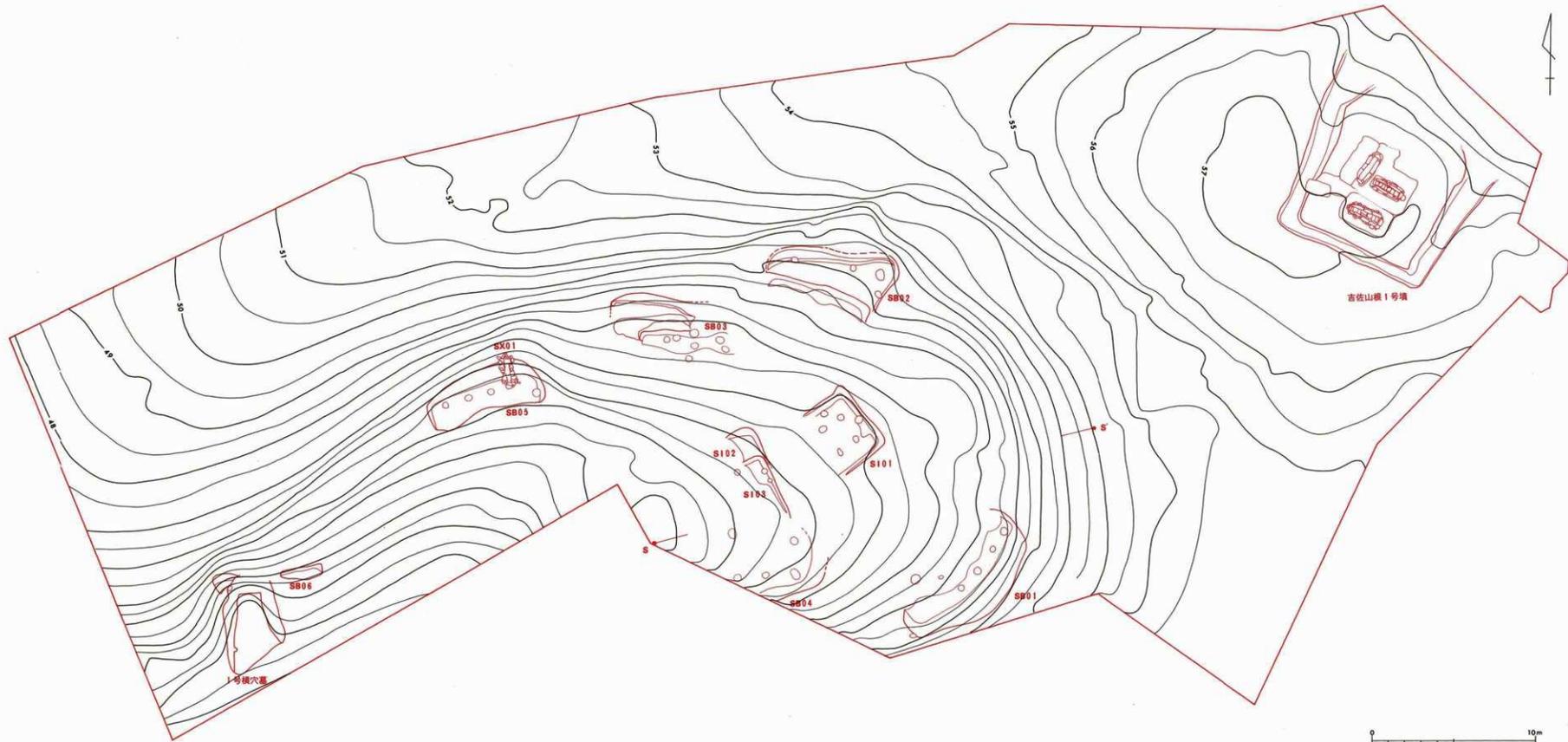
(1) 竪穴住居跡と出土遺物

S101 (第5図)

位置 調査区の中央やや南寄りの浅い谷間の平坦面に位置する。床面の標高は約46.60~46.80m前後



第3図 平ラII遺跡 基本土層断面図 (第4図S'-S)



第4図 平ラII遺跡、吉佐山根1号墳 調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1/200)

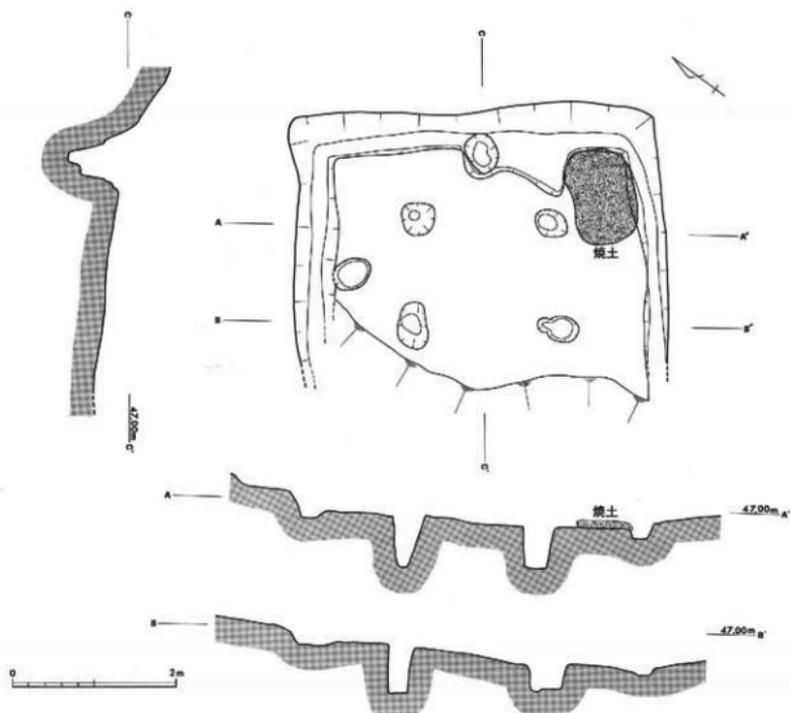
を測る。

形状 方形の竪穴住居。プランが検出されたのは、地山面であったが、掘り下げたところ、壁面の上場と、南西側の壁面と床面は流失のためほとんどが損なわれていた。そのため壁の高さ、形状は判然としませんが、北西側の残存部で30cm前後である。床面（壁の下場）は北東側の一辺で380cmを測る。

覆土 土師器片、須恵器片を包含する暗褐色土（基本層序の6層に対応）の単層からなる。地山付近から土師器や焼土、微量の炭化物を検出した。ピット内も基本的には同層からなるが下層ほど焼土と炭化物の含有量が増し、灰褐色へと移行する。

床面 約3分の2が残存する。床面は、ほぼ地山面と推測され、残存する3辺の壁面に沿って周溝が検出された。周溝は、深さ約10cm、底面幅約20cm前後を測り、北東側の一部では最大幅が70cmと大きく広がる。また、北東側の溝のほぼ中央には長径50cmの楕円形ピットが認められる。なお、床面の東隅からは、厚さ8cm前後、最大幅110cmにわたって赤褐色の焼土塊が検出された。

柱穴 残存部から、6個のピットを検出した。この内、床面中程の4つのピットが、各々対となり、方形の規格性ある配置（長辺180cm×短辺140cm）を示し、深さも40~70cmと深いことから、本住居の支柱穴と考えられる。なお、前述した北東側の溝の中央にあるピットは、深さ（60cm強）、直径、形



第5図 S101実測図

状が先の4つのピットと類似している。さらに、4つのピットとは5角形の頂点という位置関係にあることから、このピットが支柱穴であった可能性も有している。

この他、北西側の溝に近接するピットは、深さ約5cmと浅く柱穴か否かは不明である。

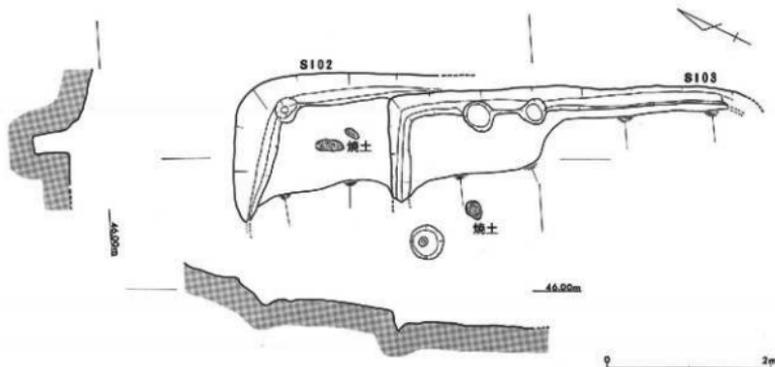
出土遺物 (第7図、1・2・3・6)

土師器 覆土中および地山面から小片が十数点出土したが、実測可能な遺物はわずかであった。1は、緩く外傾する退化した複合口縁をもつ甕である。口縁部の一部で、残存高5cmを測る。調整は内面の体部に横方向のヘラケズリ、頸部以上に横ナデ、外面に横ナデを施す。床面直上から出土した。松山智弘氏の古墳時代前半期の土師器編年(以下、松山編年²¹⁾)に従えば、Ⅱ期新～Ⅲ期に該当する。2は、床面の焼土直上から出土した高杯である。脚頂部のみで、残存高2.6cmを測る。調整は杯部内面にヨコナデ、外面に縦方向のハケメを施す。3は、覆土中から出土した小型丸底甕である。頸部から口縁部へと大きく外傾し、口縁端部にかけては若干内湾気味である。丸底の胴部は、球形に近く、よく張った肩部がついている。約2分の1が残存し、復元口径8.3cm、器高13cm、胴部最大径9.7cm、頸部径5.4cmを測る。調整は、内面の頸部から肩部にかけて斜め方向の指ナデ、胴部中程に横方向の指ナデ、そこから底部にかけて縦方向の指ナデを施す。外面は風化のため不明である。県内に余り類例の無い器形である。6は、覆土中から出土した緩く外傾しかろうじて複合口縁の残る甕である。頸部の細片で、残存高4.8cm、復元頸部径13.2cmを測る。調整は内面胴部に横方向のヘラケズリ、頸部以上と外面にヨコナデを施す。松山編年Ⅲ期に該当する可能性がある。

その他 床面の焼土表層から、微量だが、焼かれて変色した碧玉の剥片(径1cm弱)が出土した。時期 方形プランの遺構と資料的制約を承知の上で伴出土器を重視すれば、古墳時代中期中葉から後葉に比定される。

遺構の性格 通常の住居跡ではあるが、碧玉の剥片の出土から玉作に関わる可能性もある。

S102, S103 (第6図)



第6図 S102・03実測図

位置 S I 0 1 から南西方向へ4 mほど斜面を下った平坦面に位置する。床面の標高はS I 0 2 が約45.90 m、S I 0 3 が45.60 m前後を測る。

形状 壁面、床面の大部分が流失したかのように損なわれているが、北東側の残存部からして、2棟の方形プランの竪穴住居と推定される。壁の高さ、形状は判然としない。2棟は切り合い関係にあるが、その先後関係は、遺構プランの平面検出時に覆土のかすかな相違が認められ、S I 0 3 が既存のS I 0 2 を破壊して構築された可能性が高い。ただし、両者の覆土を断面観察した際には、それを裏付ける層序関係は確認できなかった。規模は、残存するS I 0 3 の床面（壁の下場）の北東側の一辺で、約400cmを測る。

覆土 S I 0 2 は炭化物、土師器片と微量の碧玉剥片を包含する淡黒褐色土（基本層序の4層）の単層からなり、S I 0 3 は、この層が約30cm、その下に同じく炭化物、土師器と微量の碧玉剥片を包含する黒褐色土（基本層序の5層）が約20cm堆積する2層からなった。両者とも地山付近から土師器や焼土塊、炭化物を検出した。ピット内も基本的には同層からなるが下層ほど炭化物の含有量が増し、黒色がかかる。

床面 2棟とも床面はほぼ地山面と推測されるが、流失のためかほとんど残存していない。しかし残存する各々2辺の壁面に沿ってS I 0 1 と同じく周溝が検出された。溝は、深さ約10cm、底面幅約7～15cm前後を測り、S I 0 2 は、北隅に1個、S I 0 3 は北東側の一辺に2個のピットを持つ。

柱穴 周溝の底面においてS I 0 2 は北隅に1個、S I 0 3 は北東側の一辺に2個のピットを検出した。形状、直径、深さ等が類似するが、性格は不明である。なお、図中、非残存部にピットがもう1個存在するが、詳細は不明である。

出土遺物（第7図、4・5）

土師器 覆土中および地山面から小片が十数近く出土したが、実測可能な遺物はわずかであった。4は、やや上げ底気味に内湾する高台状の底部を持ち、体部にかけて大きく外傾する杯である。底部周辺が残存し、底径で2.9cm、残存高4.2cmを測る。調整は底部の内面に指押えの跡が残り、外面には指ナデを施す。S I 0 2 のほぼ床面直上から出土した。松江市勝負遺跡S I 0 7 に類似資料が知られる。松山編年N期に該当する可能性がある。5は、丸底で体部に丸味をもつ杯である。約4分の1残存し、復元口径12.1cm、器高6.3cmを測る。体部中程に黒斑がめぐる。調整は風化によって不明だが精製品ではない。S I 0 3 のほぼ床面直上から出土した。松江市堤廻遺跡S I 0 6 に類似資料が知られる。松山編年N期に該当する。

その他 覆土中から、碧玉の剥片（径1cm弱）等が微量出土した。

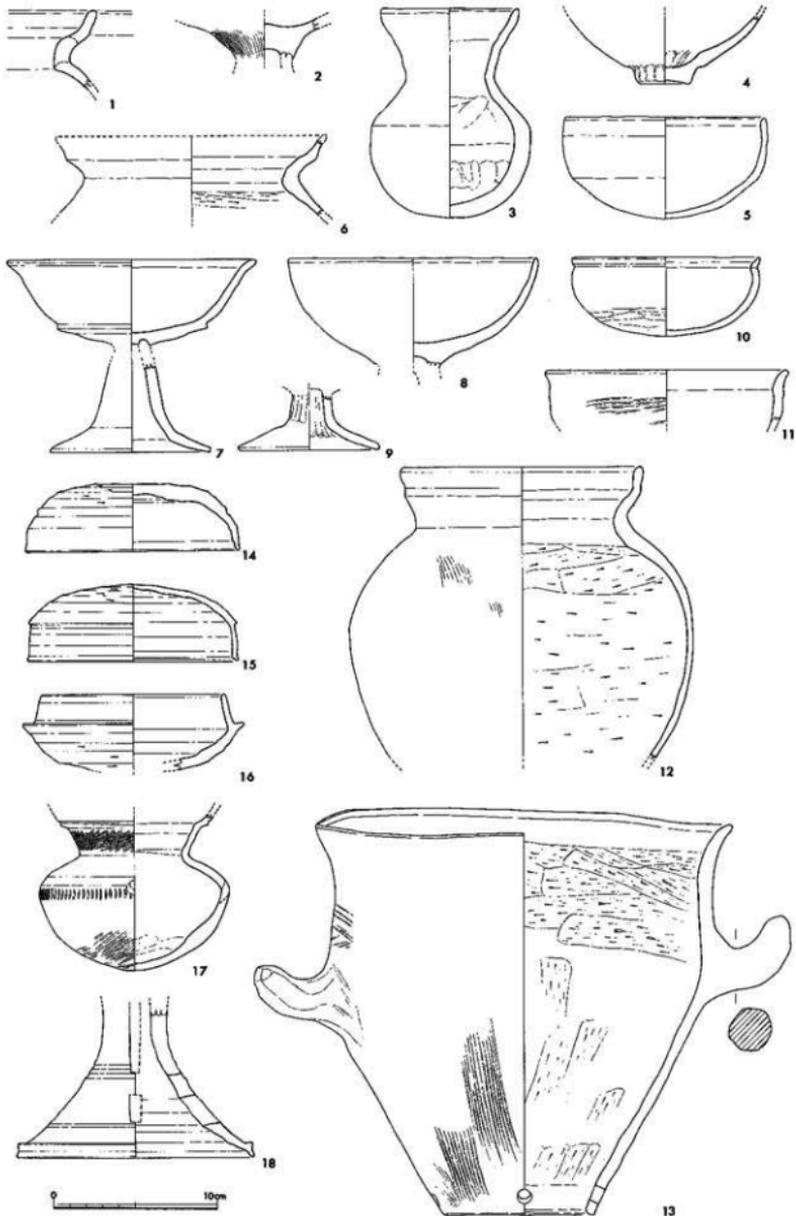
周辺包含層出土遺物 土師器・須恵器（第7図7～18）、玉作関係遺物（第23図1～12）

<出土状況> S I 0 2・0 3 の南西の斜面下方一帯に、遺物包含層（第3図）がみられた。土層は2～3層に分けられ、上が住居跡の覆土とほとんど同一の性質を持つ淡黒褐色土層（基本土層の4層）、下が同じく黒褐色土層（同5層）あるいは暗褐色土層（同6層）であった。遺物は、近接する住居跡（S I 0 2, 0 3）から覆土とともに、もしくは単独で流れこみ集積したかの出土状況を示し、竪穴住居の時期比定に有効な資料と推測された。多量の土師器片（400点余り）を中心に、須恵器片十数点と、碧玉の剥片、未製品などを含む玉作関係遺物も多くみられた。出土量は、黒褐色土層からの出

土(約300点)が圧倒的多数を占め、淡黒褐色土層(約100点)がそれに次いだ。これらの層は、炭化物の包含が顕著であった。暗褐色土層からは表層から土器小片が十点程出土しただけであった。

土師器 7・8・9は高杯である。7は、大きく外反する口縁とよく開く脚端部を持つもので、口縁外面には段が認められる。杯部と脚部は分離し、杯部は約2分の1が残存している。復元口径15cm、推定器高11cm前後、脚部底径9.7cmを測る。調整は風化により不明。黒褐色土層から出土した。松山編年Ⅲ期新に該当する。8は、半球形で碗型を呈する杯部である。脚部を欠損し、復元口径15cmを測る。調整は風化により不明。黒褐色土層から出土した。松山編年Ⅲ期に該当する。9は、よく開く脚端部を持つ小形高杯の脚部で、底部径8.5cmを測る。調整は筒部内面に縦方向の強い指ナデ、外面にヘラミガキが認められる。黒褐色土層から出土した。10は、内湾しながら立ち上がる体部を口縁端部にかけて短く外反させる小形丸底鉢である。3分の1残存し、復元口径11.4cm、器高5cmを測る。調整は体部上半と口縁端部の内外面にヨコナデ、底部内面に指ナデ、底部外面に板ナデを施す。外面の一部に赤彩の痕があり、精製品と推定される。黒褐色土層から出土した。松山編年Ⅲ期に該当する。11は、短く外反する口縁端部を持つ杯か鉢である。約2割が残存し、復元口径14.6cmを測る。調整は口縁端部内外面にヨコナデ、体部内面に指ナデ、外面に1cmあたり3条の叩き痕を認める。黒褐色土層から出土した。12は、若干膨らんだ鈍い稜をもつ退化した複合口縁の甕である。口径14.5cm、胴部最大径21cmを測る。調整は内面の胴部以下に、横方向のヘラケズリ、頸部以上と外面はヨコナデを施す。胴部外面の一部にはナデ消される前のハケメ痕が残り、下半には煤が付着している。黒褐色土層から出土した。松山編年Ⅱ期新に該当する。13は、甕である。口径が底部径の3倍近くありやや外反する口縁部から把手部分へはまっすぐ至り、そこから底部へとすばまっている。底部にはやや斜め上方に向かって穿たれた直径1cmの2孔がある。約7割が残存し、器高25.3cm、底部径9cmを測る。調整は、内外面口縁端部周辺と内外面底部周辺はヨコナデを施し、外面はハケメがナデ消されている。内面はヘラケズリを施す。形態等の諸特徴から古墳時代後期以降の所産である可能性が高い。黒褐色土層中だが、後述するSB04の覆土との境りから出土した。

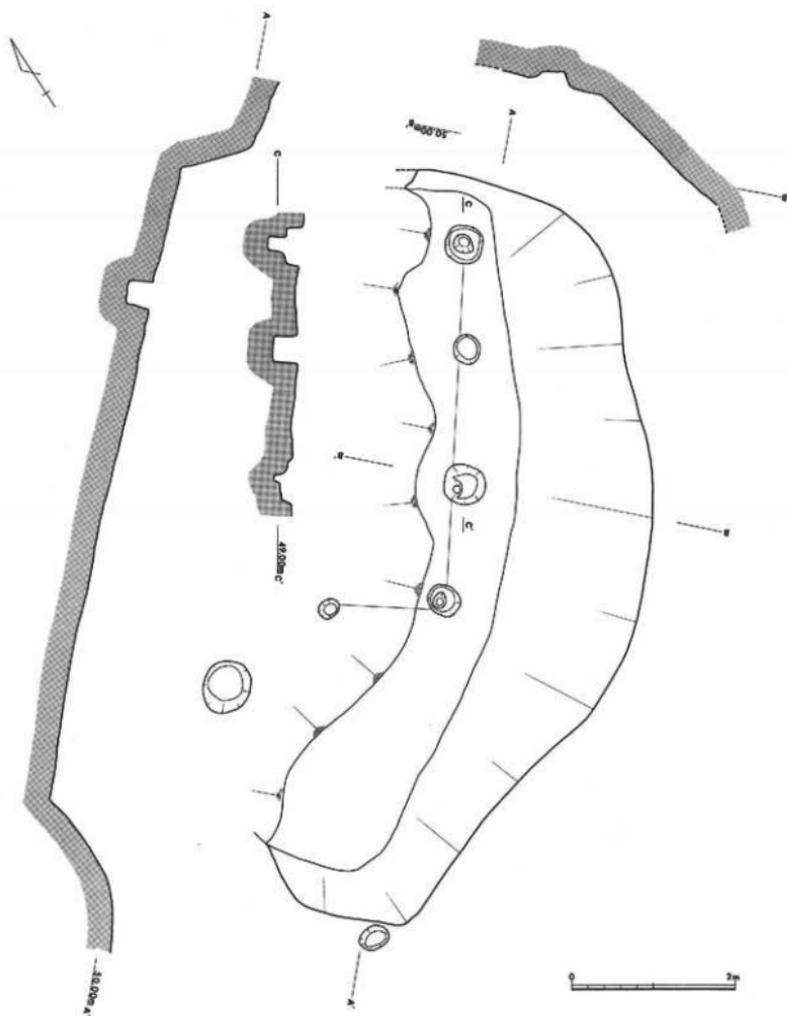
須恵器 14、15は杯蓋である。14は、天井部と体部の境を2本の沈線で区分し、口縁部内面には浅い沈線がめぐる。口径は12.7cmを測る。天井部外面を回転ヘラケズリしている。山陰須恵器編年²²Ⅲ期に該当する。黒褐色土層中の地山面に近いレベルで出土したが、SB04に近い地点であった。SB04に帰属する可能性がある。15は、口縁端部をわずかに外反させ、そこに凹面がめぐる。肩部(天井部と体部の境)には明瞭な稜がめぐり突出している。口径12.7cm、器高4.8cmで、器厚0.6cm以下と薄い。天井部は丁寧な回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ヨコナデを施す。山陰須恵器編年Ⅰ期に該当する。黒褐色土層から出土。16は、立ち上がりの高い杯身である。約4分の1残存し、復元口径11cmを測る。天井部は丁寧なヘラケズリを施す。地山付近から出土した。17は、甕である。頸部が太く、頸部長が体部長よりも短い。頸部には波状文が、胴部の最大径を測る辺りに刺突文がめぐる。底部は丸底で、外面に叩き口が確認される。胴部の約3分の1が残存し、胴部最大径11.7cmを測る。内面の底部は指ナデ、胴部以上は回転ヨコナデを施す。外面は回転ヨコナデ、ナデ調整を施す。山陰須恵器編年Ⅰ期に該当する。暗褐色土層から出土。18は、2段透かしを持つ長脚高杯の脚部である。復元底径14.5cmを測り、筒部に2条、脚部に1条の沈線がめぐる。上段の透かしは四角形と推測でき



第7図 S101:S102:S103周辺出土遺物実測図 (S=1/3)

るが、下段は不明である。回転ヨコナデを施す。SB04付近の黒褐色土層から出土した。

玉作関係遺物^{註3} (第23図1~12) 1~9は碧玉製、10は水晶、11は瑪瑙製である。1、2は管玉の未製品である。いずれもおよその整形の後かなり研磨が行なわれているが、途上で長軸方向からの破損により放棄されたものであろう。研磨は大部分が短軸方向に行われているが、部分的に長軸方向のものも見られる。3は、勾玉もしくは管玉の未製品と考えられる。少なくとも4つの面に研磨痕が



第8図 SB01実測図

見られるが、形態からは玉の種類限定は出来ない。ほとんどの剥離痕は研磨前のものであるが、側面の大きな縦方向の剥離は、研磨との前後関係が不明である。あるいは研磨後にさらに整形のために剥離を行おうとして失敗したのかも知れない。4～6は研磨前の工程の未製品であろう。4は、1側面がややえぐれるように整形されており、勾玉の製作工程上の未製品であろう。1面には大きなネガティブな面が残るが、他の5面には整形のための調整剥離痕が見られる。5は、6面全てに調整剥離痕が見られ、何らかの製品を作ろうとしたものであることは間違いない。やや不定形を呈しているが、勾玉の未製品であろうか。6は、剥片のように見えるが、おおきな剥離面がネガティブな面であることから、何らかの未製品の可能性が高い。ネガ面の反対面には細かな調整痕が多く見られ、また稜上は数ヶ所が「つぶれ」の状況を呈していることから側面の調整を行おうとしたこともうかがえる。7～9は、剥片である。7は、背面に側面からの細かな調整剥離痕が多く見られることから、形割り工程での調整剥片と考えた。8は、背面の稜上に「つぶれ」が見られ、そこから側面方向に剥離痕が見られることから、7同様の調整剥片と考えられる。ただ、腹面からの2次調整も僅かながら観察される。9は、剥片の頭部付近に2次調整が認められる。その他にも、十数点の碧玉製の剥片、破片が出土している。10は、水晶製の剥片である。両側面に長軸方向の剥離面が認められることから、両極打法により加工されたものかも知れない。11は、瑪瑙製剥片である。若干の2次加工が認められる。瑪瑙はもう1点剥片が出土している。12は、一部に敲打痕がみられ、叩き石と考えられる。玉作に伴うものか特定はできない。他に、内磨き砥石も出土したが、不始末から紛失してしまった。

S102, 03の時期と性格 2棟は、方形プランの遺構と資料的制約を承知の上で床面出土土器を重視すれば、古墳時代中期後葉～末頃、松山編年Ⅳ期すなわち山陰須恵器編年Ⅰ期の頃に比定される。さらに、周辺包含層から出土した遺物（7-13・14・18を除く）を加味すれば、松山編年Ⅱ期新～Ⅳ期の範疇におさまる。したがって、古墳時代中期中葉から末頃の幅をあたえ、時期比定をしておく。なお、これらの住居跡は、周辺出土の製作過程を物語る玉作関係遺物の種類、量から判断して、玉作に関わる遺構の可能性が高い。

(2) 掘立柱建物跡と出土遺物

SB01 (第8図)

位置 調査区の南側で北西を向く緩斜面に立地する。床面付近の標高は49m前後を測る。

形状 地山斜面を削って平坦面を作り出しているが、床面の大部分は流失したのか損なわれている。残存部から長方形を基本とするプランが推定される。床面付近の残存部の最大径は840cm、壁高は最大で約100cmを測り、傾斜して立ち上がる。

覆土 暗褐色土（基本層6層）の単層からなる。地山上10cm前後のレベルを中心に須恵器・土器を包含する。ピット内も基本的に同層からなるが、下層には炭化物を多く含む。

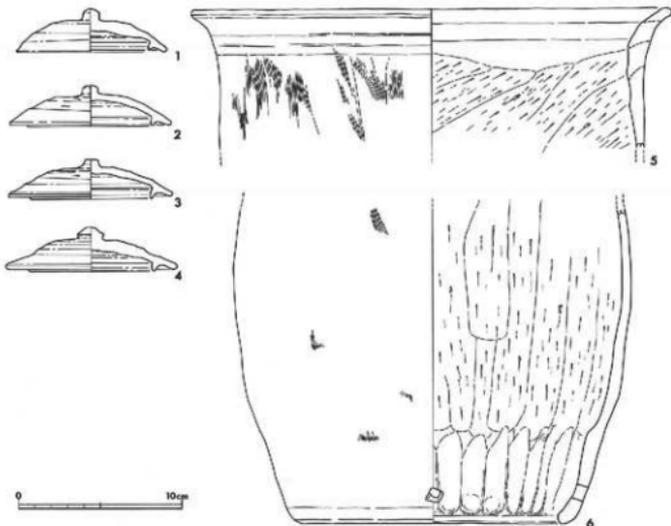
床面 遺構検出面は地山面であったが、本来の遺構構築面か否かは不明である。ピットの深さが浅いものもあり、損失している大部分を含めて盛り土で構築されていた可能性がある。

柱穴 付近から7個のピットを検出した。この内、床面付近の5個から建物の規模が推定され、現状では桁行3間（450cm）×梁間1間（140cm）を測る。柱穴の規模は、上場の直径30～50cm、深さ25～40cmを測り、形状はほぼ円形である。

出土遺物

(第9図)

地山上10cm
前後の暗褐色土層中から、以下の土師器・須恵器がほぼ原位置に近い状況で出土した。その他、覆土中から土器小片多数が出土したが、実測し得ないものであった。



第9図 SB01出土遺物実測図 (S=1/3)

土師器 5・6は、甗である。隣接する出土状況から、おそらく同一個体と判断される。両者とも約5分の1が残存し、復元口径29cm、底径16cmを測る。底部近くには、直径1cmの四角形の2孔が穿たれている。やや外反する口縁部から底部までなめらかに至る。調整は、内面の口縁部周辺に回転ヨコナデ、胴部にヘラケズリ、底部周辺にヘラケズリ後、指ナデを施す。外面は、口縁部周辺に回転ヨコナデ、胴部に縦方向のハケメ調整後ナデ消し、底部周辺から端部までヨコナデを施す。

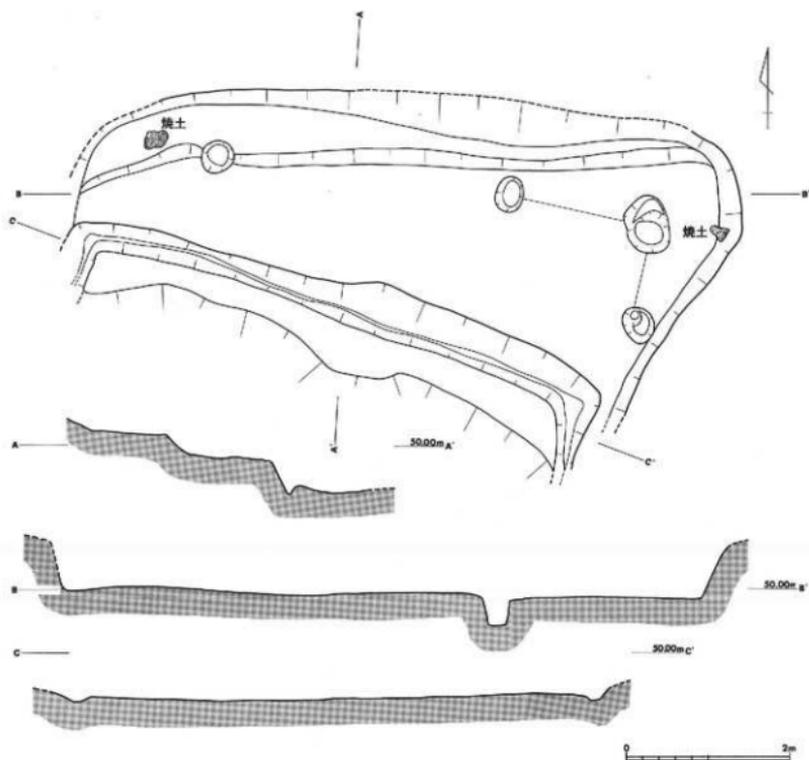
須恵器 1・2・3は、乳頭上のつまみとかえりを持つ小型の杯蓋である。1は、口径7cm、2は、7.65cm、3は7.4cmを測る。天井部には、つまみ周辺に回転ヘラケズリがみられ、他の内外面は回転ヨコナデをする。大谷見二氏の出雲地域須恵器編年²⁴（以下、大谷編年）によれば、出雲6期に相当する。4は、擬宝珠状を呈するつまみとかえりを持つ小型の杯蓋である。口径7.7cmを測り、天井部つまみ周辺に回転ヘラケズリ後、軽いヨコナデ、その他の内外面に回転ヨコナデをする。大谷編年出雲6期に相当する。

時期と性格 伴出遺物から7世紀前半頃（第2四半期）に比定し得るが、性格は不明である。

SB02 (第10図)

位置 調査区の中程で南を向く斜面に立地する。床面付近の標高は49.4~50m前後を測る。

形状 最終的には地山の斜面を削りだした上、中、下の3段にわたる加工段が確認されたが、この内中段が柱穴の存在から建物跡SB02と推定しうる。床面、壁面ともに大部分は流失のためか損なわれていた。残存部から長方形を基本とするプランが推定され、床面付近残存部の最大径は、780cm壁高は現状で約25~60cmを測り、傾斜して立ち上がる。なお、上段、下段の加工段もおそらくは切り合



第10図 SB02付近実測図

い関係にあった別の建物跡の一部と考えられるが、遺構検出の際には切り合いを迫認できず、一律に地山面まで掘り下げた。建物の規模は不明である。

覆土 暗褐色土（基本層序6層）の単層からなる。上層部に多量の土器器片とスラグ、下層部に土器器片多数を包含する。ピット内も同層からなる。

床面 遺構検出面は地山面であったが、本来の床面か否かは不明である。損失している大部分を含めて盛り土で構築されていた可能性がある。

柱穴 床面付近から4個のピットを検出した。この内、東隅の3個から建物跡が推定しうる。規模は、上場の直径30～50cm、深さ25～40cmを測り、形状はほぼ円形である。

出土遺物（第11図）ほぼ地山上の暗褐色土層中から、以下の土器器片が出土した。その他、覆土中から土器小片多数が出土したが、実測し得ないものであった。

土器器 1・2は、甕である。1は、頸部から口縁部にかけて大きく外反するもので、復元口径15.9cmを測る。調整は風化により不明である。2は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反するもので復元口径16.9cmを測る。内面の頸部以下に横方向のヘラケズリ、その他の内外面にヨコナデを施す。3

・4・5は瓶である。それぞれ、口縁部の外反の仕方が微妙に異なっている。3は、やや外反する口縁部から緩やかに胴部にいたる。復元口径23.6cmを測り、内外面の口縁部周辺に回転ヨコナデ、内面頸部付近に指ナデ、頸部以下にヘラケズリを施す。4は、口縁端部が水平に近く外反するもので、復元口径27.2cmを測る。内外面の口縁部周辺に回転ヨコナデ、内面頸部以下にヘラケズリを施す。5は、口縁部がゆるく短く外反するもので、復元口径32cmを測る。内外面の口縁部周辺をヨコナデ、頸部以下の内面をヘラケズリする。外面は風化が進むが、縦方向のハケメが確認できる。

土製支脚 6、7の2点である。どちらも、底部が上げ底で、器高16.6~17cmを測り、セット関係にあると推定される。全面に指ナデ、指オサエ調整が施される。底部付近の裾部には指頭正旗が認められる。2次焼成による剥落が顕著で変色している。

時期と性格 伴出遺物が土師器のみのため判然としないが、その形態からすれば7世紀頃に比定し得る。覆土にスラグ、焼土も見られたが、性格は不明である。

SB03 (第12図)

位置 SB02に近接し、調査区の中程で南を向く緩斜面に立地する。床面付近の標高は47.6~47.8m前後を測る。

形状 最終的には地山の斜面を削りだした上、中、下の3段にわたる加工段が確認されたが、この内の下段のみが柱穴の存在から建物跡SB03と推定しうる。床面、壁面ともに大部分は流失のためか、損なわれていた。残存部から長方形を基本とするプランが推定され、床面付近の残存部は長径600cm弱である。壁高は現状で約25~60cmを測り、傾斜して立ち上がる。なお、上段、中段もおそらくは切り合い関係にあった別の建物跡の一部と考えられるが、遺構検出の際には切り合いを追認できず、一律に地山面まで掘り下げた。

覆土 暗褐色土（基本層序6層）の単層からなる。多量の須恵器、土師器片を包含していた。

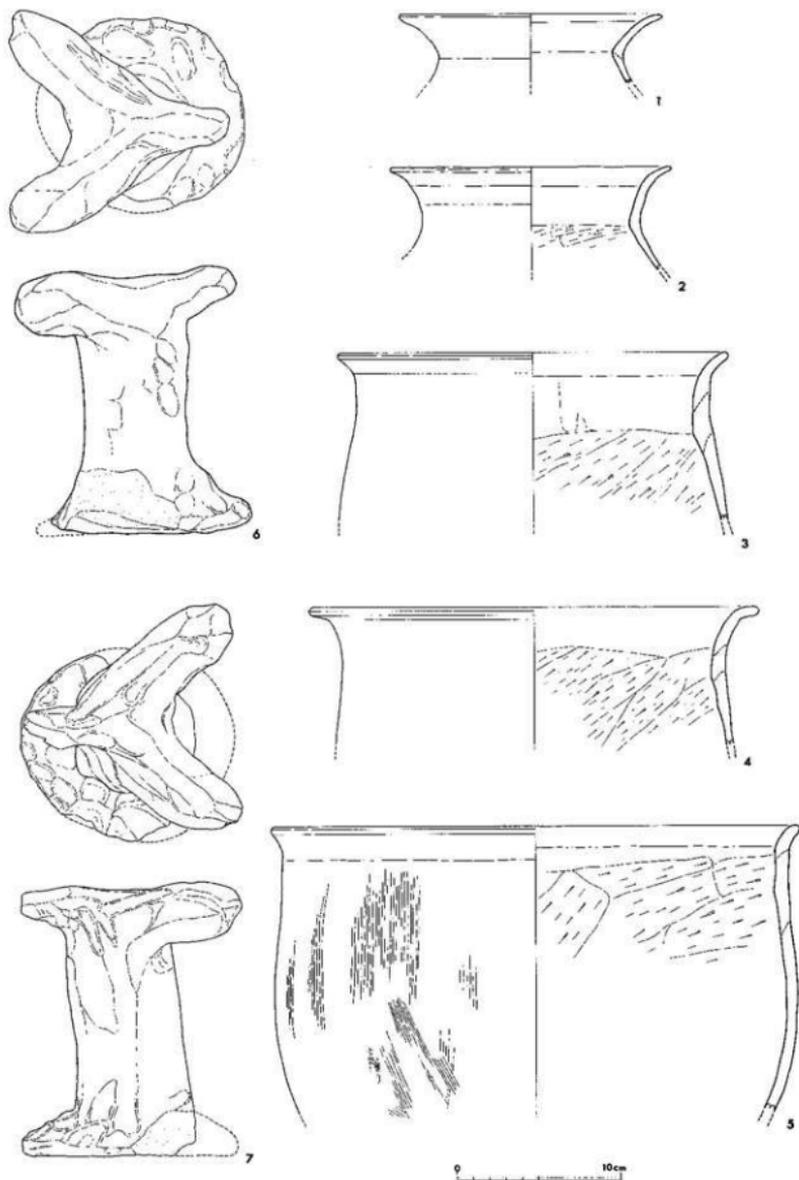
床面 遺構検出面は地山面であったが、本来の床面か否かは不明である。損失している大部分を含めて盛り土で構築されていた可能性がある。また、残存する北側の壁面と西側の壁面に沿って溝が検出され、底面幅6~15cm、深さ5~8cmを測る。

柱穴 床面付近から7個のピットを検出した。この内、ほぼ東西に等間隔で並ぶP.3、P.2、P.1は、SB03に帰属し建物の桁の一部に相当しうる。これらは、上場の直径約40cm、深さ10~25cmを測り、形状はほぼ円形である。しかし、これらから、建物の構造、規模を直ちに類推しかねる。なお、P.4、P.5、P.6もその配置関係から、一建物に伴う一連の柱穴の可能性が高いが、位置的にSB03には伴い難い。P.7は用途不明である。

出土遺物 (第13図) 覆土中およびほぼ地山上の位置から、以下の須恵器・土師器が出土した。その他、覆土中から土器小片多数が出土したが、実測し得ないものであった。

土師器 8は、ほぼ地山上から出土した高杯の脚部で、底径8.35cmを測る。調整は、外面は剥離がひどく不明だが、内部にしぼり目が見られる。ほぼ地山上から出土した。

須恵器 1~5は杯蓋である。1は、乳頭状のつまみとかえりを持つもので、口径8.6cmを測る。



第11図 SB02付近出土遺物実測図 (S=1/3)

2・3は、擬宝珠状を呈するつまみとかえりを持つものである。2は、口径9cm、3は、7.8cmを測る。4・5は、輪状のつまみとかえりを持つものである。4は、口径10cm、5は、10.3cmを測る。これら杯蓋は天井部のつまみ周辺に回転ヘラケズリがみられ、他の内外面には回転ヨコナデを施している。いずれも大谷編年によれば、出雲6期に相当する。全て覆土の下層および地山付近から出土した。

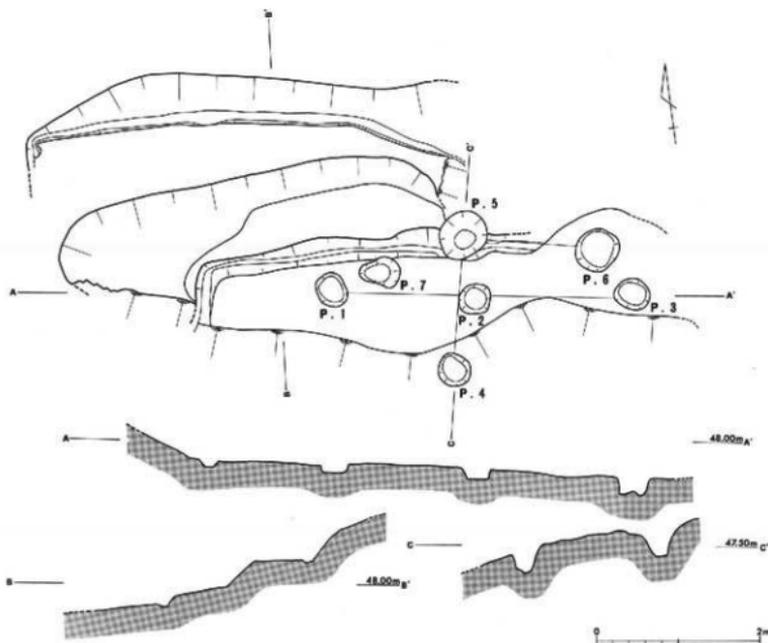
6は、長脚無蓋高杯である。杯部は5分の1、脚部は5分の4残存する。杯部は単純な皿状で杯部側面と底部の屈曲がほとんどない。脚部は脚裾が広がった2方2段透かし孔で、上段は切れ目で、下段は二等辺三角形を呈する。復元口径16.5cm、底径11cm、器高12.3cmを測る。内外面とも回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し得る。7は、2方透かし孔の高杯である。回転ヨコナデを施している。詳細は不明である。

時期と性格 伴出遺物に若干の時期幅があるが、およそ7世紀前葉から中葉頃（7世紀第2四半期から第3四半期）に比定し得る。通常の住居跡と思われるが、詳細は不明である。

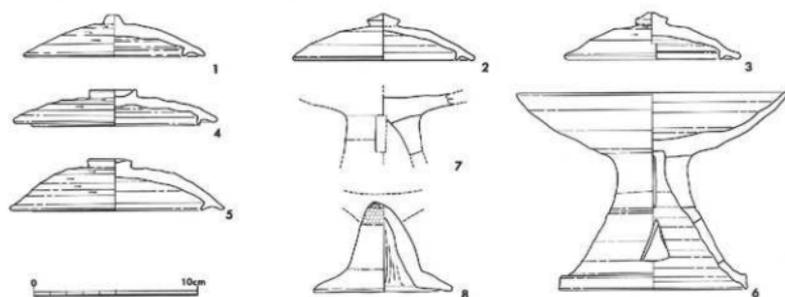
SB04 (第14図)

位置 調査区の中央の浅い谷間の平坦面に位置し、S I 03が北に近接する。

形状 遺構検出面は地山面であったが、遺構構築面は流失したかの状況にあり、残存する柱穴の配置から長方形プランと推定される。



第12図 SB03付近実測図

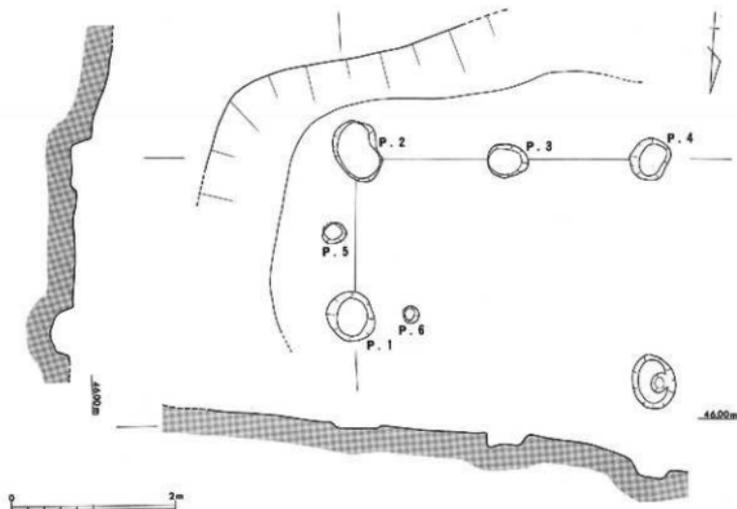


第13図 SB 03 付近出土遺物実測図 (S=1/3)

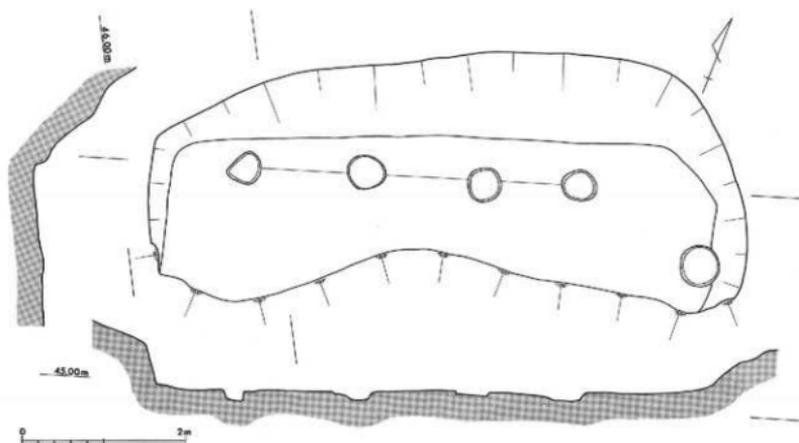
覆土 基本的には、暗褐色土（基本土層6層）の単層からなるが、遺構の北下方は、S103の覆土である黒褐色土（基本土層5層）と混在して漸移するため、両者の分層は不可能であった。ピット中は暗褐色土層からなるが、内部には炭化物もみられた。

床面 ごく浅いピットや遺構検出時の状況からして、地山面が本来の床面である可能性は低い。おそらく、既に流失したであろう堆積土中に構築されていたと推測される。なお、遺構の南辺と東辺の一部は、斜面上の僅かな傾斜変換のライン（図中実線部分）としてとらえ得る。

柱穴 床面付近から大小7個のピットを検出した。この内、ほぼ東西南北に等間隔で並ぶP.1、P.2、P.3、P.4はSB04に帰属する可能性が高く、建物の桁（P.2-P.3-P.4）と梁（P.1-P.2）の一部に相当しうる。これが妥当ならばSB04は少なくとも桁行2間（360cm）以上、梁間1間（200cm）以上の規模を測ることになる。柱穴の規模は、上場の直径40~60cm（P.2を除く）、深さ8~20cmを測り、形状は不整な円形である。なお、P.5~P.7の用途は不明である。



第14図 SB 04 実測図



第15図 SB05実測図

出土遺物 覆土中から、古墳時代後期～終末頃の須恵器・土師器小片が若干出土したが、実測に耐えず、また遺構と直結する出土状況ではなかった。共存する可能性のある遺物をしてあげれば、既述の（P18参照）通り、SI02・03下方の包含層から出土した土師器（7-13）、須恵器（7-14、18）がある。

時期と性格 詳細は不明だが、遺物を重視すれば、古墳時代後期以降の可能性はある。

SB05（第15図）

位置 調査区の西寄りて南方を向く斜面に立地する。現状では急斜面といえる。床面付近の標高は45～45.20mを測る。遺構の上層には後述するSX01が構築されていた。

形状 地山斜面を削って平坦面を作り出しているが、床面の大部分は流失したのか損なわれている。残存部からSB01に類似した長方形を基本とするプランが推定される。床面付近の残存部の最大径は680cm、壁高は最大約140cm前後を測り、北、東、西側の三方の壁へそれぞれ傾斜して立ち上がる。

覆土 大部分は淡褐色土（基本層序7層）の単層からなるが、東半部ではSX01の墳丘盛り土が覆土となる。（第19図の縦断土層断面図参照）。

床面 ごく浅いピットや遺構検出時の状況からして、地山面が本来の床面である可能性は低い。おそらく、既に流失したであろう堆積土中に構築されていたと推測される。

柱穴 地山面で5個のピットを検出した。この内、床面付近の4個から建物の規模が推定され、現状では桁行3間（400cm）を測る。これらの柱穴は、現状で下場の直径35～450cm、深さ10cm以下を測り、形状は不整な円形である。

出土遺物 土師器小片数点が覆土中から出土したのみである。

時期と性格 時期決定の要素が無く、詳細不明。少なくともSX01の構築前に築かれている。

(3) 1号横穴墓と出土遺物

立地 (第4図)

調査区南西隅付近の南向きの急斜面に地山を穿って開口し、前庭部の地山面で標高40.6m前後を測る。ここは、平ラⅡ遺跡を囲む馬蹄形の尾根の内、北側の尾根頂部の先端にほど近い場所である。開口する斜面は、1号横穴墓の西側で、大きく南西、西、北西方向へと向きを変え、平ラⅠ遺跡のある小平野を見下ろすことになる。当横穴墓はこの小平野から見れば、さしずめ「奥まった谷の山かげにひっそりと存在する」とでも形容される。1号横穴墓の周囲、上下左右の斜面にトレンチ調査を試みたが他の横穴墓は検出されず、単独で存在した可能性が高い。主軸はほぼ南北方向にある。

前庭部 (第16図)

地山の斜面を大きく削って比較的広い前庭部を作り出している。床面は玄室方向に向い、縦長で不整な台形に近い平面形を呈している。規模は、主軸上で長さ460cm、前庭部前端で幅340cm、同羨道側で幅130cmを測る。羨道側が前端よりも若干高くなる傾斜を成し、表面に凹凸は無く、ほぼ平坦面となっている。なお、前端に近い左右両側壁沿いの床面には、長さ約20~25cm前後の三角形の隆起が各1箇所見られた。高さは、約10cm以内で、上面はまるみを帯び、前庭主軸方向へ緩く傾斜している。これは、その対称的な位置と形状からして人為的なものと考え得るが、性格は不明である。

両側壁は、丁寧に整形されており、直線的な傾斜をもって立ち上がり、掘り方もしくは上場（遺構と遺構外斜面との傾斜変換点）に至る。なお、両側壁の上方からは、地山を断面L字状に削り出した加工段の痕跡が検出された。床面の大部分は損なわれているが、形状から一遺構に伴うものと判断される。覆土は淡褐色土（第3図基本土層7層）単層であった。遺構の性格は不明だが、切り合いの関係から、少なくとも既存したこの加工段を横穴墓造営時に破壊、分断したものと判断される。

羨道 (第16図)

床面は前庭部床面から約15cm前後高い段上となり、長さ約60cm、幅80~90cmを測る。平面形は不整な方形を呈す。天井部は崩壊しており、規模、形状は不明であった。

閉塞 (第16図、第17図)

羨道と玄門の境界付近で、複数の割り石を用いて行なわれていた。閉塞石は、最大径70cm前後の大きなもの2個を中心に、大小十数個の割り石を詰め込むような状態で検出された。天井部が、崩壊したため多くは玄門部へ倒れ込んだ状態で、原位置を保っていない。石材は法勝寺凝灰岩（流紋岩質溶結凝灰岩）と呼ばれる当遺跡の周辺で産出するものである。

玄門 (第16図、第17図)

床面は羨道部と一連の平坦面だが、非常に狭長となり、玄室側が羨道側より若干広い長方形を呈する。最大長約180cm、幅46~68cm、天井部残存高約70cmを測る。断面形は、天井部の崩壊のため判断としないが、アーチ状と推測される。左側壁面には、水平方向にはしる数条の、幅2~3cm前後を測る加工工具痕跡が見られ、玄門掘削時の荒掘りに伴うものかもしれない。

玄室 (第16図、第17図)

平面形は不整であるが長方形を呈し、主軸上の奥行180cm前後、最大幅約290cmを測る。床面は奥壁側が若干高くなる傾斜を持ち、玄門との境辺りに、若干の浅い凹み（深さ約2cm）が認められる。天

井部および左右、前後の壁面は、崩落のため大部分が損なわれているが、残存部と平面プランからして、いわゆる家形で擬似四注式、平入りの形態が推察される。

礫床 (第17図)

玄室内右半の床面上には、礫床と思われる施設が検出された。これは、割り石から成る角礫を平面長方形に配置したもので、ほぼ玄室の主軸あるいは右側壁面と平行な位置関係にある。奥壁側の角礫が最も大きく、最大径50cm前後、最大高20cmを測り、枕石を類推させる。他の礫石はこれに比し格段に小形かつ扁平で、大きいものでも最大径33cm、最大厚3cmほどである。礫石と床面の隙間、礫石上面および周辺の床面からは須恵器と土師器の数個体分が破碎された状態で出土している。

土層堆積状況 (第16図)

前庭部から玄室内にかけて多量の土砂が堆積していた。

前庭部では、6層において多量の炭化物の細粒が認められ、11層では、直径約80cmの円形に広がる真赤な焼土面と多量の炭化物が検出された。これらは、横穴墓外の周辺斜面には一切認められず、前庭部に限定された事象であった。したがって、炭化物と焼土の存在は、前庭部における意図的な埋め土の行為と火の使用を推察させるものである。また、前庭部における遺物の出土は、14層上面と15層上面に限られ、須恵器とともに人頭大の角礫が出土している。しかし、両層が追葬面に相当するか否かは把握できなかった。

閉塞石以後の玄門～玄室にかけては、崩落土がかなり厚く堆積していた。須恵器、土師器、礫床等の遺物は、ほぼ床面直上から出土しており、明確な追葬面、埋め土行為の有無は確認されなかった。ただし、詳細は不明だが、玄室の奥壁側周辺の16層と18層において、人骨の腐食を思わせる灰黒色腐食土が地山上の19層を隔てて確認された。これは、玄室内における追葬面つまり追葬が行われた可能性を示唆する事象かもしれない。

遺物出土状況 (第17図、第18図)

<前庭部> 14層上面からは、須恵器の杯身1 (18-4)、壺1 (18-10)、人頭大の角礫数個が出土している。須恵器はほぼ完形で、破碎された痕跡は無い。角礫は閉塞石と同質、同形状の割り石と思われ、閉塞石の一部が移動されたものの可能性がある。

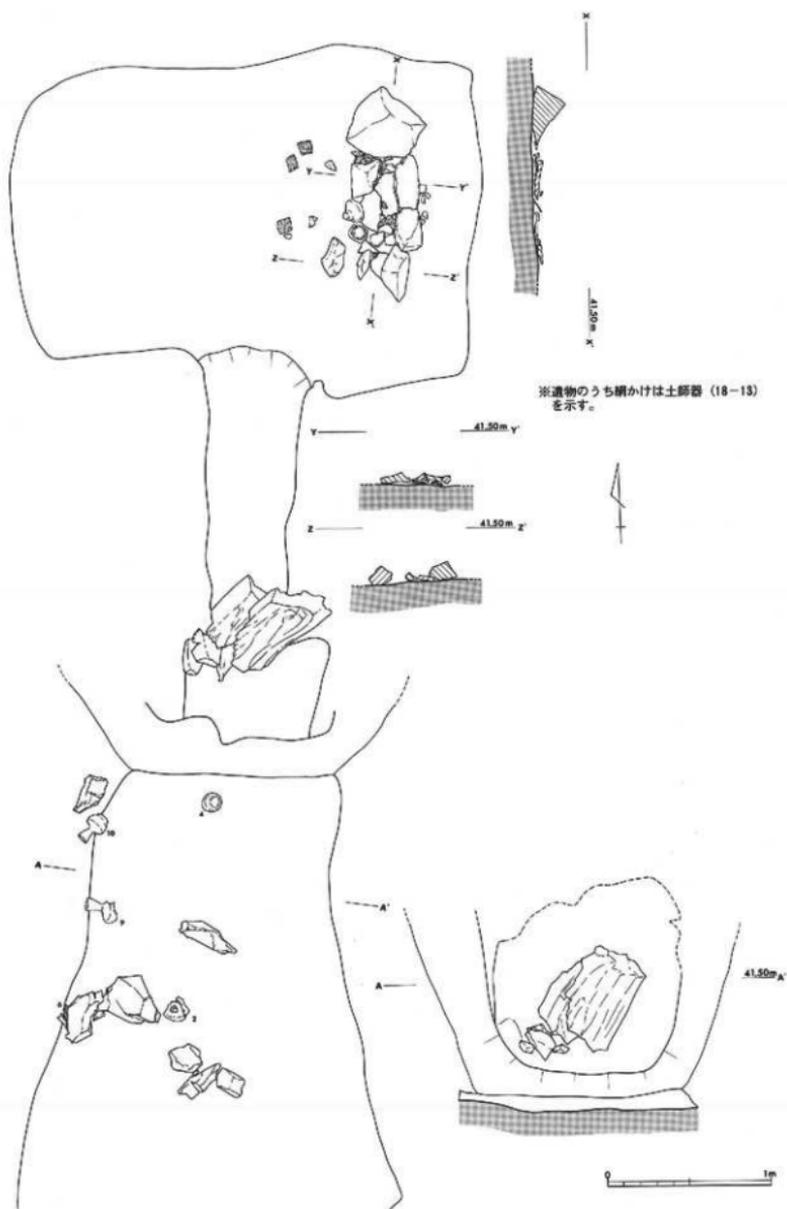
15層上面からは、須恵器の壺1 (18-9)、杯蓋2 (18-2,3)、杯身1 (18-6)、人頭大の角礫数個が出土した。須恵器は、破損したものが多くが意図的な破碎を推察させる状況にはなかった。角礫は14層上面と同様に閉塞石と同質、同形状の割り石で、閉塞石の一部が移動されたものの可能性がある。

また、前庭部前方付近の暗褐色土 (12層) からは、土師器の小型甕1 (18-11)、須恵器の杯蓋1 (18-1)、杯身2 (18-7・8) が出土している。

<玄室> 礫床と推定される遺構において、須恵器の長頸壺1 (18-12)、杯身1 (18-5)、土師器の鉢1 (18-13) の3個体がそれぞれ小破片となって出土している。いずれも、礫石と礫石の間の床面、礫石上面、礫石と床面の隙間、礫床周辺の床面に意図的に破碎され数かかっているかの状況で検出された。

遺物 (第18図)

<前庭部出土>



第17図 平ラII遺跡1号横穴墓遺物・閉塞石出土状況実測図（遺物の番号は、第18図に対応する）

土師器 11は、小型甕である。約5分の1が残存し、復元口径14.2cmを測る。内外面とも風化が進み調整は不明である。前庭部前方の12層から出土した。

須恵器 1・2は輪状のつまみとかえりを持つ杯蓋である。1は、口径11.6cm、最大径14.2cmを測る完形品である。前庭部前方の12層から出土した。2は、口径11.8cm、最大径13.8cmを測るほぼ完形品である。15層上面から出土した。

3は、1・2と同様のかえりを持つ杯蓋である。つまみ以上を欠損している。15層上面から出土した。これら杯蓋の天井部には、つまみ周辺を中心に回転ヘラケズリがみられ、他の内外面には回転ヨコナデ、さらに内面の中心部周辺には不定方向のナデを施している。いずれも大谷編年の出雲6期に相当する。

4・6・7は、高台を持つ杯身である。4は、口径12.6cm、器高5.2cmを測り、高台と杯部の接合部に幅、深さとも約1cmの沈線がめぐる。14層上面から出土した。6は、約3分の1が残存し、復元口径13.1cm、器高4.9cmを測る。15層上面から出土した。7は、口径12.4cm、器高5.0cmを測る完形品である。4・6に比して高台がやや広く開き、杯部の外反が大きい。前庭部前方の12層から出土した。調整は、いずれも内外面回転ヨコナデを施す。全て、大谷編年の出雲6期に相当する。

8は、高台の無い杯身である。口径12.3cm、器高4.4cmを測り、底部外面に回転ヘラケズリ、その他の内外面に回転ヨコナデ、底部内面にはさらに不定方向のナデを施している。前庭部前方の12層から出土した。やはり、大谷編年の出雲6期に相当する。

9・10は、甕である。9は、肩部に円形浮文状の粘土が1箇所貼りつけてあり、口径7.5cm、器高18.65cm、胴部最大幅13.1cmを測る。15層上面から出土した。10は、9よりもやや内反する口径部を持ち、頸部に2条の沈線がめぐる。口径7.25cm、器高18.00cm、胴部最大幅13.0cmを測り、14層上面から出土した。調整は、いずれも底部外面に回転ヘラケズリ、他の内外面に回転ヨコナデを施す。やはり、大谷編年の出雲6期の範疇である。

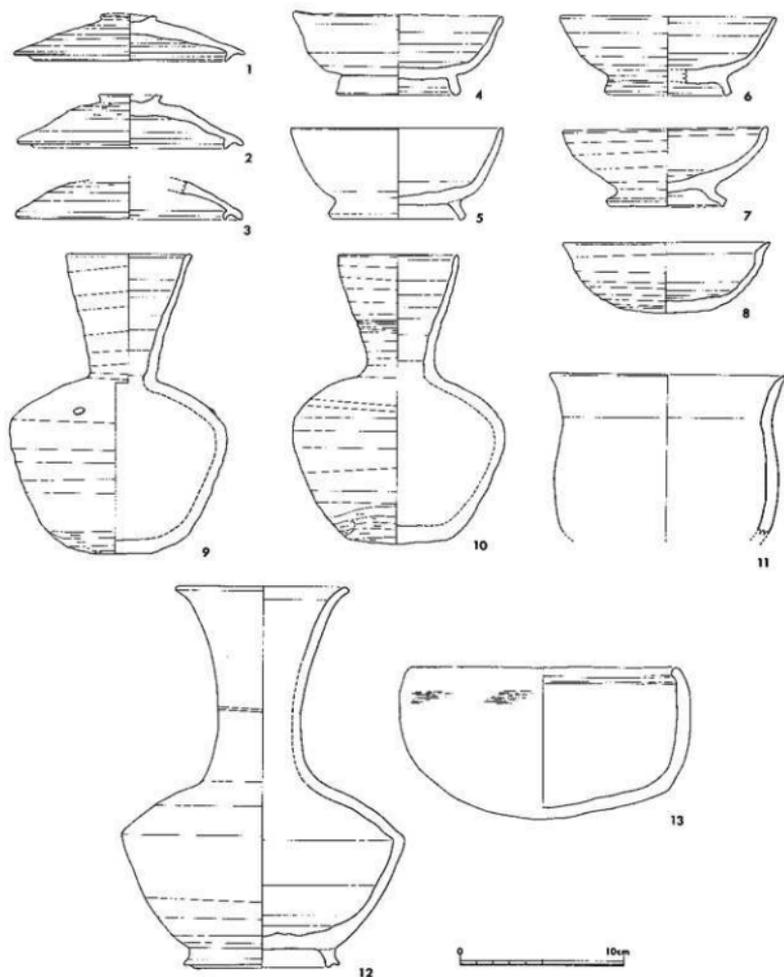
<玄室内出土> 遺物は全て、礫床上もしくは礫床周辺の床面から出土した。

土師器 13は、丸底の鉢あるいは椀である。丸みを持ちつつ扁平に広がった底部から口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を強く内湾させている。口縁端部から0.5cm程下がった内面には幅0.5cmの凹線がめぐっている。内外面とも風化が進むが、表面には赤彩された痕跡が認められ、胎土の色調も淡黄～橙褐色と赤味を呈する。細片化していたが、約9割が復元され、口径16.2cm、器高9.4cmを測る。調整は、口縁部外面に粗いヨコナデを施すが、他は風化により不明である。

須恵器 5は、高台を持つ杯身である。口径12.8cm、器高5.7cmを測り、ほぼ完形に復元された。調整は底部外面にヘラ切り後のナデ、同じく内面に不定方向のナデ、他の内外面に回転ヨコナデを施す。大谷編年出雲6期あるいは7期に該当する。

12は、高台付きの長頸甕である。算盤玉状の胴部の肩が稜を持って強く張り出し、口頸部が大きく外反するもので、口径10.3cm、器高23.6cm、胴部最大径17.5cm、底部径8.1cmを測る。頸部にはごく浅い沈線が1条見られる。調整は、胴部下半の底部周辺にヘラケズリ後のナデ、他の内外面に回転ヨコナデを施している。大谷編年に従えば、出雲7期以後に比定し得る。

時期 伴出遺物は、若干の型式差を持つが、編年に有効な杯身、杯蓋の型式を重視して、7世紀中



第18図 平ラII遺跡1号横穴墓出土遺物実測図 (S=1/3)

葉から後葉の頃（7世紀第3四半期から第4四半期の間）に比定し得る。ただし、玄室内の糠床付近から出土した長頸壺はそれより時期的に下る可能性が高い。もし、この時期比定が妥当であるならば前庭部の出土遺物よりも玄室内の出土遺物の方が時期的に新しいこととなり、追葬の行なわれた可能性が高くなる。いずれにせよ、当横穴墓の営まれた時期には、7世紀中葉を上限に7世紀後半から8世紀初頭を中心とする時期幅を与えておくこととする。

(4) その他の遺構と出土遺物

SX01 (第19図)

位置 調査区の西寄りで南向きの斜面に立地する。奥まった谷に面し、平野への見通しは全くきかない地点である。当遺構は既述のSB05の上層に築造されている。検出された石棺の底面の標高は、45.75~46.15mを測る。

発見の経緯 急斜面の表土、淡褐色土(第3図、基本土層7層)を掘り下げる過程で、蓋石らしき石材を検出したのが、発見のきっかけである。直ちに周辺を精査したところ、長方形プランをした石棺状の石組みの存在が明らかとなり埋葬施設の可能性が高まった。しかし周囲の地表面観察を実施したところ墳丘状の高まりや溝状の落ち込みなど古墳を類推させる積極的な根拠は見出せなかった。そこで、調査は古墳の可能性に留意しつつも、土層の断面観察を重視して、順次、遺構を解体しながら実施した。以下がその概要である。

箱式石棺 精査の過程で石組みの全容が明らかになり、箱式石棺と判断した。

まず、淡褐色土層(基本土層7層)中において、石棺の蓋石上面が確認された。蓋石は1枚のみが原位置に近い状況で遺存しており、その周囲には、淡黄褐色の粘土が小口部や側壁との隙間を目張りしていた。他に蓋石は遺存せず、棺内には土砂が多量に流入し完全に埋没していた。棺内を完掘したところ、遺物は一切出土せず、淡褐色土が単層堆積するのみであった。

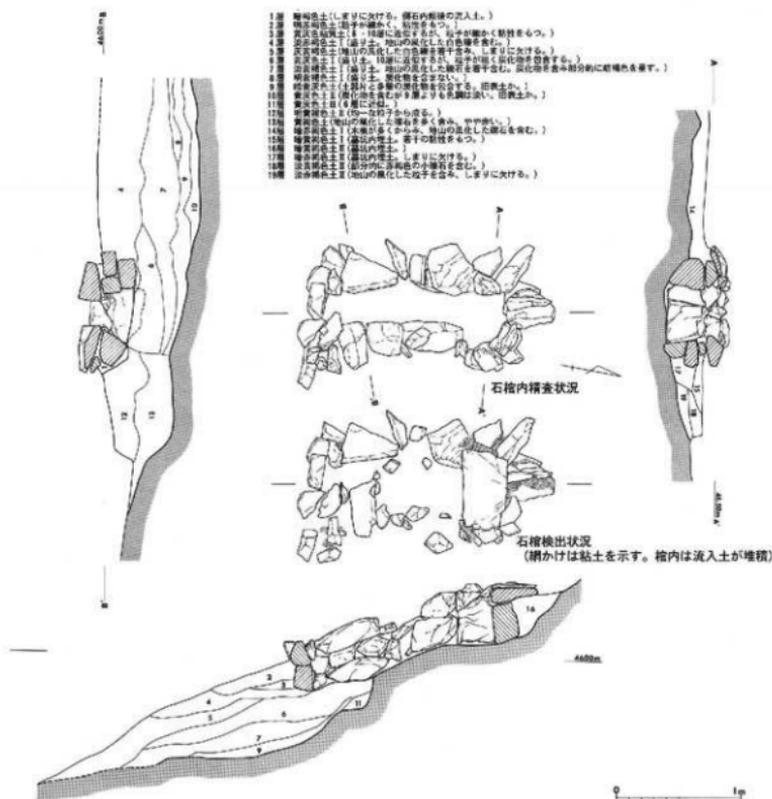
石棺は、平面長方形のプランをもち、長辺の主軸をほぼ南北方向にとり、その上面、底面とも北側から南側へと傾斜している。また、横断の断面形では、両側壁がほぼ直立して立ち上がり、いわゆる「箱型」に近い形態が確認された。なお、側壁の一部が持ち送り気味に内傾して立ち上がる箇所が見られたが、これは土圧によって内傾したものと考えられる。底面には、底石等は認められず、約4分の3が地山面、約4分の1が黄灰色土の盛り土層上面からなった。規模は、底面の内法で長さ約150cm、北側小口の幅約50cm、南側小口の幅約45cm、小口および側壁上面から底面までの深さは約40~50cmを測る。

石材は、割り石が大部分を占め、若干の小さな自然石が混在している。小口部、側壁の残存部から判断すると、いずれも比較的大型の石を底面上に長方形を基本に並べ、その際生じた隙間や高低差を中型、小形の石で揃え整える状況が認められた。いずれも法勝寺凝灰岩(流紋岩質溶結凝灰岩)と呼ばれる遺跡の近隣で産出し、手軽に入手し得る石材を用いている。

掘り方 石棺検出時に周囲の土層上面を精査したが掘り方のラインは確認することができなかった。その後、土層断面を慎重に観察したところ、この石棺はおよそ北側小口の北から東にかけての地山斜面側面に限って掘り方を持ち、それ以外には無いことが判明した。これは、斜面上方の北側小口周辺は、地山や自然堆積土を掘り込んで石棺を設置する必要があったが、斜面下方の南半は墳丘を築造する過程で、盛り土の作業と同時並行で石棺を据え置くという構築法がなされたためである。

具体的には、北側小口周辺の15・16・17層が掘り方内の埋土と考えられる。

墳丘 石棺検出時には、墳丘の存在は確認できなかったが、図示した通り、土層の堆積状況から盛り土による墳丘が存在したと思われる。検出時には、盛り土の大半が流出し、緩斜面と化していたので墳形、規模は推察出来ない。しかし、残存する盛り土の状況、斜面上の立地、周囲のスペース等の諸



第19図 SX01実測図

条件からすれば、山寄せの小規模な古墳(おそらくは円墳)であった可能性が導き得る。

なお、SX01周囲の堆積土を盛り土と判断したのは次の要因による。一つは、土砂の流出が顕著な斜面において、5～6層にわたるほぼ水平な堆積がSX01周辺のみ限定して確認されること。二つ目は、堆積土の最下面はSB05を検出した地山面であり、その直上の9・11・12層で旧表土(SB06 晩絶後の腐食土層)を思わせる炭化物を含む黒っぽい土層(いわゆるブラックバンド?)が見られること。さらに、SB05の堆積土は、地形的に同条件でありながら、他所では淡褐色土の単層であるのにSX01周辺のみ5～6層の複数層の堆積土が認められること、などである。

築造過程 ここで、残存部から推察し得る当遺構の築造過程を整理すると以下の通りとなる。

- ①石棺を設置するための底面を造出するために、北側は、地山や地山風化土の斜面を掘り込んで成形し、南側は既存したSB05の加工段上に、墳丘構築に伴う盛り土をして底面を揃える。
- ②石棺を底面上に据え置く。

③北側小口周辺の地山斜面（掘り方）との隙間に埋め土をし、その他の部分はさらに填丘構築に伴う盛り土をして石棺を埋納する。

④盛り土を重ね填丘を完成させる。

出土遺物 SB05の地山面上に堆積する暗黄褐色土（9層）中から、土師器の甕小片、須恵器の杯蓋の小片が2、3点出土している。いずれも実測しかねるものである。しかし、須恵器の杯蓋はごく短いかえりの一部分であった。

時期と性格 時期を明確に示す遺物はないが、少なくともSB05よりも後に築造されたものである。さらに、上述した9層出土の土器細片は7世紀以後の特徴を持つので、7世紀以後と限定し得る。遺構の立地、山寄せの填丘、石棺の形態等を総合的に判断すると、古墳時代終末頃の単葬墓の一種と考えておきたい。

その他の出土遺物 (第20・21・22・23・24図)

調査区全体の緩斜面および谷間の浅い平坦面や谷底付近の堆積土中からは遺構と直接結び付かない多くの遺物が出土している。出土地点の特定が可能な遺物と不可能な遺物の両者があるが、以下器種ごとに、主要な遺物の概要を述べる。なお土層名は第3図の基本土層に対応する。

須恵器 (第20図)

蓋類 1は、外面に沈線や肩部の稜など凹凸の見られない杯蓋で、口径10,45cmを測る。天井部外面はヘラ切り後不定方向のナデを施し、他の内外面は回転ヨコナデを施す。内面にヘラ記号が認められる。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。谷間の平坦面の6層から出土した。

2は、口縁端部がゆるく屈曲する短頸壺の蓋であろうか。口径8,6cmを測る。天井部外面は回転ヘラ切り後、ナデを施し、他の内外面は回転ヨコナデを施す。天井部に自然釉が見られる。谷間の平坦面から出土した。

3は、乳頭状のつまみとかえりを持つ小型の杯蓋である。口径7,8cm、最大径9,9cmを測り、天井部を回転ヘラケズリの後、つまみをつけ、その周囲をヨコナデする。他の内外面は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。SB01下方の表土下から出土した。

4は円形で扁平なつまみとかえりを持つ杯蓋である。口径8,6cm、最大径11,2cmを測り、つまみ周辺に回転ヘラケズリ、他の内外面に回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。

5は、扁平な擬宝珠形つまみとかえりを持つ杯蓋である。口径9,4cm、最大径11,4cmを測り、つまみ周辺にヨコナデおよび回転ヘラケズリ、他の内外面に回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。第3加工段下方の斜面から出土した。

6は、擬宝珠形つまみとかえりを持つ大型で扁平な杯蓋である。口径12,4cm、最大径14,9cmを測り、内外面は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。SB01下方の6層から出土した。

7は、擬宝珠形つまみとかえりを持つ大型の杯蓋である。口径12,0cm、最大径14,4cmを測り、つまみ周辺に回転ヘラケズリ、他の内外面に回転ヨコナデ、不定方向のナデを施す。つまみの横にヘラ記

号が認められる。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。SB03の下方斜面から出土した。

杯身 8は、立ち上がりの低い小型のもので、口径8.5cm、器高2.9cmを測る。底部外面は回転ヘラ切り後、不定方向のナデを施し、他の内外面には回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。SB03下方の表土下から出土した。

9は、立ち上がりの高いもので、口径11.5cm、器高4.0cmを測る。底部外面は回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲4期、山陰須志器編年Ⅲ期に相当し、6世紀末頃の所産である。SB03下方斜面の6層から出土した。

10は、立ち上がりのない小型のもので口径9.4cm、器高3.5cmを測る。底部は回転ヘラ切りし、他の内外面は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。SB02下方斜面から出土した。

11は、10に比し、やや開き気味の口縁部を持つもので、口径10.2cm、器高3.8cmを測る。底部外面は回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。SB03下方の表土下から出土した。

12は、扁平な底部から斜めに口縁部が立ち上がる小型のもので、口径9.2cm、器高3.0cmを測る。底部外面は回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。SB03下方の斜面から出土した。

13は、12の口縁部が若干起伏を持ち薄手となったもので口径9.8cm、器高径3.3cmを測る。底部外面は回転ヘラ切り、他の内外面は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。SB02下方の6層から出土した。

14・15は、高台付きのものである。14は、口径12.35cm、器高4.4cmを測り、15は、復元口径14.1cmを測る。いずれも高台は貼り付けて、内外面は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀後半の所産である。SB03下方斜面の6層から出土した。

16は、底部を回転糸切りするもので、口径12.95cm、器高4.7cmを測り、他の内外面は回転ヨコナデを施す。高広遺跡の編年案⁸⁵でいうNA期頃（8世紀中葉から後葉）に類例が認められる。

17は、底部を静止糸切りするもので、口径12.0cm、器高4.7cmを測り、内外面は回転ヨコナデを施す。16よりも時期的にさかのぼる可能性が高い。8世紀前半を中心とする時期を与えておく。SB01下方斜面の6層から出土した。

把手付碗 18は、把手の部分は損失するが、胴部中程の3箇所にその剥離痕が確認される。肩部には幅2～3mmの凸帯があり、その下方に波状文、さらにその下方に凸帯がめぐっている。口径9.8cm、器高6.4cmを測る。底部外面は手持ちによる不定方向のヘラケズリが見られ、他の内外面には回転ヨコナデを施す。中村浩氏の編年⁸⁶によれば、陶器Ⅰ型式3段階に並行するもので、大谷編年の出雲1期の時期に比定し得る。谷間の平坦面、SI02・03付近の表土下から出土した。

広口壺 19は、平底で、やや扁平な胴部からはほぼ直立する口縁部がのびるもので、口径8.8cm、器高10.3cm、胴部最大径10.2cmを測る。底部外面は回転ヘラケズリ後、ヨコナデ、外面胴部下端あたりに回転ヘラケズリ、その他の内外面には回転ヨコナデを施す。谷間の平坦面の6層から出土した。

高杯 20は、杯部の破片である。復元口径17.8cmを測る。谷間の平坦面の6層から出土した。

21は、有蓋高杯の杯部片である。口径11.5cmを測り、外面下半に回転ヘラケズリ後のヨコナデ、他の内外面に回転ヨコナデを施す。残存部から透かし孔は2方向と分かる。谷間の平坦面の6層から出土した。

22は、長脚無蓋高杯である。皿状の杯部から裾の大きく広がる脚部をもち、2方向に2段の透かし孔（上段：三角形、下段：台形）が開くもので、口径16.2cm、器高10.85cm、底径10.35cmを測る。脚部の透かし孔の間には2条の凹線がめぐり、脚端部の面は直立し、凹面が見られる。調整は、杯部下半に回転ヘラケズリ後の回転ヨコナデ、他の内外面には回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲5～6期に相当し、7世紀前半の所産である。谷間の平坦面の6層から出土した。

23～25は、長脚無蓋高杯の脚部片である。

23は、22と近似するが、透かしの形状が異なる。おそらく2方向に2段の透かし孔（上段：切れ目、下段：三角形）が開き、底径10.65cmを測る。調整は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲5～6期に相当し、7世紀前半の所産である。表土下から出土した。

24は、2段に透かし孔（上段：切れ目、下段：長方形）をもち、脚端部の面は外傾する凹面となっている。底径は10.8cmを測り、調整は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲5～6期に相当し、7世紀前半の所産である。表土下から出土した。

25は、透かし孔が退化して、3方向に細長い1条の切れ目を入れ、脚部中ほどには2条の凹線がめぐりものである。調整は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲6期に相当し、7世紀前半の所産である。SB03下方斜面の6層から出土した。

26は、低脚無蓋高杯の脚部片である。透かしが認められず、底径は9.8cmを測り、調整は回転ヨコナデを施す。大谷編年の出雲5～6期に相当し、7世紀前半の所産である。谷底付近から出土した。

土師器 (第21図)

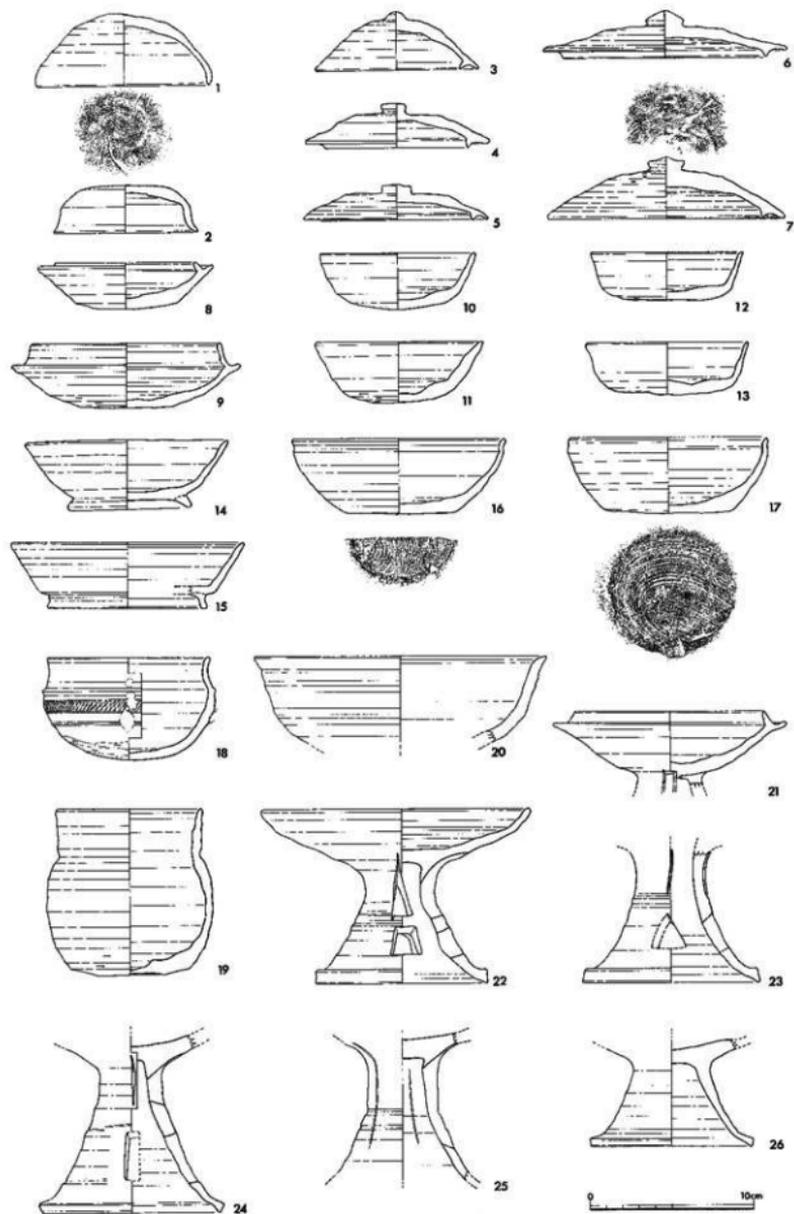
甕類 1は、胴部から頸部、口縁部にかけて「く」の字形につよく屈曲する甕である。口径12.2cmを測る。調整は、内面の頸部には指押さえ、胴部には横方向のヘラケズリが見られ、口縁部内外面にはヨコナデを施す。SB03下方斜面の6層から出土した。

2は、胴部から頸部が緩く外反して立ち上がり、頸部上方から口縁端部へさらにつよく外反する甕である。復元口径16.6cmを測り、胴部内面にヘラケズリ、口頸部の内外面に回転ヨコナデを施す。SB04付近の5層から出土したとされる。

3は、若干膨らんだ鈍い稜をもつ退化した複合口縁の甕である。復元口径18.65cmを測る。調整は内面の胴部に、横方向のヘラケズリ、口頸部の内外面にはヨコナデを施す。古墳時代中期の松山編年Ⅲ期に相当し得る。谷間の平坦面6層から出土した。

4は、3に近似する退化した複合口縁をもつ小型の甕である。復元口径9.6cm、胴部最大径12.1cmを測る。調整は内面の胴部に、棒状の工具によると思われる粗いヨコナデを施し、器壁の凹凸が顕著である。口頸部周辺の内外面には、ヨコナデを、胴部外面には粗いハケメを施している。古墳時代中期の松山編年Ⅲ期に相当し得る。谷間の平坦面6層から出土した。

7は、球形に近い胴部から「く」の字型に近い屈曲で、外反する口縁部に移行する甕で口径13.5cm、



第20図 平ラII遺跡包含層出土遺物(須恵器)実測図(S=1/3)

胴部最大径19.7cmを測る。胴部内面に横方向のヘラケズリ、口頸部の内外面にヨコナデ、胴部外面にハケメを施す。外面のはほぼ全面に煤の付着が確認された。SB01下方斜面の6層から出土した。

8は、球形に近い胴部から緩く外反して口縁端部に移行する堦で口径18.3cmを測る。内面胴部にヘラケズリ、口頸部の内外面に回転ヨコナデを施す。外面の一部に煤の付着が確認された。谷間の平坦面の6層から出土した。

高杯 6は、杯部の破片である。残存高3.1cmを測り、上端部に稜を持つ。杯部内面にはヨコナデの後、放射状のヘラミガキ、外面には丁寧なヨコナデを施す。稜のあり方と器形から、古墳時代中期頃の所産と推定し得る。SB01下方斜面の6層から出土した。

その他 5は、器種不明であるが、脚部の破片と思われる。底径は7.0cmを測り、内面には指ナデ、外面には2段にわたる指頭圧痕を施す。SI02・03下方の谷底付近6層から出土した。

瓦類 (第21図)

小破片に分かれていたが、全部で3個体分が出土している。接合が可能であった比較的大きな破片を選択して図化した。いずれも谷間の平坦面の6層から出土している。

平瓦 9・10は、凹面に布目圧痕が見られるいわゆる古代の「布目瓦」の破片である。

9は、明褐色を呈し、凸面調整に非常に目の細かい格子目叩きが観察される。凹面を観察したところ、粘土の継目、あて布の合わせ目の痕跡が認められ、側面の分割面も未調整のままであった。このことから桶巻き作りで製作されたものと推測され、少なくとも8世紀中頃を下限とする時期比定が可能である。さらにいえば、凸面の細かい叩き目の特徴は、7世紀後半から8世紀初頃の特徴と推定し得る。

10は、暗黄褐色を呈し、表面の風化が進むが、9と同様の調整が部分的に確認される。9とはほぼ同時期の所産と思われる。

11は、凹面には布目圧痕は認められず、幅1.5cm前後の板状の工具を用いたと思われる強いナデが見られ、起伏に富んだ表面性状を呈している。色調は暗灰色である。凸面には、部分的に非常に目の細かい格子目叩きが観察される。時期は不詳だが、9・10に近似すると思われる。

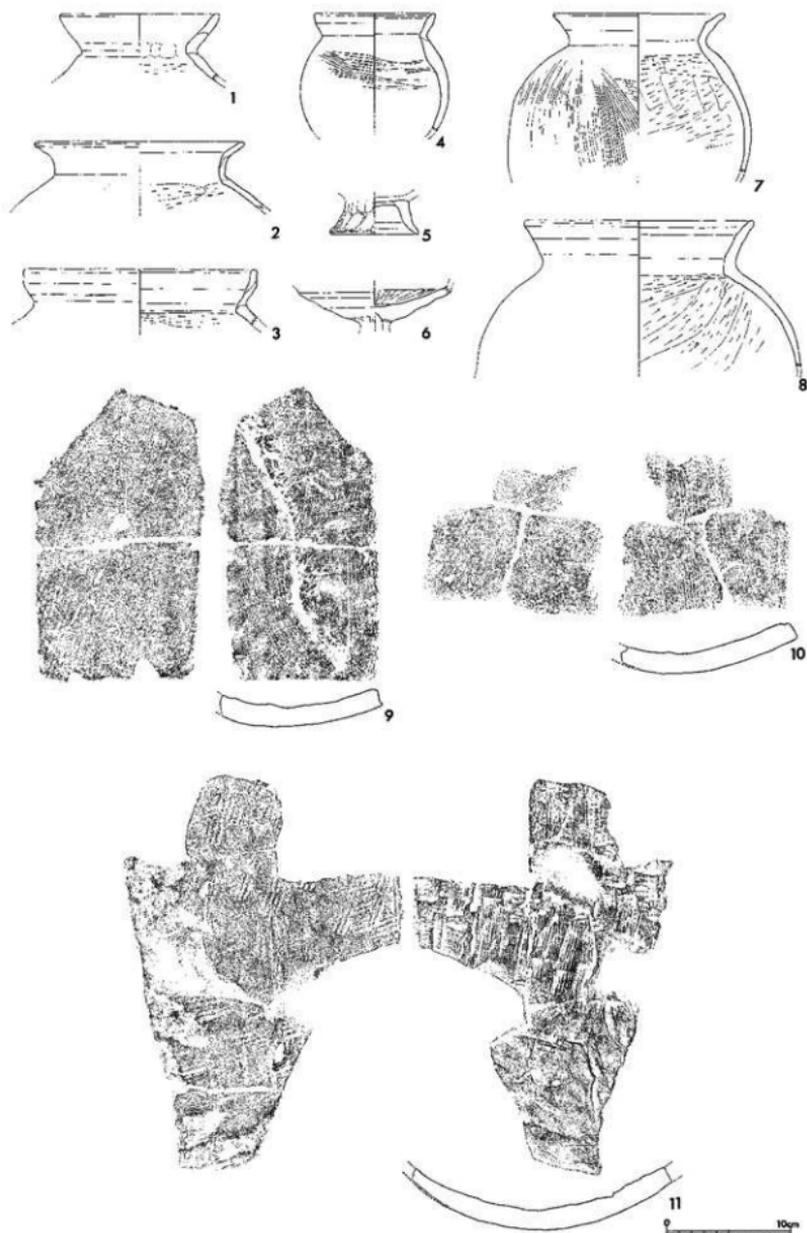
石器類 (第22図1・2、第23図13・14・15・16)

磨製石斧 1は、全長17.4cm、残存部最大幅6.1cm、重さ431gを測る。全体的に調整は顕著でなく、自然面が多い。刃部には丁寧な研磨が施され、側面の一部にも及んでいる。形態から縄文時代の所産である可能性が高い。SB03下方斜面の表土下から出土した。

紡垂車 2は、滑石製紡垂車の破片である。復元径5.25cm、厚さ1.6cmを測り、断面形は台形である。中央に径0.7cm前後の円形の軸孔があく。出土地点は不明である。

その他の石器²⁷ 13、15は安山岩製、14は黒曜石製の石鏃である。

16は、赤色の玉髓製の尖頭器もしくはスクレイパーである。長さ5.4cm、幅3.1cm、厚さ2.2cmの分厚なもので、両側縁の細かな調整により、尖頭状に加工されているが、先端は尖ってはいない。a面、c面に見られる大きな剥離痕は、ともにポジティブな面であるが、c面は打点が遠く、a面の大きな面が主剥離面と考えられる。打点は、b、e面に見られる自然面で、剥片剥離後に同じ面から2次加工が施されたことがわかる。この石器は、玉髓素材であり、玉作に関わる可能性も否定はできないも



第21図 平ラII遺跡包含層出土遺物(土師器・瓦)実測図(S=1/4)

の、石質や加工のあり方が他の玉作遺物と全く異質であることから、縄文時代以前の石器の可能性が高いと判断している。なお、13～16の出土地点はいずれも不明である。

石器としては、この他、有溝石錘、欠き月石錘等が十数点出土しているが、割愛した。

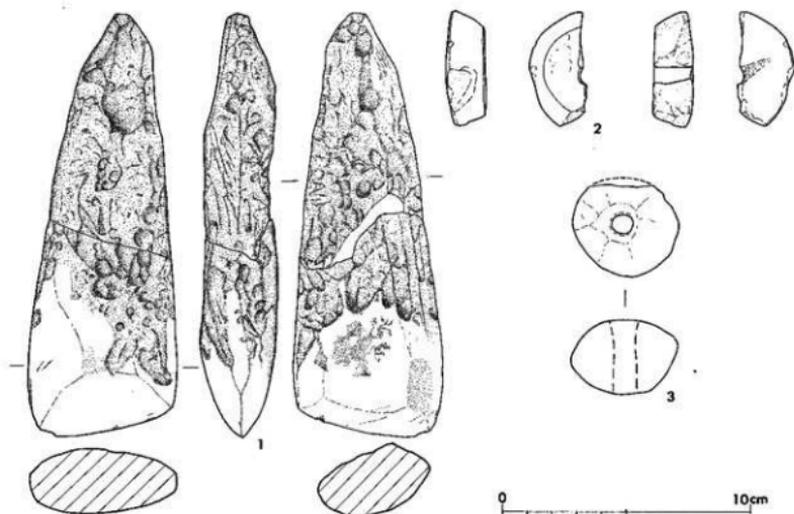
土錘 (第22図3)

3は、SB03下方斜面の6層から出土したもので、最大幅4.2cm、厚さ3cmを測る。中央に径1cm弱の円孔を穿っている。

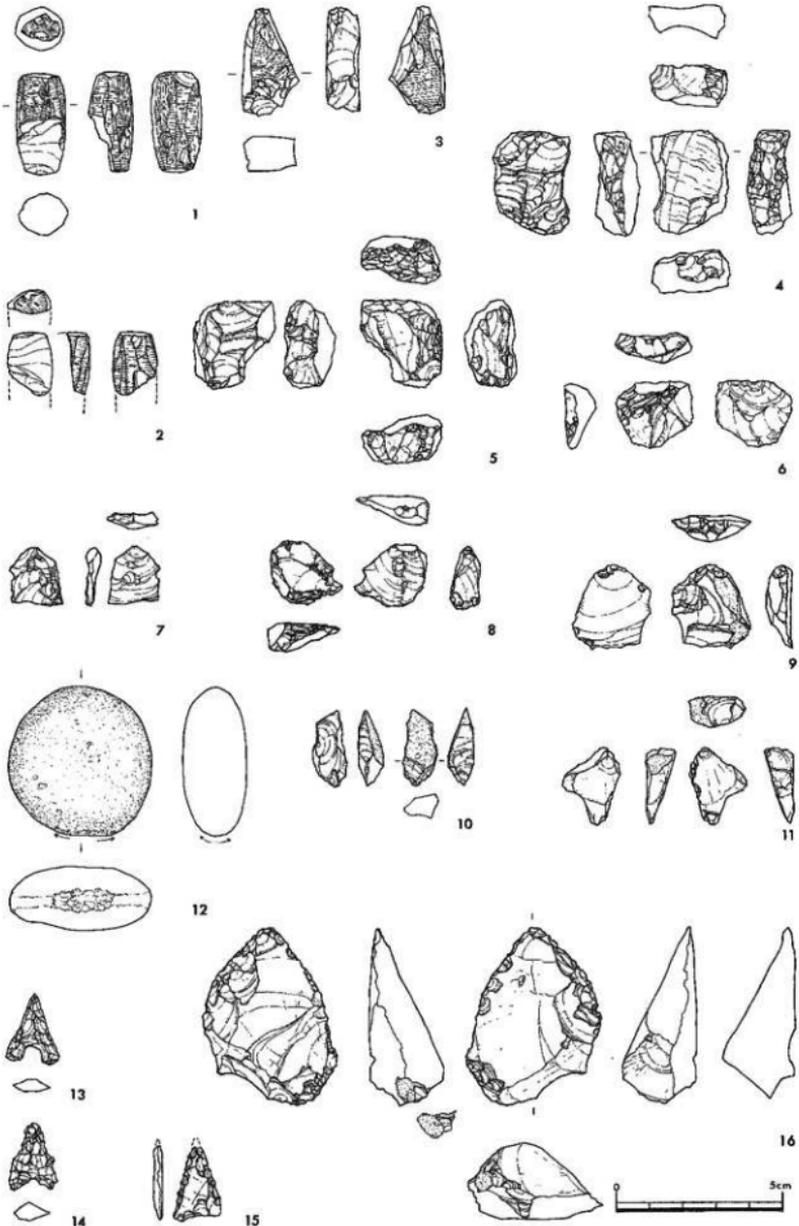
第2節 調査の成果と課題

竪穴住居跡と玉作 報告の通り、浅い谷間の平坦面に築かれた竪穴住居跡 (S101・02・03) は、古墳時代中期中葉から末頃の玉作関連の遺構 (工房跡) と判断してよい。おそらく2棟以内の住居がほぼ同時期か、若干の時期差を持って営まれていたと思われる。遺構面の残存状況が悪く、玉作関連の具体的な遺構や遺物の共存関係について詳らかにすることは出来なかったが、少なくとも玉材として碧玉を主体にし、未製品、剥片からうかがえる管玉、勾玉等を生産していたことは間違いない。しかし、生産工具は、紛失した内磨き砥石1点のみしか出土せず、他の石製品、鉄製品が皆無であったことは留意される。これは、住居跡から斜面下方の谷底部へ流出したとの推測も可能だが、多量の土器小片や玉材の小片が住居跡周辺に止まっている状況からすると納得し難い。おそらく、玉生産の場が廃絶した際、何らかの理由で他所へ持ち出したものと推察される。

さて、今回の調査で得られた成果の一つに、住居跡の床面 (地山面) 付近で見られた焼土面 (塊) と焼けた碧玉片の共存が挙げられる。こうした性格の焼土は、松江市平所遺跡¹⁸⁾、安来市人原遺跡¹⁹⁾



第22図 平ラII遺跡包含層出土遺物 (石器他) 実測図 (S=1/3)



第23図 平ラII遺跡包含層出土遺物(玉作関係遺物・石器)実測図(S=2/3)
 (1~9…碧玉 10…水晶 11…めのう 13,15…安山岩 14…黒曜石 16…玉髓)

の工房跡で既に検出されており、工房内での照明や暖の機能の他に、玉類の発色を良くしたり、加工しやすくするための機能を持つとされてきた。平野遺跡では水晶類が、大原遺跡では瑪瑙類がその対象となっている。当遺跡のものも、やはりこうした機能の中で理解される。つまり、玉生産のある段階で、碧玉に意図的に火熱を加え、その発色性を高める工程が存在したものと推測されるのである。

玉作関連の遺跡は、現在までに、県内、出雲地方で約60箇所²¹¹近くが知られているが、当遺跡の事例は、今のところその東限に位置することになる。安来市内においても、伯太川流域を中心に玉造遺跡、高広遺跡、鍵尾遺跡、大原遺跡等が知られていたが、当遺跡はその分布域をさらに広げたことになる。この内、近年調査された大原遺跡とは、時期、碧玉・瑪瑙・滑石等の玉材、2棟程からなる小規模な工房跡、未製品の大きさ等が似通った性格を示し、注目される。

古墳時代中期から後期にかけて、県内の玉生産の中心は、原石の産出地である玉湯町の花仙山周辺であることは周知の通りである。玉湯で玉作り遺跡が盛行する頃、安来平野周辺でもその遺跡の密度と分布域を増すことが大いに考えられる。それは、全体的に見れば、北陸地方の玉生産が前期の盛行ぶりから一転して衰退に向い、畿内地方で滑石製品を主体とする新たな生産遺跡が急増、盛行し、ここ出雲地方で碧玉製品を主体とする生産が一層発展を見せる現象²¹²と機を一にしている。今後は類例資料の増加を待って、原石産出地と供給地の比定から導かれる生産と流通の様相を焦点に、当時の政治的・社会的背景をより一層探求する必要がある。

掘立柱建物跡について 今回の調査で緩斜面を断面L字状にカットして構築された7世紀頃の掘立柱建物跡5棟を検出した。このうち、SB02、03には建て替えに伴う遺構の切り合いが見られたが、他は単独で存在していた。いずれも、遺構の検出状況、遺物の時期幅を考慮すると、おそらく、短期間の使用であったことが予測される。これらの建物跡が、ほぼ同時期の所産であれば、小さな谷に短期間営まれた一集落の単位を如実に表わすものと言え得る。なお、集落の生業を何わせる明確な遺物の出土はなかったが、土師器の甕、甔、土製支脚等、どちらかといえば日常生活色の濃い器種が顕著に出土したのは示唆的である。

さて、こうした斜面を削りだして構築された古墳時代後期から奈良時代にかけての建物跡は、近年の大規模調査²¹³でも松江市から安来、米子市にかけて、谷に面した斜面を中心に検出されているようだ。多くの遺構は、当遺跡と同じく、床面（地山面）が半分以上流失したかの様な状況で検出されるが、これはその建物の構造のためと解される。すなわち、床面は地山を削平した平坦面のみで構築するのではなく、斜面の下方では盛り上げて構築し、そこに柱を立てていたものが、やがて盛り土が流失した状況で検出されるという解釈である。当遺跡においても、盛り土は一切確認できず、流失したものと理解している。

しかし、一見住居に不適切な斜面で、しかも盛り土という不安定な構造を選択して築くのは如何なる事情であろうか。これは、一つにはその建物の使用目的が、恒常的あるいは長期的な定住を前提とせず簡易なもので事足りる内容であったとも考えられるし、また、敢えて水捌けの良い場所を必要とした結果とも考えられる。さらに、想像を逞しくすれば、田畑等の生産基盤に成り得る平地の住居利用を意図的に避け、あるいは必要に迫られて避けざるを得なかったとも考えられる。いずれにせよ、現段階では想像の域を出ないが、今後資料が蓄積された段階でその立地と地理的環境、遺物の検討が

ら解明を図らねばならない。

1号横穴墓とSX01 7世紀中葉から後葉に時期比定される1号横穴墓は、7世紀前後に築かれ営まれた穴陣横穴墓群とは尾根一つを隔てた比較的近い場所(直線距離で約80m)にある。时期的に約半世紀程の開きがあるが、その被葬者間の系譜や関係は不明である。1号横穴墓の構造は、いわゆる意宇平野から安来平野に盛行する「二重羨道」、「意宇型」と呼ばれるような玄門へ羨道部は持っていない。狭長な玄門に、ごく短い羨道が付随する形態である。こうした形態の特徴は米子市周辺のものに共通しているが、前庭部が広く、支室も便化家形の平入りという点は、安来平野の横穴墓と共通している。したがって、形態上は、安来平野の典型例が退化したタイプとも、安来と米子の折衷タイプとも見てとれよう。この横穴墓で注目されるのは、支室内の礎床であった。同様の例は、県内にほとんど例を見ない。破砕された須恵器の壺と杯、土師器の赤い鉢が、礎床の上や周辺のみならず、下からも出土したことは、礎床を設置するのと、土器を敷く行為がほぼ同時であった可能性を物語る。完形品ではなく、敢えて破砕して敷くことに、土器廃床に通じる呪的観念と行為が伺えるのである。

さて、この横穴墓の西約20mの地点にSX01が存在する。諸状況から、県内に類例が少ない⁴¹³箱式石棺を有する古墳時代終末頃の単葬の古墳であると判断した。なお現状では、1号横穴墓とSX01の时期的な前後関係は不詳である。しかし、後者は古墳でありながら平野から離れ、奥まった谷の傾斜面をあえて選地しており、両者は同じ斜面上に並んで構築されるべき系譜関係にあったとも推測される。

(註) 1、松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討—」『鳥根考古会誌』第8集 1991年3月

2、山本 清「山陰の須恵器」『鳥根大学開学十周年記念論文集』1960年

3、報文は、丹羽野裕氏の教示を得て、原案を作成していただいた。また、片岡詩子氏(玉湯町教育委員会)には、遺物の分類等のご教示をいただいた。

4、大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第11集 1994年3月

5、足立克己・丹羽野裕他『高広遺跡発掘調査報告書—和田田造造成工事に伴う発掘調査—』1984年3月(鳥根県教育委員会)

6、中村浩『和泉陶器の研究—須恵器生産の基礎的考察』1981年11月(柏書房)

7、報文は、池西俊一、丹羽野裕両氏の教示を得た。丹羽野氏には報文の原案を作成していただき、ほぼそのまま掲載させていただいた。

8、鳥根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1977年

9、今岡一三・寺尾 令『白コクリ遺跡、大原遺跡、一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』1994年3月(鳥根県教育委員会)

10、鳥根県教育委員会『鳥根県生産遺跡分布調査報告書Ⅳ』1987年。この段階で53箇所であったが、近年の調査で東出雲町四郎Ⅱ遺跡、斐川町大倉遺跡、ほか数遺跡が加わった。

11、関川尚功「6 玉とガラス」『古墳時代の研究5 生産と流通Ⅱ』1991年(雄山閣出版)

12、一般国道9号(松江道路・安来道路・米子道路)の建設予定地内の調査で増加している。

13、出雲地方における古墳時代終末頃の石棺は、松江市の古志大谷4号墳等があるが、切り石を用いた精巧なものである。また、横口式石椁あるいは石室は松江市朝酌町の題原1号墳や松江市イガラヒ古墳群等で見られるが、形態的に、本例とは異なっている。

第5章 吉佐山根1号墳の調査

第1節 遺構と遺物

位置 (第1・2・4図、第3章P.8参照) 平ラII遺跡の調査区東端に位置する。標高約56m以上を測り、馬蹄形の尾根のまさに頂上部から検出された。この尾根上には、他に古墳は無く、単独で存在している。北方には、中海、弓ヶ浜半島、日本海、島根半島を眺望し、南東には、鳥取県大山を望む大変に見晴らしの良い土地にある。古墳の東方眼下には、カンボウ遺跡、石田遺跡の所在する吉佐地区の小平野が広がっており、この平野から古墳までは比高差約50m前後を測る。古墳の北東辺から平野までは、崖に近い急峻な斜面となっており、平野からはまさしく「見上げる」高さを誇る。立地からすると、この小平野を意識して築造されたことが理解される。

発見の契機 平ラII遺跡のトレンチ調査の一環で、山林であった尾根頂部を表土以下10cm程掘り下げた際、偶然跡先が石棺に触れたのが切っ掛けである。したがって、それ以前は、古墳との認識は無く、墳丘上の高まりも全く認められない状況であった。古墳を確認後、新たに土層観察用の畔を設け、調査を再開した。

周溝 (第24図、第25図、第35図)

規模・形態 周溝は、底面の幅0.4~1.2m、深さ0.15~0.4mを測り、墳丘の北東辺を除く、3辺の墳裾を「コ」の字形にめぐっている。長さは、溝底面の外周で、北西辺、南西辺、南東辺の順に、10.9m、9.5m、8.1mを測る。断面形は、大部分が逆台形状を呈し、底面と側面の境界が明瞭となっている。底面の幅、深さ及び傾斜は一定しないが、周溝が途切れる北東辺の両端にむけて、広く浅くなり、かつ緩やかではあるが傾斜を増す傾向が認められた。これは、周溝が、墳丘を区画する意味に加えて、排水の用途を果たしていたことを裏付ける。

覆土 覆土は、暗褐色土層(第25図1)の単層からなり、墳丘上の堆積土とは分別出来なかった。

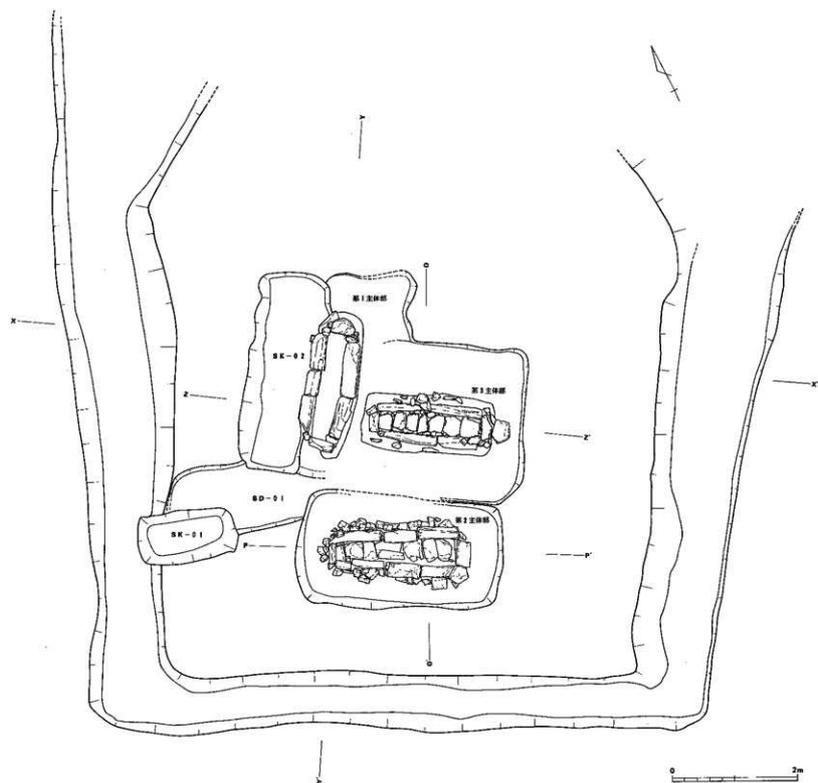
出土遺物(第35図1・2) 覆土の底面近くから、古式土師器2個体分が小破片として出土している。風化がかなり進み、小片と化していることから、原位置を保持した遺物とは考えられず、おそらくは他所からの流入と考えられる。

1は、複合口縁を持つ甕の口へ頸部片で、復元頸部径9.5cmを測る。全体的に器壁が薄く、シャープな印象を持つものである。調整は内外面にヨコナデを施す。古墳時代前期、小谷式期に並行する所産であろう。

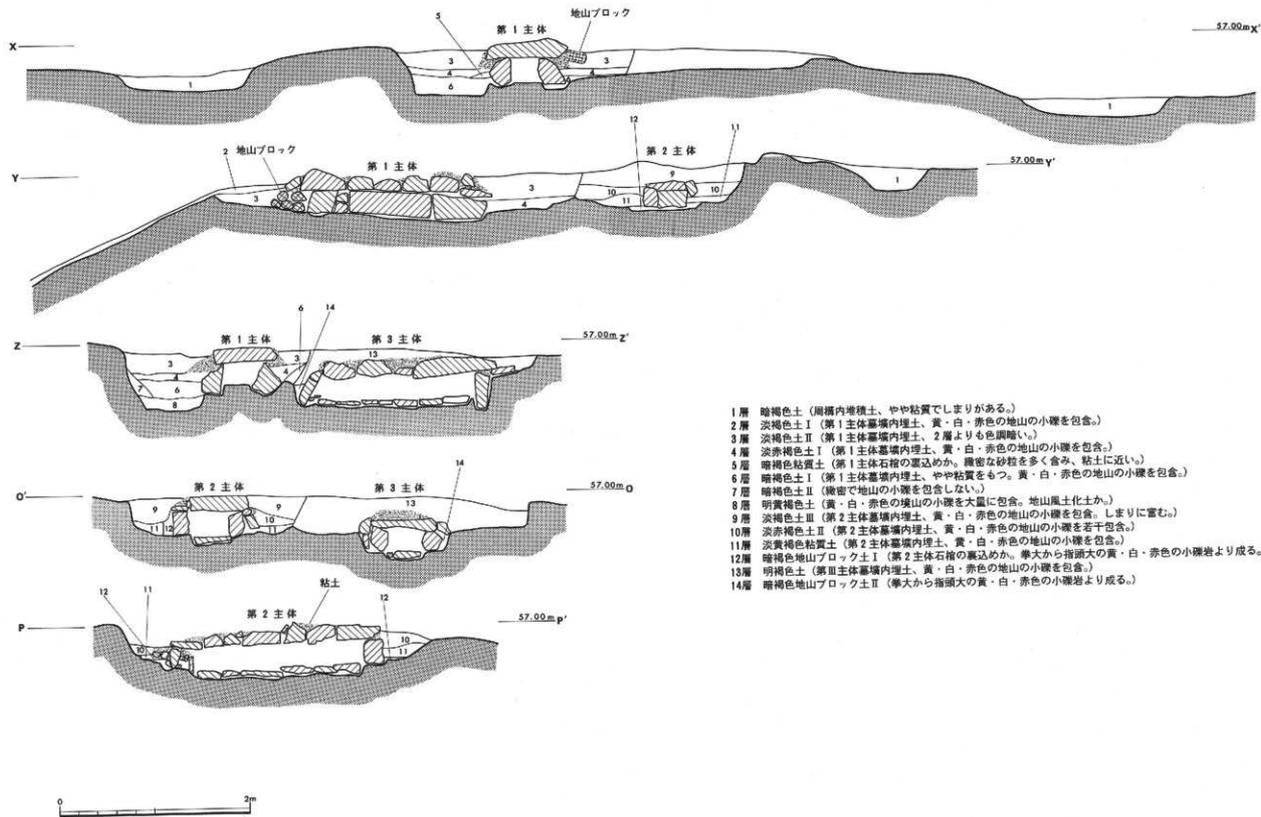
2は、二重口縁で頸部に断面三角形の凸帯を持つ壺の頸部片と思われる。復元頸部径11.3cmとやや小型である。調整は、風化により判然としにくい。古墳時代前期、小谷式に並行する所産であろう。

墳丘 (第24図、第25図)

規模・形態・覆土 低墳丘の3辺を「コ」の字形にめぐる周溝で囲った、方形プランを有している。墳丘に伴う盛り土の有無は確認できなかったが、表土以下10~20cm(覆土:暗褐色土層)程の深さで、地山面もしくは石棺蓋石上面に到達している。さらに、墳丘周辺に、削平や攪乱の痕跡は一切無く、



第24图 吉佐山根1号墳平面实测图



- 1層 暗褐色土 (周溝内堆積土、やや粘質でしまりがある。)
- 2層 淡褐色土Ⅰ (第1主体墓壇内埋土、黄・白・赤色の地山の小礫を包含。)
- 3層 淡褐色土Ⅱ (第1主体墓壇内埋土、2層より白色調強い。)
- 4層 淡赤褐色土Ⅰ (第1主体基礎内埋土、黄・白・赤色の地山の小礫を包含。)
- 5層 暗褐色粘質土 (第1主体石棺の裏込めか、緻密な砂粒を多く含み、粘土に近い。)
- 6層 暗褐色土Ⅰ (第1主体墓壇内埋土、やや粘質をもつ。黄・白・赤色の地山の小礫を包含。)
- 7層 暗褐色土Ⅱ (緻密で地山の小礫を包含しない。)
- 8層 明黄褐色土 (黄・白・赤色の塚山の小礫を大量に包含。地山風土化土か。)
- 9層 淡褐色土Ⅲ (第2主体墓壇内埋土、黄・白・赤色の地山の小礫を包含。しまりに重む。)
- 10層 淡赤褐色土Ⅱ (第2主体基礎内埋土、黄・白・赤色の地山の小礫を若干包含。)
- 11層 淡黄褐色粘質土 (第2主体墓壇内埋土、黄・白・赤色の地山の小礫を包含。)
- 12層 暗褐色地山ブロック土Ⅰ (第2主体石棺の裏込めか。拳大から指頭大の黄・白・赤色の小礫岩より成る。)
- 13層 明褐色土 (第3主体墓壇内埋土、黄・白・赤色の地山の小礫を包含。)
- 14層 暗褐色地山ブロック土Ⅱ (拳大から指頭大の黄・白・赤色の小礫岩より成る。)

第25図 吉佐山根1号墳墳丘土層断面図

保存状況も良好であることからすると、元来、墳丘は低く、盛り土もあまり施されていなかった可能性が高い。段築や葺石、貼石等の外表施設は一切認められなかった。

規模は墳裾（周溝底面の内周）で、北西辺、南西辺、南東辺の順に、長さ約7.5m、8.0m、8.1mを測り、周溝を含めると、外周の上場と同じく、約11.3m、9.8m、8.2mを測る。周溝底面から墳頂部までの高さは、盛り土を加味してもせいぜい1m前後と推測される。おそらく築造時にも、現状とさほど変わらない、約8×8×1m前後を測るほぼ正方形の低墳丘であったと推測される。

埋葬施設他（第24図） 埋葬施設としては、墳頂部で一部に切り合い関係を持ちながらもそれぞれの墓壇を持つ箱式石棺3基を検出した。この他、墳頂部に性格不明の土坑と溝状遺構各1基、南西の墳裾部に土坑1基を検出した。以下、埋葬施設に関しては、その検出順に従って第1～3主体部とし、他の遺構には任意で呼称を与え概説する。

第1主体部（第24～26図）

石棺 墳頂部中心をやや北西寄りに外れた箇所に位置する第1主体部の埋葬施設は、割り石を組み合わせた箱式石棺1基である。

石棺の主軸はN-37°-Eをとり、第2主体部と第3主体部の主軸延長線とは、ほぼ直交する位置関係にある。

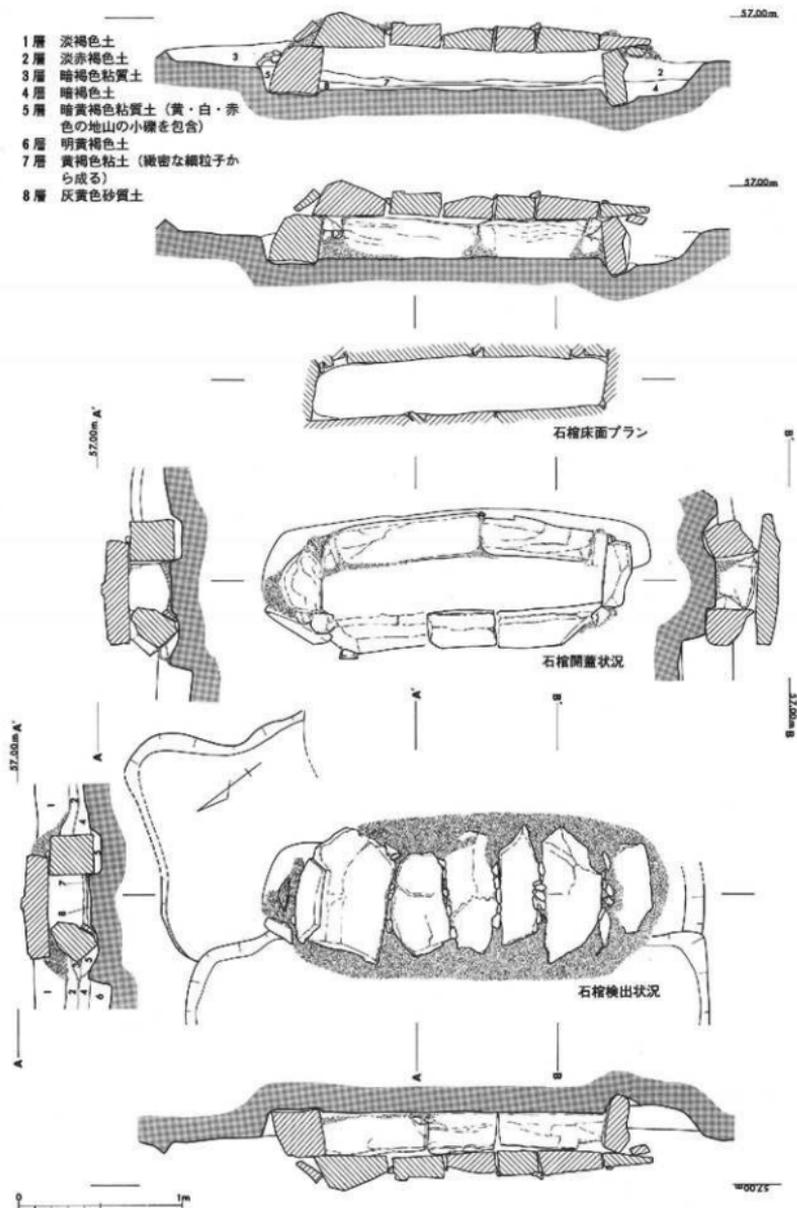
規模は内法で、長さ1.7m、両小口幅0.3m、深さは側石の上面から約0.25mを測る。石棺の構造は、北側小口には厚く重みのある石を、南側小口にはその半分ぐらいの石をそれぞれ1個づつ用いている。側石は、長方形の柱状の石を主体に東側に3個、西側に2個敷き並べており、側石の外側に小口石が配置されている。北半の側石は土圧によって内傾する箇所が見られたが、側石の設置された地山面の加工状況からすると、本来的にはほぼ垂直的に立ち上がり、断面形は方形であったと推定される。棺床は、地山面となっており、特別な構造は認められなかった。各棺材の隙間は淡灰色の緻密で均質な粘土で丁寧に目張りされ、小口石と側石の隙間に小礫の使用も見られた。

蓋石は、6個からなり幅広く重量感のある石を主体的に使用していた。中でも北側小口付近のものは、最大径約80cmで大人3人がようやく運び得るものである。逆に、最も南側にあるものは扁平で小さく、意図的な蓋石の配置がうかがえる。おそらくは、大きな方に被葬者の頭部を、小さな方に脚部を安置したと考えられる。蓋石間の隙間は、小円礫と緻密で均質な淡灰色粘土で目張りされていた。さらに、蓋石と側石、小口石の間も、同様の目張り粘土で、棺外を含むほどの幅と厚みをもって丁寧に被覆されていた。

一方、石棺内は丁寧に目張りに関わらず、流入した粘土、土砂、木根が堆積していた。堆積土（第26図7層、8層）は湿性に富み、水分が恒常的に流入していたことを思わせた。そのためか、本来の棺床面すなわち埋葬面は確認出来なかった。

なお、石棺材は全て、米子流紋岩と呼ばれる流紋岩（斑晶は斜長石）からなり、遺跡周辺で産出するものである。

墓壇 さて、この石棺をほぼ中央に納めている墓壇は、隅丸方形プランで二段掘りとも呼び得る構造を持っている。つまり、一つは、石棺を大きく取り囲む掘り方と平坦面（以下、1段目と呼ぶ）、も



第26図 第1主体部実測図 (※アミ部は目張り粘土を示す)

う一つは、その平坦面から掘り込まれる石棺にごく近接した掘り方と石棺底面の平坦面（以下、2段目と呼ぶ）の二段である。

1段目の、北側、西側は地山面から、南側の東隅と東側の3分の2は第3主体部の墓壇内埋土中から、南側の西隅から中程まではSD-01の埋土から、それぞれ掘り込まれている。また、西側のおよそ半分は、SK-02の上場の一部と壁面を、共有する状況で確認された。形状は、隅丸の長方形を意識して掘り込まれているが、土層断面の観察の結果、第3主体部と接する部分は、大きく第1主体部の石棺側に接近して不整形をなすものと思われる。規模は、長軸径約3.3m、短軸径約2mを測り、深さは、石棺の北側で、掘り方上場から1段目の平坦面まで約10cmを測る。

2段目は、北側、南側、東側とも地山面もしくは第3主体部の墓壇内埋土中から、ほぼ石棺の側石、小口石の縁辺に沿うように、掘り込まれている。西側の1辺は、掘り方の上場が明確には認められなかったが、土層断面には、埋土中の4層上面（第26図）から掘り込まれた痕跡を見てとれる。また、棺材底面の地山面は、側石、小口石の下面の形状に合うように掘りくぼめている。この2段目の掘り方は、石棺を埋置し安定化する目的のものと判断された。

なお、こうした墓壇に包含される状態で、石棺に隣接する土坑SK-02を検出したが、この土坑は、その上場の東側の一部が、第1主体部の石棺側石の下面に入り込んでおり、第1主体部の石棺を設置する以前に、掘り込まれたものと判断される。SK-02については、後述する。

遺物 一切出土しなかった。

第1主体部の構築および埋葬の過程 上記の諸状況と土層観察（第26図）から、次の過程が考えられる。

- ①隅丸長方形を意識した墓壇の1段目を掘る。
- ②そのほぼ中央に石棺の寸法・形状と安定を考慮しつつ、2段目の墓壇を掘る。
- ③2段目の墓壇内に石棺を埋置する。この際、棺材と地山面の隙間を小礫を含む5層で裏込めし、棺材間の隙間には日張り粘土を施す。
- ④1段目の墓壇内で、棺外のおよそ小口石と側石の上面付近まで土を埋め戻し、棺をさらに安定させる。
- ⑤被葬者を入棺し、蓋石を乗せ、隙間を小礫と淡灰色粘土によって被覆する。
- ⑥棺上をはじめ、1段目の墓壇を全て埋め戻す。

なお、被葬者の入棺については、③の最中、③と④の間、④の最中の可能性も否定できない。しかし、古墳の被葬者は丁重に扱われたとの一般的な傾向を重視し、石棺の埋置が整った⑤の段階に位置付けた。

第2主体部（第24・25・27・28・29・35図）

石棺 第3主体部に隣接し、墳頂部中心をやや南西寄りに外れた箇所位置する第2主体部の埋葬施設も、割り石を組み合わせた箱式石棺1基である。

石棺の主軸はN-62°-Wをとり、第1主体部の主軸延長線とは、直交に近く、第3主体部の主軸とはおよそ並行する位置関係にある。

石棺の構造は、他の主体部と大差ないが、北西側小口付近に、粘土と小礫で蓋をし、立石で仕切られた幅20～23cm、長さ13～17cm、深さ13cm以下の小空間（以下、小室と呼ぶ）が検出された点は、特殊である。この小室を含む棺の規模は内法で、長さ2.05m前後、南東側小口幅0.43m、北西側小口幅0.27m、深さは側石の上面から約0.25m前後を測り、棺の幅は小口に従い一方を広く、他方へ行くほど狭くしつらえている。北西半の側石の一部は、土圧によって内傾する箇所が見られたが、側石の設置された地山面の加工状況からすると、本来的にはほぼ垂直に立ち上がり、断面形はほぼ方形であったと思われる。小口石は基本的に、側石の外側に配置され、南東側に厚く重みのある石を、北西側にその半分以下の大きさの石を1個ずつ使用し、側石には長方形の柱状の石を北東側に3個、南西側に4個ずつ並べている。また、小口石、側石の外面には拳大から人頭大の多数の角礫が、棺材の隙間を埋め、補強、安定化するように積み置かれていた。棺床は、厚さ5～10cm前後を測る板状の割り石6～7枚が底石として敷き並べてあったが、小室は地山面のままであった。この底石の一部は側石の下面に潜り込むように敷かれており、側石を据える前に底石を配置していたと思われる。これら各棺材の隙間は緻密で均質な淡灰色の粘土で丁寧に目張りされていた。

蓋石は7個からなり幅広く重量感のある大形の石を使用していた。中でも南東側小口付近のものは、最大径約70cmで大人2人がようやく運び得るほどのものであった。蓋石の大きさは、北西側小口に向かうほど、幅が狭く小さなものを使用しており、棺の幅と同じ傾向にある。これは、棺の幅に応じた蓋石の意図的な配置の結果であり、通例の箱式石棺同様、広い方に被葬者の頭部を、狭い方に脚部を安置したものと推定される。各々の蓋石間の隙間には、小角礫と緻密で均質な淡灰色粘土で丁寧に目張りが施されていた。さらに、蓋石と側石、小口石の間も、かなりの幅と厚みをもって目張り粘土で被覆されていた。

石棺内は、丁寧に目張りに関わらず、流入した粘土、土砂、木根が堆積していた。小室内に黄褐色粘土、その他に淡黄褐色粘質土（第27図4層、5層）が堆積し、湿性に富み、水分が恒常的に流入していたことがうかがわれる。淡黄褐色粘質土層の上層には、部分的に腐食土を思わせる灰白色粘土が認められたが、本来の棺床面すなわち埋葬面の比定は出来なかった。

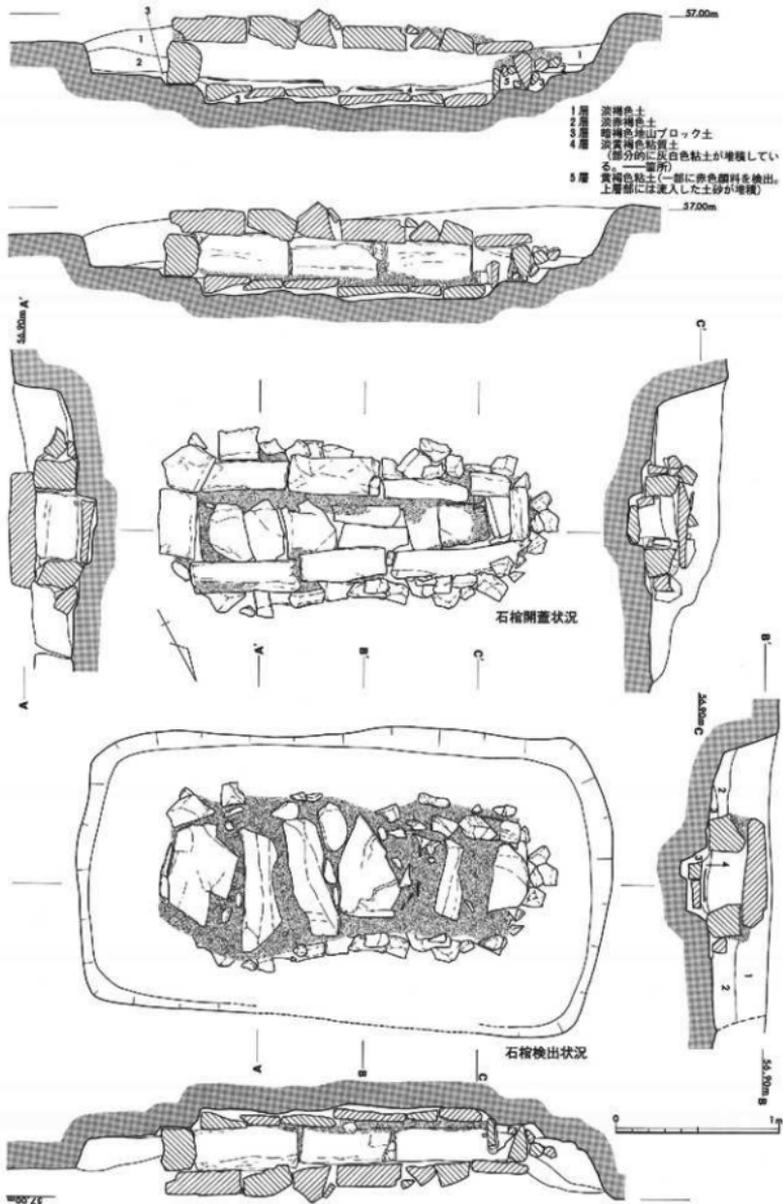
なお、石棺材は全て、米子流紋岩と呼ばれる流紋岩（斑晶は斜長石）からなり、遺跡周辺で産出するものである。

出土遺物（第35図3）棺内の南東側小口に近い箇所から鉄製刀子1点と、微量の赤色顔料（朱：第7章朽津論文参照）が出土した。いずれも、淡黄褐色粘質土中の底石上面から1～2cm程のレベルで検出されている。なお、小室内は、小礫と粘土で敷き目張りされていたが、遺物は一切検出されなかった。

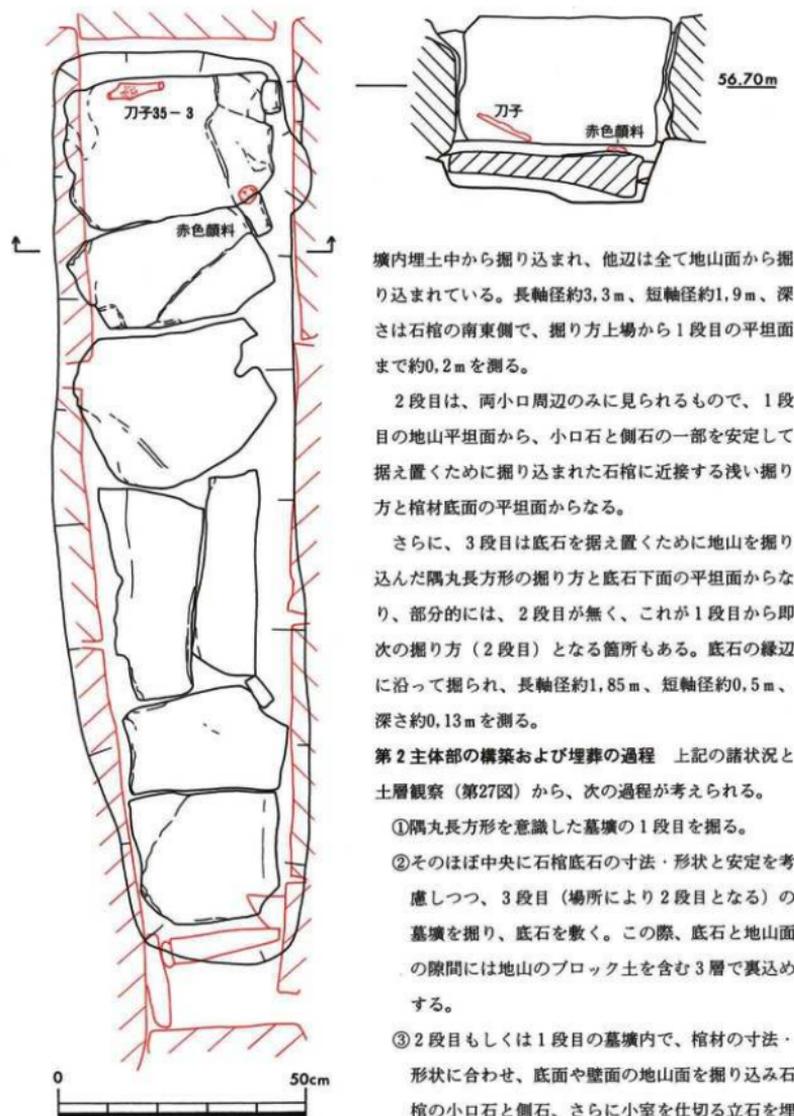
3は、刃部を南東側小口に向けて副葬されていた刀子である。全長12.8cm、刀身長10.2cm、元幅2.4cmを測る。棟角が無く、片側のタイプで棟は一直線を呈する。古墳時代前半期の所産と推測される²¹⁾。

墓壇 さて、この石棺をほぼ中央に納めている墓壇は、隅丸方形プランで3段掘り（場所によっては2段掘り）とも呼び得る構造を持っている。

1段目は、石棺を大きく取り囲む掘り方と地山の平坦面からなり、北東側の1辺が第3主体部の墓



第27図 第2主体部実測図 (※アミ部は自張り粘土を示す)



第28図 第2主体部石棺内 床面プラン及び遺物出土状況実測図

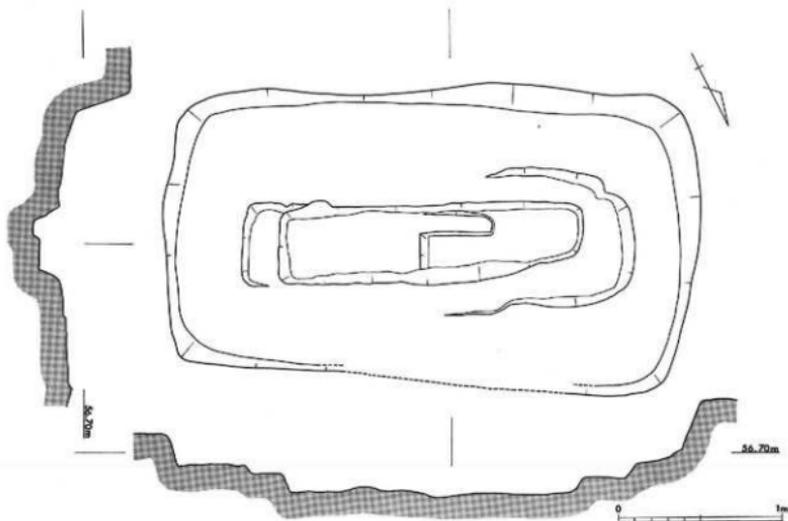
墳内埋土中から掘り込まれ、他辺は全て地山面から掘り込まれている。長軸径約3.3m、短軸径約1.9m、深さは石棺の南東側で、掘り方上場から1段目の平坦面まで約0.2mを測る。

2段目は、両小口周辺のみに見られるもので、1段目の地山平坦面から、小口石と側石の一部を安定して据え置くために掘り込まれた石棺に近接する浅い掘り方と棺材底面の平坦面からなる。

さらに、3段目は底石を据え置くために地山を掘り込んだ隅丸長方形の掘り方と底石下面の平坦面からなり、部分的には、2段目が無く、これが1段目から即次の掘り方（2段目）となる箇所もある。底石の縁に沿って掘られ、長軸径約1.85m、短軸径約0.5m、深さ約0.13mを測る。

第2主体部の構築および埋葬の過程 上記の諸状況と土層観察（第27図）から、次の過程が考えられる。

- ①隅丸長方形を意識した墓壇の1段目を掘る。
- ②そのほぼ中央に石棺底石の寸法・形状と安定を考慮しつつ、3段目（場所により2段目となる）の墓壇を掘り、底石を敷く。この際、底石と地山面の隙間には地山のブロック土を含む3層で裏込めする。
- ③2段目もしくは1段目の墓壇内で、棺材の寸法・形状に合わせ、底面や壁面の地山面を掘り込み石棺の小口石と側石、さらに小室を仕切る立石を埋置する。この際、棺材間を淡灰色粘土で目張りし、地山との隙間を地山のブロック土を含む3層や拳大から人頭大の若干の角礫で裏込めする。



第29図 第2主体部石棺除去後掘り方実測図（※アミ部は目張り粘土を示す）

- ④ 1段目の墓壇内で、石棺材の外側面に沿って拳大から人頭大の多数の角礫を並べて棺材の補強と安定をさらに図る。
- ⑤ 被葬者と副葬品を入棺し、蓋石を乗せて、隙間を淡灰色粘土と小角礫で被覆する。
- ⑥ 棺上をはじめ、1段目の墓壇内をすべて埋め戻す。

なお、被葬者の入棺については、③と④の間、④の最中の可能性も否定できない。しかし、古墳の被葬者は丁重に扱われたとの一般的な傾向を重視し、石棺の埋置が整った⑤の段階に位置付けた。

第3主体部（第24・25・30・31・32・35図）

石棺 第1・2主体部に隣接し、墳頂部のほぼ中央に位置する第3主体部の埋葬施設も割り石を組み合わせた箱式石棺1基である。石棺の主軸は $N-59^{\circ}-W$ をとり、第1主体部の主軸延長線とは、直交に近く、第3主体部の主軸とはおよそ並行する位置関係にある。

石棺の構造は、第2主体部と大差なく、規模は内法で、長さ1.77m、南東側小口幅0.35m、北西側小口幅0.3m、深さは側石の上面から約0.25m前後を測り、棺の幅は小口と同様に一方を広く、他方へ行くほど狭くなるようにしつらえている。北西半の側石の一部は、土圧によってわずかに内傾する箇所が見られたが、側石の設置された地山面の加工状況からすると、本来的にはほぼ垂直に立ち上がり、断面形はほぼ方形であったと思われる。小口石は基本的に、側石の外側に配置され、南東側は直立するが、北西側は棺内へかなり傾斜している。これは、土圧によって傾いた可能性が高く、本来は直立していたのだろう。側石には長方形の柱状の石を北東側に2個、南西側に2個づつ並べている。

また、小口石、側石の外面には拳大から人頭大の角礫10数点が、不規則ではあるが、棺材間や、棺材と地山の隙間を埋めて補強、安定化するように置かれていた。棺床には、厚さ3～8cm前後を測る板状の割り石7枚が底石として敷き並べてあったが、この底石の一部は側石の下面に潜り込むように敷かれており、側石を据える前に配置されたものと思われる。各棺材の隙間は緻密で均質な淡灰褐色の粘土で丁寧に目張りされていた。

蓋石は、5個の幅広く重量感のある石を使用していた。中でも南東側小口付近のものは、最大径約90cmで大人4人がようやく運び得るほどのものであった。蓋石の大きさは、北西側小口に向かうほど、幅が狭く小さなものを使用する傾向がうかがえ、棺の幅と同傾向にあることが分かった。これは、棺の幅に応じた蓋石の意図的な配置の結果であり、他の主体部同様、広い方に被葬者の頭部を、狭い方に脚部を安置したことを物語る。さらに、南東側の小口石の外側には、地山上に最大径30cm程の不整形で扁平な石が置かれており、あたかも頭部方向を標示するかのようにも見られた。

各々の蓋石間の隙間は、小角礫と緻密で均質な淡灰褐色粘土で丁寧に目張りが施されており、蓋石と側石、小口石の間も、かなりの幅と厚みをもって目張り粘土で被覆されていた。

石棺内は、丁寧な目張りに関わらず流入した粘土、土砂、木根が堆積していた。堆積土は淡灰褐色粘土(第30図3層)が単層堆積し、湿性に富み水分が恒常的に流入していたことがうかがえた。そのためか、本来の棺床面すなわち埋葬面の痕跡は認められず、比定は出来なかった。

なお、石棺材は全て、米子流紋岩と呼ばれる流紋岩(但し斑晶は石英と斜長石)からなり、遺跡周辺で産出するものである。

出土遺物(第35図4) 石棺の南東側小口に接する南西側の側石と蓋石の隙間に置かれた扁平な角礫の直上から小形の鉄製刀子1点が出土している。この刀子は、角礫と蓋石間の目張り粘土の中から、被覆されたような状態で検出されており、棺外の特異な部位への副葬として注意される。

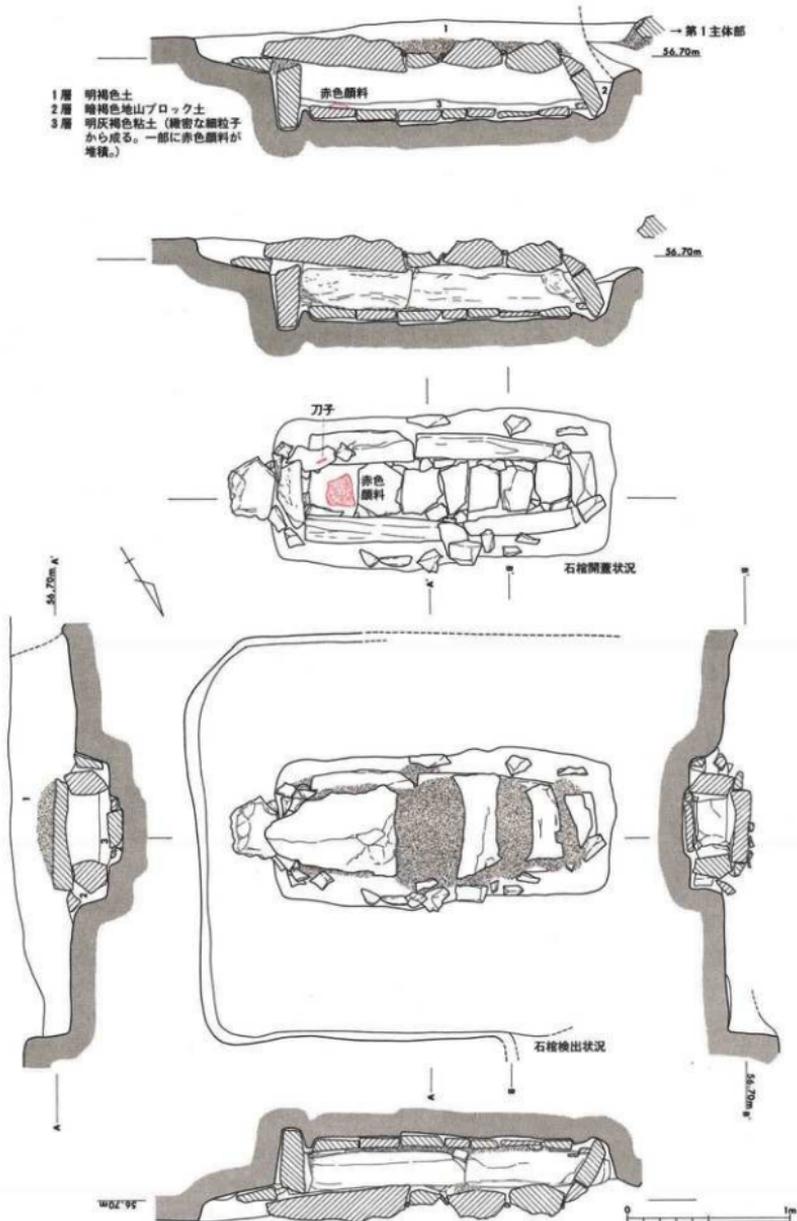
4は、全長5.5cm、刀身長3.6cm、元幅1.2cmを測る非常に小型の刀子である。棟関が無く、片関のタイプで棟は一直線を呈する。全面に錆が進み、剥落が著しい。古墳時代前半期の所産と推測される¹¹⁾。

また、棺内の南東側小口に程近い底石上から少量の赤色顔料(朱:第7章朽津論文参照)が出土した。底石上面から淡灰褐色粘土中にかけて、厚さ1～2cm、幅13～20程の範囲で検出された。塊ではないが、粘土内に薄く染み込むような状態で検出されており、比較的原位置を保持している可能性が認められる。なお、棺内の堆積土中において、径2mm以内の最粒子が数ヶ所に点在していたが、これらは検出状況からして、侵入した水によって原位置を動かされたものと判断した。

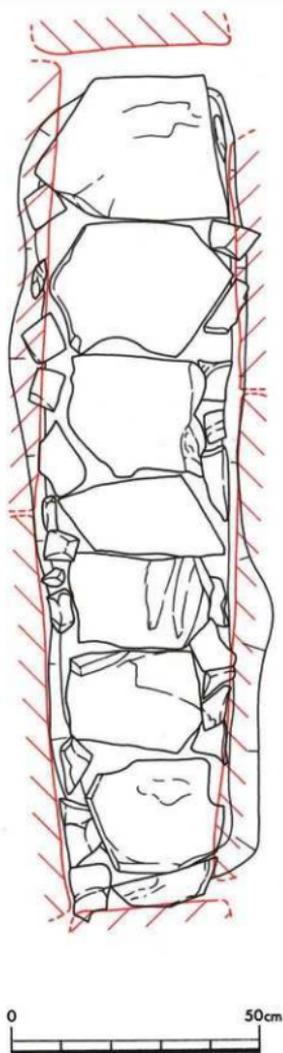
墓壇 さて、この石棺をほぼ中央に納めている墓壇は、第2主体部同様、隅丸方形プランで3段掘りと呼び得る構造を持っている。

1段目は、石棺を大きく取り囲む推定隅丸方形の掘り方と地山の平坦面からなり、南東側、北東側の2辺は地山面を掘り込んでいるが、北西側の1辺は第1主体部の掘り方によって切られ、南西側の1辺も第2主体部の掘り方で既に切られた状態で検出された。規模は、推定長軸径約3.0m前後、同短軸径約2.5m前後、深さは石棺の北東側で、掘り方の上場から1段目の平坦面まで約0.3mを測る。

2段目は、1段目の地山平坦面から、石棺に沿って隅丸長方形に掘り込まれた深い掘り方と小口石、



第30図 第3主体部実測図・同遺物出土状況実測図（※黒色のアミ部は目張り粘土を示す）



第31図 第3主体部
石棺床面プラン実測図

側石の底面をなす地山面からなる。棺材の底面の地山面は、側石、小口石の下面の寸法、形状を考慮して平坦化し、特に両小口石の底面は、側石の置かれる平坦面をさらに10cm前後掘り凹める地山加工がされている。2段目の規模は、長軸径約2.07m、短軸径約0.93m、1段目の平坦面から側石底面の深さ約0.2m前後を測る。この掘り方は、石棺を埋置し安定化する目的のものと判断される。

さらに、3段目は、2段目の地山平坦面から、底石を埋置するために底石沿いに地山を掘り込んだ隅丸長方形の掘り方と底石下面の地山面からなる。規模は、長軸径約1.65m、短軸径約0.45m、深さ約0.05～0.1mを測る。

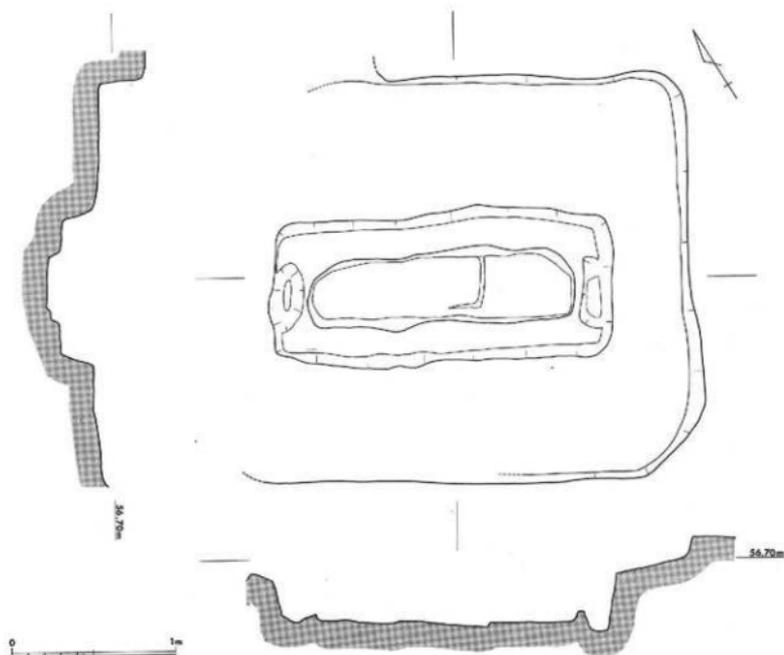
第3主体部の構築および埋葬の過程 上記の諸状況と土層観察(第30図)から、次の過程が一案として考えられる。

- ①隅丸長方形を意識した墓壇の1段目を掘る。
- ②そのほぼ中央に石棺底石の寸法・形状と安定を考慮しつつ3段目の墓壇を掘り、底石を敷く。この際、底石と地山面の隙間には地山のブロック土を含む2層で裏込めする。
- ③2段目の墓壇内で、棺材の寸法・形状に合わせて、棺材の底面や壁面の地山面を掘り込み、石棺の小口石と側石を埋置する。この際、棺材間を淡灰褐色粘土で目張りし、棺材と地山との隙間を地山のブロック土を含む2層や角礫を用いて裏込めする。
- ④被葬者と副葬品を入棺し、蓋石を乗せて、蓋石間、蓋石と小口石及び側石の隙間を淡灰褐色粘土と若干の小角礫で被覆する。
- ⑤棺上をはじめ、1段目の墓壇内をすべて埋め戻す。

SK-01 (第24・33・35・36図)

位置 墳丘の北西側墳裾の西隅部に程近い箇所にある。遺構の上場で、標高56.8mを測る。既存した周溝、墳裾、SD-01の一部を破壊して掘り込まれている。

規模・形状 平面形は上場、下場ともに長方形を呈し、縦断・横断の断面形はいずれも逆台形状を呈している。規模は遺構上面で長軸径1.5m前後、短軸径0.8m、遺構底面で長軸径1.21m前後、短軸径0.5m前後を測り、深さは最大0.4m程である。



第32図 第3主体部石棺除去後掘り方実測図

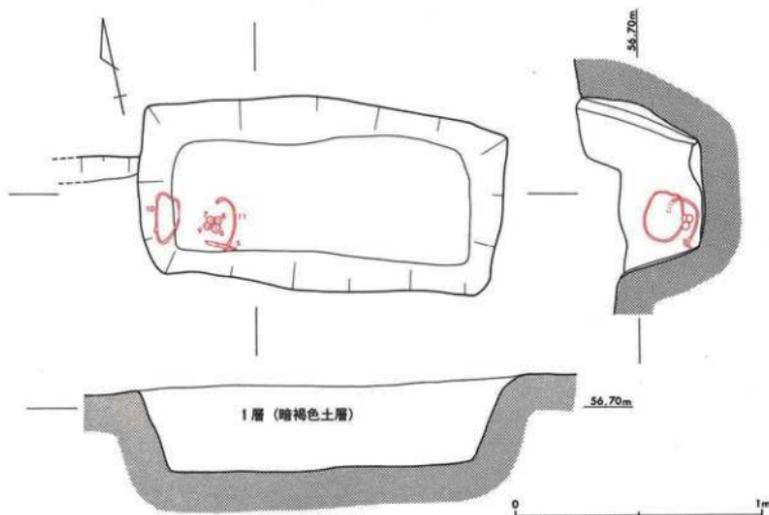
覆土 地山ブロックを大量に含む暗褐色土の単層からなる。遺構検出時、堆積土中は湿性に富み、じめじめした状況にあった。これは、地山の水捌けが非常に悪く恒常的に水溜りのごとき状況にあったからと推定される。

出土遺物 (第35図5・6・7、第36図8・9・10) 土坑の西隅付近から、刀子1点、鈴5点、環状製品2点の計8点の鉄製品が共伴出土した。いずれも、地山直上面ではなく暗褐色土の下層から出土し、一括資料といえる。

5の刀子は、南壁沿いに刃部を外側へ向けてほぼ水平に置かれていた。切先と基尻を欠損するが、残存長14cm、刀身長10.3cm以下、元幅1.9cm以下を測る。棟関と刃関を持つ両関タイプだが、錆の侵食が著しく刃関部の形状は判然としない。形態からして古墳時代後期以降の所産と推測される²³。

6・7・8・9の球状をした鈴は刀子に近接し、ほぼ同じレベルからかたまって出土した。検出時にはもう1点存在したが、錆が進み、取り上げの段階で損壊してしまった。いずれも、錆の侵食が著しいこともあり製作法は判然としないが、それぞれ半球状を呈した鈴口のある下半部と鉤の着く上半部が接合された鋳造品と推定される。出土状況からして、これらの鈴は単独ではなくセット関係にあるものと推察される。

6は、長径3.5cm、短径3.3cmを測るほぼ球状のもので、鉤を欠損し鈴口は半分が錆で塞がっている。



第33図 吉佐山根1号墳SK01実測図・同遺物出土状況実測図
(遺物の番号は、第35・36図に対応する)

全体に錆の侵食が進むが表面の一部には、布のごとき繊維質の付着が認められる。

7は、鈕を含む直径が4cm前後のほぼ球状を呈するもので、鈴口は半分以上が錆で塞がっている。全体に錆の侵食が進むが表面の一部には、布のごとき繊維質の付着が認められる。内部にはエックス線撮影の結果、小石と思われる丸が認められる。

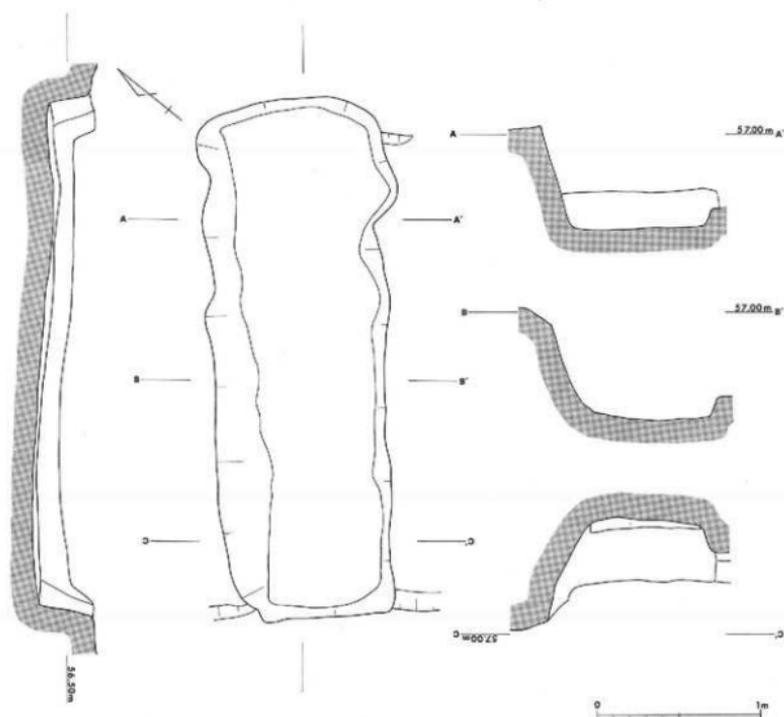
8は、残存部長径3.5cm、短径3.3cmを測るほぼ球状のもので、鈕を欠損し、鈴口はほとんどが錆で塞がっている。全体に錆の侵食が進むが表面の一部には、布のごとき繊維質の付着がある。内部にはエックス線撮影の結果、小石と思われる丸が認められる。

9は、鈕を含む直径が3.8cm前後のほぼ球状を呈するもので、鈴口は錆や有機質の付着で塞がっている。全体に錆の侵食が進むが、表面の一部には布のごとき繊維質や木質の付着が認められる。また内部にはエックス線撮影の結果、小石と思われる丸が認められる。

10・11は、用途不明の円環状の鉄製品である。10が西壁沿いから、11が鈴と刀子に近接して、それぞれ元は直立していたものが西壁の方向へ倒れ込んだかの状況で出土した。検出時には錆びて細片化していたものの、前者が円環状に連なっており遺物の原形を推定することができた。おそらく両者は、もともと同形状で一對をなす遺物であった可能性が高い。

10は、細片化していたがほぼ円形に還元され復元直径21cm前後を測る。断面形は、ほぼ円形状を呈し直径約0.7cmを測る。鉄地の内部は基本的に詰まっているが、一部に若干空洞化する箇所も認められる。全体に錆の侵食が顕著だが、表面に繊維(糸状のもの?)が巻かれているのが確認される部分もある。

11は、細片化し、錆による腐食と折損が著しく歪んだ形状に復されるが、元は10同様の円形状であ



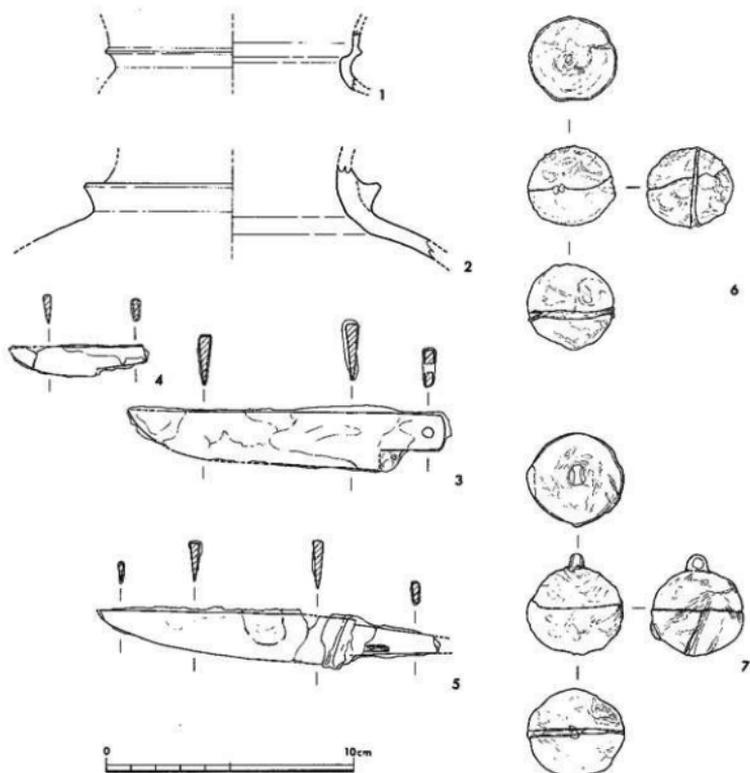
第34図 吉佐山根1号墳SK02実測図

ったと推定される。復元直径は、20～21cm前後を測り、10とはほぼ一致するものと思われる。断面形は、ほぼ円形状を呈し直径約0.6cmを測る。鉄地の内部は基本的に詰まっているが、一部に若干空洞化する箇所も認められる。全体に錆の侵食が著しいが、表面に繊維（糸状のもの？）もしくは樹皮が巻かれているのを確認できる部分もある。

時期と性格 本遺構の出土遺物は、刀子を除きその類例がほとんど知られていないものため時期と性格の比定が非常に難しい。しいていえば、刀子の形態から古墳時代後期を上限にした時期が想定され、副葬を思わせる遺物の出土状況や、遺構の形態・規模・立地から土壌墓としての性格が見い出せる。

SK-02 (第34図)

第1主体部の石棺に隣接して掘られた用途不明の長方形の土坑である。規模は長軸径3.22m、短軸径1.05m、墳頂部の地山面からの深さ約0.6～0.7m前後、第1主体部石棺側石の底面からの深さは最大0.2mを測る。覆土（第25・26図参照）は慎重に掘り下げたが、木棺等の埋葬施設の痕跡や遺物は一切検出されなかった。なお、第1主体部の石棺を埋置するよりも以前に掘られていたが、第1主体

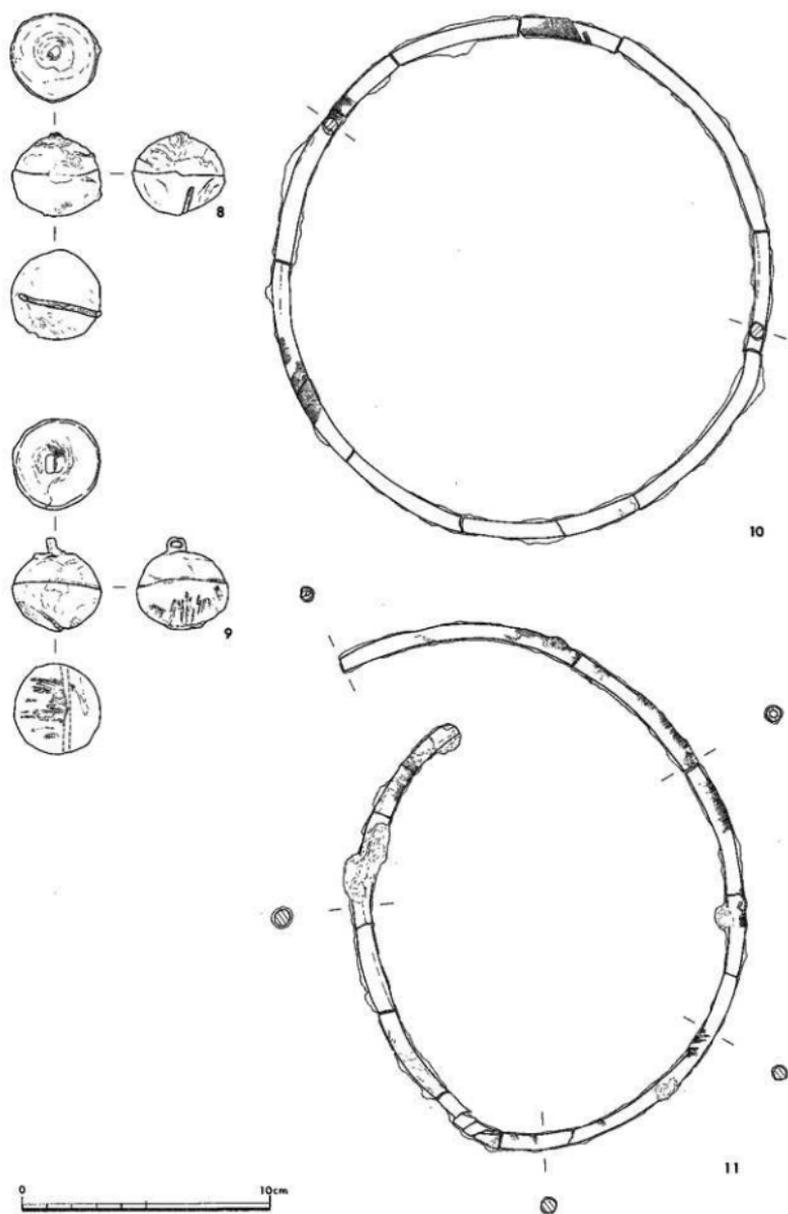


第35図 吉佐山根1号墳出土遺物実測図(1) (S=1/2)
 (1, 2は周溝内、3は第2主体部、4は第3主体部、5~7はSK01より出土)

部の墓境内に包含され、その石棺とおよそ密着して並行関係にあるという意図的な配置状況から察すれば、両者には何らかの密接な関係があったものと推察される。なお、この土坑の南西壁側は溝状遺構SD-01の覆土を切って掘り込まれていた。

SD-01 (第24図)

第1主体部、第2主体部、SK-01、SK-02とは切り合いの関係にあったと思われるが、トレンチ調査の際に大部分掘り上げてしまったため詳細は不明である。しかし、十層観察の結果、おそらく第1・第2主体部、SK-02に先行して存在していたとも考えられる。規模は、残存部幅1.18m、深さ約0.2mを測る。本来の形状、規模、性格等は判然としなが溝もしくは上坑状の遺構であったと推測される。



第36図 吉佐山根1号墳出土遺物実測図(2) (S=1/2) (8~11はSK01出土)

第2節 調査の成果と課題

古墳の時期 報告の通り、出土遺物が少なく時期比定には慎重を要するが、第2主体部、第3主体部から出土した刀子の特徴は古墳時代前半期（須恵器出現以前）の様相を呈した。また共伴する朱の出土は、後述するように前期に通有な事象である。さらに周溝内から出土した古式土師器片2点は古墳時代前期の「小谷式」に並行し、その出土状況は古墳に共伴するとは断言しかねるが他に土器片が出土しないことから何らかの形で古墳に帰属する可能性が高い。

また、遺構についても、一つの墳丘に少なくとも3つの主体部が接触して掘られていることや、いわゆる断面形が「箱掘り」状を呈し「コの字」形に墳丘を囲す周溝や低墳丘に弥生時代後期後半から古墳時代初め頃の諸相を認めうる。

したがって、遺物、遺構の両面を加味して、本古墳は古墳時代前期の所産と推定できるのである。**埋葬施設等の性格と新旧関係** 調査結果から、明らかに古墳に直結する埋葬施設と言えるのは第1～3主体部の3つの箱式石棺のみである。

しかし、SK-02は、第1主体部構築前に存在し、同主体部と何らかの密な関係があると推察され、その長方形プランの掘り方から土墳墓の可能性も否定できない。また、SK-01は、古墳に直結しないが、古墳時代後期を上限とする土墳墓の性格がうかがえる。なお、SD-01は詳細が不明で、古墳に伴う遺構が否か判断しかねた。

ここで、埋葬施設とその他の遺構の推定される新旧関係（構築順序）を整理しておきたい。それぞれの切り合い関係の詳細は既に前節で述べたので省略する。

まず、3つの主体部について整理する。

始めに、第3主体部が墳丘のほぼ中央に設けられる。これは、墓壇の一部が第1、第2主体部の墓壇で切られていることから裏付けられる。また、墳丘の中心部に位置する点も、本古墳にとっての最初の埋葬部位としてふさわしい。ついで、第2主体部が設けられる。第3主体部に後続するのは先の通りであるが、ここで問題になるのは、第1主体部との前後関係である。両者の関係は、土層観察からは読み取れなかった。しかし、第2主体部と第3主体部は、その墓壇と石棺の主軸方向が平行関係にあり被葬者の頭位もおそらく同方向であること、またどちらも底石を持つ石棺の形態が類似すること、さらに出土遺物が赤色顔料（朱）と刀子1点と全く同等であることなど、多くの類似性を持っている。したがって、傍証ではあるが、第1主体部に比べ第2主体部の方が先行する可能性が高いと判断され、最後に第1主体部が設けられ、古墳に直結する3主体部の埋葬行為は終了すると推定される。

次に、主体部に加えSK-01・SK-02・SD-01の前後関係を確認しておく。まず、SK-01は出土遺物からして3つの主体部とは少なくとも时期的に100年以上の開きがあり、他の全ての遺構に遅れるものと推定しうる。またSK-02は切り合い関係から、第1主体部に先行し、SD-01に遅れることが分かり、SD-01は第1、第2主体部、SK-02に先行するものと判断された。しかし、第2主体部とSK-02、第3主体部とSD-01・SK-02の各々の新旧関係は確認することが出来なかった。

朱について（第7章朽津論文参照）第2主体部と第3主体部の石棺内から出土した朱は、他の副葬品が刀子のみと貧弱であっただけに注目される。いずれも、棺内の広い方の小口に近い被葬者の頭胸部付近からの出土と見なされる。飯塚康行氏の最近の考察³⁴によれば、県内の埋葬施設における水銀朱の使用は、弥生時代後期末～古墳時代前半期の四隅突出型墳丘墓や前期の大型古墳など首長墓的な性格の強いものに顕著であるという。この時期以後は、基本的に朱の使用は減少の一途をたどり、変わって古墳時代後期にベンガラの使用が盛行する傾向が見られる。水銀朱が出土した出雲地方の事例としては、出雲市西谷3号墓（的場期）、加茂町神原神社古墳（小谷期）、三刀屋町松本1号墳（小谷期）、木次町斐伊中山2号・14号墳（小谷期）、松江市釜代1号墳（小谷期）が知られるが、いずれも本古墳と時期的に近い首長墓クラスの古墳である。

さて、本古墳は径8m程の小規模なものであるにもかかわらず、朱の使用が認められる特異な事例といえる。しかも、主体部床面から部分的に小量検出された出土状況（飯塚氏の出土状況の分類：4類）は、松本1号墳第2主体や斐伊中山2号墳第4主体、斐伊中山14号墳と共通している。こうした出土状況が如何なる行為と因果関係を持つのか、すなわち、被葬者に塗布したとか、副葬品の一部として置いたとかは不詳な点が多いが、少なくとも、当時おそらく貴重品であった朱を同様な形で使用している事実が注目すべきである。あるいは、被葬者間の階層差を越えて共有された朱にまつわる呪術行為・意味を示唆しているかもしれない。今後、資料の増加を待って朱の使用をめぐる社会的背景に言及していく必要がある。

吉佐山根1号墳の系譜とその意義 本古墳は、互いに切り合い関係を持つ3つの墓壇各々に、箱式石棺をもつ前期の方墳と判断された。しかし、低い墳丘や切り合い関係を持って接触する埋葬施設の配置、箱掘り的な周溝の形態は「古墳」というよりもむしろ在地的な「弥生時代の墳墓」を想起させ、低墳丘の「方形周溝墓」とも呼称し得る内容であった。

ここで、埋葬施設として箱式石棺を持つ墳墓、古墳を取り上げ、その系譜を考えてみたい。まず、出雲地方周辺では、次頁の類例が知られている。これによれば、上限は、弥生時代後期後半の安来市仲仙寺9号、10号墓³⁵や同市山ノ神石棺墓³⁶が挙げられるが、棺は小形であったり、陪葬的であったりするため、本古墳を初め古墳時代以後の箱式石棺とは隔絶の感がある。古墳時代に入ると、箱式石棺を中心主体にする古墳が本格的に登場するが、他の埋葬施設を採用するものに比して多くはない。明確な類例としては、安来市八幡山古墳³⁷、鹿島町奥才13・14・17・32号墳³⁸、宍道町足頭2号墳³⁹、出雲市山地古墳⁴⁰が知られ、いずれも10～25m前後のいわゆるマウンドを持つ方・円墳で、一見すると在地性の認められる古墳である。その後、箱式石棺を持つ古墳は中期以後も継続的に見られ、下限は後期まで下るものとされる⁴¹。さて、このような箱式石棺を持つ古墳と本古墳とを比較すると、小形で方形プランを呈するもの、棺材に割り石を使用し同規模で構造の類似する石棺をもつものなど、いくつかの類似点を見出すことも可能である。しかし、周溝・墳丘・副葬品等の有り方は総じて異なる様相を呈しており、箱式石棺からアプローチしても本古墳の「直接的な系譜」は古墳時代前期の当地域の墳墓や古墳に見出しがたい。これは、池淵俊一氏が指摘するように⁴²、前期の箱式石棺が「当地域が古墳時代社会に組み込まれていく過程の中で畿内を中心とした他地域からの影響を受けて新たにある一定の階層・序列を表象する埋葬主体として」採用された結果であり、在地性を色濃く残した古墳に、畿内からの新要素が加る混沌とした墓制変革期の反映とも考えることが出来る。次に、低墳

弥生後期～古墳前期の箱式石棺を埋葬主体とする主要遺跡一覧（出雲地方）

番号	所在地	名称	墳形	増長m	時期	石棺法様・形状他	出土遺物(副葬品)	備考
1	安来市柿谷	山ノ神石棺	石棺墓	墓域長 径1.24	弥生 後期 後半	内法0.62×0.37~0.25× 0.27。底石無く、細砂を 厚さ15cmに敷き詰める。	壺型土器3を蓋石上面 に破砕して覆う。石棺 と壺型の隙間には口縁 部や底部を充填。	山ノ神第2号と も呼称。
2	安来市西赤江町	仲仙寺 9号墓	四隅突出 型墳丘墓	27× 22.5	弥生 後期 後半	墳裾に3蓋、小形、陪葬 的。		
3	安来市西赤江町	仲仙寺 10号墓	四隅突出 型墳丘墓	26×25	弥生 後期 後半	墳裾に2蓋、小形、陪葬 的。		消滅
4	安来市古佐町	古佐山根 1号墳	方墳	8×8 ×1	前期	中心主体として3蓋。以 下、本文参照。	刀子、朱	
5	安来市古佐町	八幡山内墳	方墳か?	南北 約17m	前期	中心主体1基。約1.8×0.7 ×0.3。棺材は板状の割 り石。底石無く、厚さ約 10cmの礎を敷く。棺材の 一部に朱塗り?。	成人人骨1鉄剣2	他の主体部に、 電柱あり。消滅。
6	八東郡鹿島町 名分	奥才古墳群 13号墳	方墳	23×19 ×1.5	前期 後半	〈第1主体〉中心主体。 内法1.55×0.38×0.26。 床面に指頭大の礎床。 〈第2主体〉中心主体。 1と平行。内法1.85×0 ×42×0.26蓋石の隙間を 青灰色粘土で目張り。床 面に指頭大の礎床。	墳頂部より上部器蓋 (供飯)。	13号墳は古墳群 中最大規模
7		14号墳	円墳	約18m	前期 後半	〈第1主体〉中心主体。 内法1.8×0.46×0.34。 床面に指頭大の礎床。棺 蓋側小口部に小副室あり。 棺内より内行花文鏡 ・方格文鏡・紡錘車形 石製品(磨玉)・歯牙 ・骨片。 副室内より鉄製刀子、 磨玉内から土師器片。 〈第2主体〉1と平行。 内法1.8×0.4~0.3×0.25 ~0.35。礎床面に指頭大 の礎床。	棺外より鉄剣・鉄鍬・ 素環頭大刀・鉄環・や りかんなど。鉄製刀子・ 用途不明鉄器。 棺内礎床上より、鉄剣 ・鉄環・刀子・鉄針2 以上。	
8		17号墳	円墳	約20、 高2	前期	〈第1主体〉中心主体と して1基。内法1.63×0 ×49~0.41×0.2。床面 に指頭大の礎床。板石の 枕あり。	棺内礎床上より刀子片 ・鉄針片。頭頂骨。	他に礎床有する 第2主体、素環 七環第3主体あ り。
9		32号墳	方墳か?	約9.5	前期	中心主体として1基。内 法1.11×0.31~0.26×0.18。 地山が棺床。	棺内床面より鉄剣	小児埋葬の可能 性あり。
10	八東郡穴道町 佐々布	足頭2号墳	方	7×7 ×2	前期 ?	中心主体として1基。長 1.8。蓋石全面に赤色顔 料(ペンガラ)。	墳丘より土師器片	消滅。古墳の森 に復元。
11	出雲市神西神町	山地古墳	円	径24、 高4	前期 末?	〈第3主体〉内法0.7×0 ×25小形、陪葬的。底面 は、厚さ5cmの砂を敷き、 そのうえに径1~5cmの 小礎を敷く。		消滅。全面黄土

丘の方形周溝墓的な要素からアプローチしてみよう。今のところ、出雲地方にその類例は知られておらず、隣接する米子市周辺の青木遺跡等⁴¹²でその傍証的な遺構を確認することが出来る。しかし、明確に本古墳との系譜関係を指摘し得る類似遺構は知られず、この米子市周辺の方形周溝墓の導入は、古墳時代前期頃、畿内の影響で本格化すると考えられている⁴¹⁴。

こうしてみると、本古墳の築造の背景には、一つに弥生時代の墓制の要素を残す在地性の継承、もう一つに、箱式石棺の採用と「方形周溝墓」的な要素に見られる古墳時代前期の畿内の影響あるいは支配の波及といった両者が共存するものと推察される。この古墳は、この時期、当該地域社会が畿内を中心とする前方後円墳体制の胎動と如何に対面したかを物語る貴重な歴史資料と結論付けられる。

SK-01出土の環状鉄製品について⁴¹⁵ 報告の通り、吉佐山根1号墳には直接帰属しない土壌墓の可能性のあるSK-01から、刀子の他に、全国的に類例の無い環状の鉄製品2点と鈴5点が共伴出土した。遺物の時期は、刀子の形態から上限を古墳時代後期と推定したが、下限は不詳である。ここで、環状鉄製品の性格について若干考察しておく。まず、出土状況からして、2点は1対をなし、本来直立した状態で一つの器物に付随するものである可能性が認められた。そこで、あるものの両端に直立する「輪っか」もしくは枠が付く構造をもつと仮定し、次の様な器物を推定するに至った。

それは、楽器で「打ちもの」に分類される太鼓やつづみの類である。これらの中には、空洞の胴部の両端に鉄枠をあて皮を張った事例が見られ、音楽史ではこれを「枠付き締め太鼓」と分類している。「枠付き締め太鼓」の祖型がいつまで遡るのかは不詳だが、中世室町期には既に能楽等で使用されていたといわれ、「羯鼓」（かっこ）や「三ノ鼓」と呼ばれる古式のものは、奈良時代に大陸から伝来し、雅楽他で使用されていたという。現時点では、仮説の域を出ないが、本鉄製品の表面に繊維状のものが巻かれた状態が観察され、楽器として機能する鈴と共伴していることから、あながち的外な推論ではないだろう。あるいは、鈴もこの遺物に付随して1個体を成し機能していたものとも想像される。土壌墓の被害者像の推定にとどまらず、音楽史にも大いに影響を与える遺物だけに、今後類例を集成し詳細に検討する必要がある。

(註) 1、2、3 三宅博士「山陰地方出土刀子に関する覚書」『山陰考古学の諸問題』1986年

4、飯塚康行はか『釜代1号墳外発掘調査報告書』1994年3月（松江市教育委員会）

5、出雲考古学研究会『古代の出雲を考える4 荒島墳墓群』1995年

6、内田才・東森市良・近藤正「安来平野における土壌墓」『上代文化』第36巻 1965年

7、東森市良「第7章 八幡山古墳」『安来市内遺跡分布調査概報Ⅱ』1989年（安来市教育委員会）

8、三宅博士・広江耕史・赤沢秀則『奥才古墳群』1985年（鹿島町教育委員会）

9、稲田信氏（安道町教育委員会）にご教示いただいた。

10、出雲市教育委員会『山地古墳発掘調査報告書』1986年3月

11、山本清『出雲の古代文化』1989年（六興出版）

12、池源俊一はか「第5章 島田黒谷Ⅱ遺跡」『明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡・篠ノ谷遺跡』1994年3月（鳥取県教育委員会）

13、鳥取県教育委員会『青木遺跡Ⅰ・Ⅱ』1976年・1977年

14、米子市周辺の様相は、下高塚誠氏（米子市教育委員会）にご教示いただいた。

15、以下、楽器としての考察は、全て、古川英史・小島美子・藤井知昭・宮崎まゆみ『図説 日本の楽器』1992年10月（東京書籍）を参考にした。

第6章 穴神横穴墓群の調査

第1節 遺構と遺物

(1) 1号横穴墓

発見と調査の経緯

1号横穴墓は「穴神横穴」と呼称され、精緻な丹塗りの家形石棺を持つことで著名な周知の遺跡であった。戦前に発掘され、戦後しばらくの間まで「あながんさん」と呼ぶ信仰対象として祀られていたという。開口時期は、大正12～13年頃、昭和14年頃、昭和18年頃と諸説が伝えられるが、旧地主の松浦家では昭和14年頃と伝えている。今回の調査に至るまでに、多くの研究者が現地を訪れていたが、山本清氏の聞き取り調査を含めた報告²¹と故 内田才氏の安来市史での報告²²を除いて、報告文らしき論稿は知られていなかった。この度の調査が正式な発掘調査の初例といえる。

調査前の現地は、竹林と雑木林からなり、前庭部には多量の土砂と枯れ木が堆積していたが、羨道部の天井近くに隙間があり、辛うじて玄室内に進入することができた。玄門～玄室内には、土砂がさほど流入しておらず、玄室内には信仰対象当時の御神酒徳利が散在していた。

この度の調査は、まず前庭部～羨道部の二次堆積土（流入土）の除去にはじまり、遺構面精査とその検証を行い、写真撮影と実測等による記録化を以て終了した。

立地 (第37図)

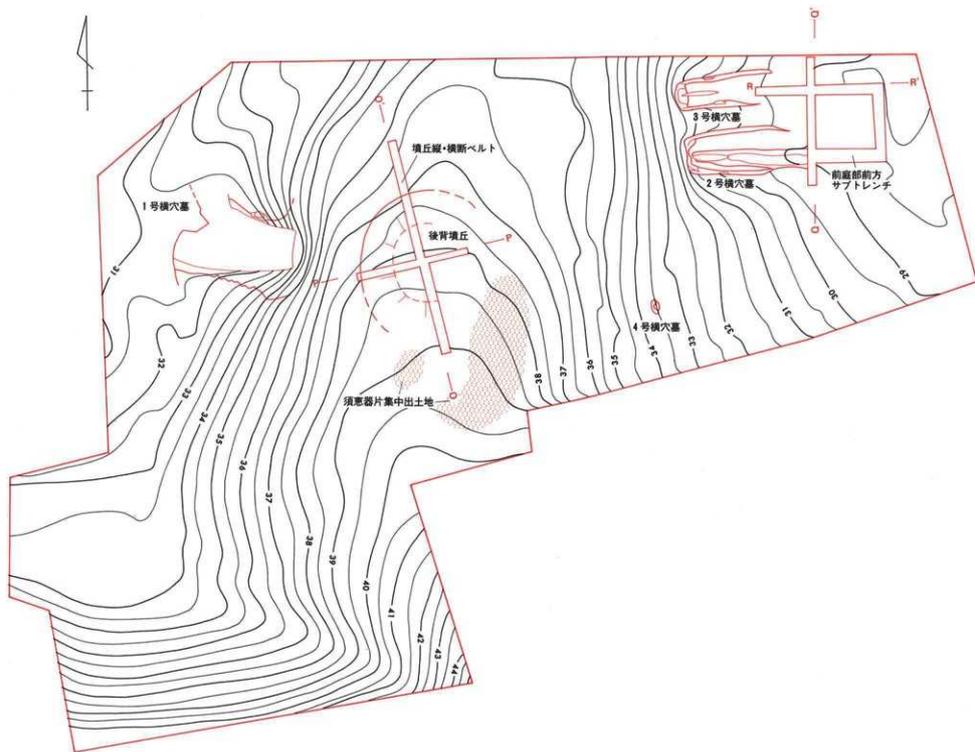
調査区中央を南北に縦断する尾根の、西向き急斜面に地山を穿って開口し、前庭部の地山面で標高は約31m以上を測る。本横穴墓群が開口する南北約300m程の尾根筋には、平横穴群、油田古墳群、平古墳群、四方神古墳など古墳や横穴墓が密集して見られ、古墳時代には「墓域」として選地されていた可能性が高い。本横穴墓はその尾根筋のおよそ南端で、小さな谷の最奥部付近に位置している。したがって、前庭部の前方は、北西方向へ下る小さな谷の緩斜面と、それを挟んで対峙する尾根筋からなり、平ラI遺跡のある小平野さえも望むことは出来ない。

前庭部 (第38図)

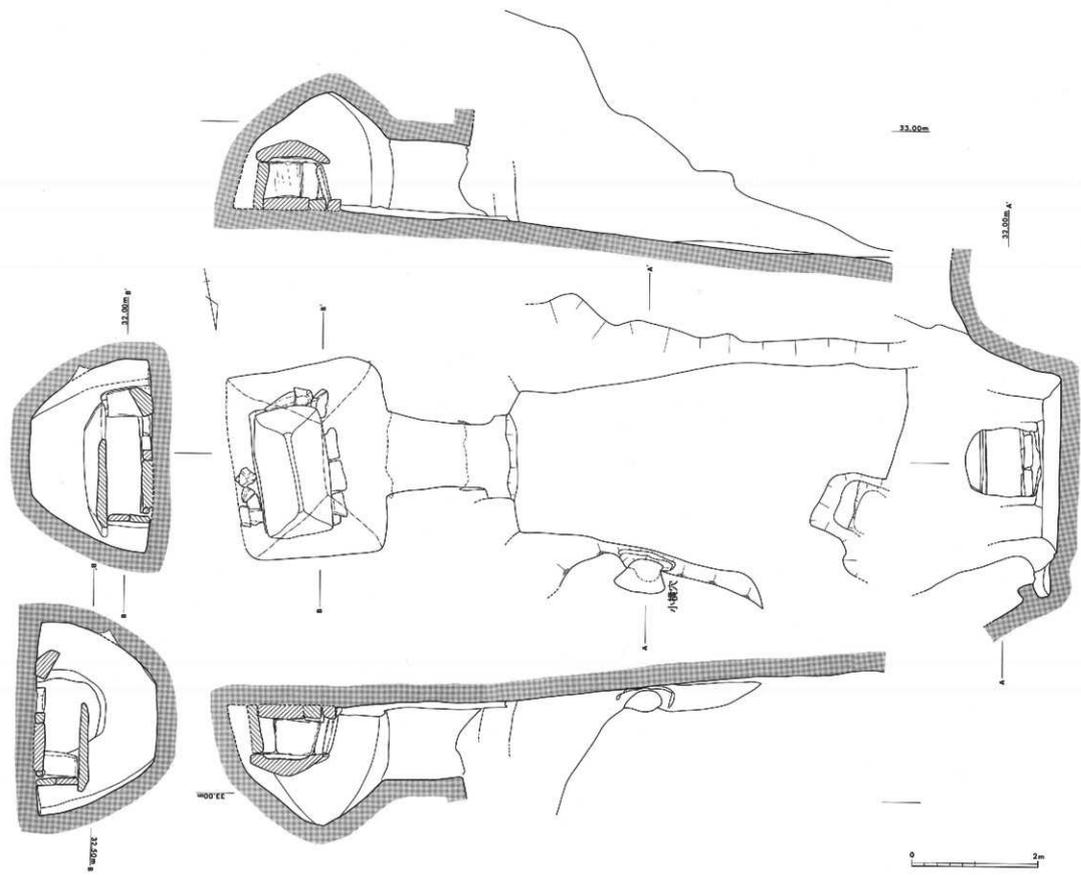
主軸はN-100°-Eを測り、東西方向に近い。地山の斜面を大きく削って比較的広い前庭部を作り出している。床面は玄室方向に向い、縦長の不整な台形に近い平面形を呈している。規模は、主軸上で長さ600cm、前庭部前端で推定幅約400cm、同羨道側で幅220cmを測る。羨道側が前端よりも若干高くなる傾斜を成し、表面に凹凸は無く、ほぼ平坦となっている。なお、床面の前端からは階段状の掘り込みを、羨道寄りの床面からはピット4個（図示せず）を、それぞれ検出したが、これは地元吉佐地区の人々によると、信仰対象として祀られていた頃に掘られた柱穴に相違ないらしい。

両側壁は、丁寧に整形されており、直線的な傾斜をもって立ち上がり、掘り方もしくは上場（遺構と遺構外斜面との傾斜変換線）に至る。なお、左側壁前半部の上半は、すでに地山が掘削され原形をとどめていない。

奥壁は、ほぼ垂直面を呈していたが、上方の地盤が崩落してくる恐れがあり、精査を中断したので



第37図 穴神横穴墓群調査後地形測量図・遺構配置図 (S = 1/200)



第38图 穴神1号横穴墓实测图

形状は判然としない。奥壁と側壁の境界は、床面から約80cmほどが明瞭な直線で立ち上がるが、その先は不明瞭な曲面となる。

小横穴 (第38図)

前庭部左側壁のほぼ中程から小横穴1基が検出された。検出時には、木根がはびこり淡褐色土層で完全に埋まっていた。精査したところ、堆積土中の木根にからんで須恵器の杯身片1点(41-1)が出土している。この堆積土が小横穴築造時の埋め土か否か、須恵器が遺構に共存するか否かは、はっきりしない。

穴は、フラスコが扁平に歪んだような「袋状」を呈し、床面と側面、側面と天井面の境は不明瞭である。床面は、平面台形状を呈し、手前の幅約50cm、天井までの高さ約24cm、奥壁の幅約80cm、同じく高さ約20cmをそれぞれ測る。床面中心部から天井までの高さが最も高く約30cmを測る。また、閉塞石は無かったが、穴の手前の前庭部床面から高さ10cm程のところに、地山を加工した幅10cm前後の帯状の段が見られ、木蓋による閉塞を推測させる。

羨道 (第38図)

床面は前庭部床面から約8cm前後高い段上となっており、長さ約35cm前後、手前の幅135cm前後、玄門側の幅130cm前後を測る。平面形は不整な方形を呈す。立面形は、天井部が既に残存していないので、規模、形状は不明である。ただし、両側壁は床面から20~40cmほど、ほぼ直線に立ち上がったところで前庭部奥壁の曲面に解消される状況であった。

閉塞 (第38図)

羨道と玄門の境界付近で、大石を使用して行なわれたと地元の古老より伝え聞くが詳細は不明である。閉塞石らしき大石は、前庭部左側壁の損壊した地山上に置いてあったが確認は無い。念のため石材を分析したところ、「荒島石」と呼称され、市内の荒島地区を中心に産出する流紋岩質軽石凝灰岩であった。

玄門 (第38図)

床面は羨道部と一連の平坦面だが、狭長となり玄室側が羨道側より若干広い長方形形状を呈する。最大長約160cm、幅100~136cm、天井部までの高さ約120~126cmを測る。立面形は横断面が釣鐘状を呈し縦断面は長方形形状を呈する。なお、床面から両側壁面、天井面にかけて幅20cm以内、深さ10cm以内の溝(図示せず)がめぐっていたが、これも後世に信仰対象として祀られていた頃に扉を設置するため掘り込んだものである。

玄室 (第38図)

平面形は、縦よりも横幅が若干広い不整な隅丸方形を呈し、前庭部からの主軸上で奥行250cm前後、最大幅約310cmを測る。床面は奥壁側が玄門側より若干高くなる傾斜を持ち、凹凸無く平坦に均されている。主軸はN-95°-Eを測り、前庭部から玄門までの主軸を振り直し、一層東西方向に近づけている。床面の中央や奥壁寄りには石棺が置かれている。そのため、床面と奥壁の界線、奥壁の立ち上がり部分は実測可能な空間が狭く略測で図化している。なお、玄門との境辺りには、縦方向の排水溝らしき落ち込み(図示せず)が見られたが、既述したように後世の加工によるものとも考えられる。

一方、立面形は、縦断面が壁面のやや膨らむ三角形を呈し、天井部に長さ116cmの横方向の棟線が

見られ、床面から棟線の最大高は196cmを測る。棟線は、玄室の主軸とほぼ直交し他の棟線と同じく明瞭に画されている。

四方の壁面と天井部の間に境（界線）の無い家形で、いわゆる擬似四柱式、平入りの形態に分類される。

石棺（第38図、第39図）

玄室内の中央やや奥壁側に、玄室の主軸と直交するように設置されており、正面（玄門側）に開かれた横口を持つ組合せ式家形石棺である。

棺身の構造は、奥壁に、縦約80cm、横約200cm、厚さ20cm以内を測る大形で板状の切り石1個を使用し、両側壁には、それぞれ大小の板状の切り石2個づつを使用している。そして、この両側壁の前面（玄門側の面）それぞれに、薄い板状の切り石1個づつを用いた左右の前壁が寄り掛かるように据えられている、この前壁2石の間が横口として開かれている。前壁は、開口後に多少原位置を動かされた状況にあったが、同タイプの石棺と比較してみると、棺材の配置にほとんど影響のない程度であった。

棺床は、横口付近の2個を含み、板状の切り石8個を床石として敷き並べている。床石は、いずれも平面長方形を呈し、厚さ20cm前後を測り、各石の接する部分の隙間はわずかとなっている。床石のうち、奥壁沿いの右側のものは、他の7個と比して一際大きく、縦70cm前後、横115cm前後を測る。床石の上面は、水平を意識したと考えられるが、凹凸が顕著な箇所も認められる。石棺の規模はこの棺床の内法で、奥行（横口床面の2石を含まない）95cm前後、幅約178cm、床石上面から蓋石内面までの最大高約70cmを測る。

一方、蓋石は、最大長210cm、最大幅113cm、最上面から最下面の厚さ約36cmを測る大形の切り石1個からなる。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、外面は寄棟造りの「屋根」形を面取りと棟線で造出している。すなわち、頂部には棟のごとき長さ約125cm、幅6～12cmの平坦面があり、その各辺から屋根のごとき傾斜する4つの面が蓋石の4隅に向かう棟線で画され、表出されている。外面の特徴から「頂部分銅形の蓋」²³とも呼称される。蓋石の側面は、幅5～12cmで面取りされた平坦面が各辺を廻っている。また、内面の各辺には、およそ棺身各壁の上面と接する部分に幅8～15cmの平坦面を廻らせ、その内側は断面隅丸矩形に掘り凹めている。最も凹んだところで13cm前後を測る。

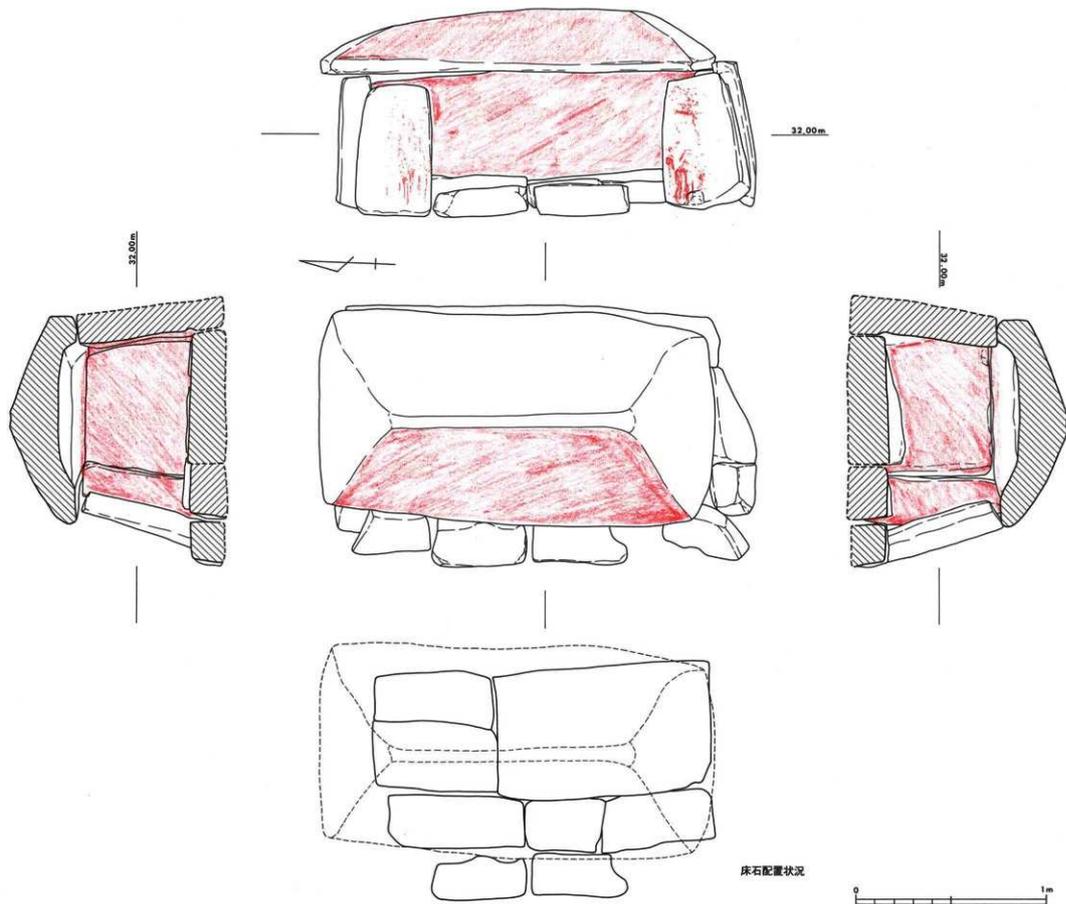
なお、石棺と玄室奥壁の約30cmほどの隙間には径20～30cm前後の石5～6個が石棺を支えるかのごとく置かれている。しかし、既述の通りこの空間の精査および実測作業は不可能であった。

石棺に使用された石材は全て、「荒島石」と呼称され、市内の荒島地区を中心に産出する流紋岩質軽石凝灰岩であった。

石棺の彩色（第39図、第7章朽津論文参照）

さて、この石棺には赤色顔料や粘土の塗布による彩色行為が確認された。詳細は第7章の朽津論文に委ねるとして、ここでは彩色が確認された部位とその色調を整理しておく。

- ①蓋石外面のうち台形状に面取りされた手前前面：紅色を呈し、単色のベンガラでむら無く赤彩されている。
- ②蓋石内面（下面）各辺の平坦面とそのやや内側の凹みに入った辺り：褐色を呈する粘土を塗布している。



第39図 穴神1号横穴墓石棺実測図 (赤色部分は赤色顔料を示す)

③棺内奥壁および側壁全面：ベンガラによる紅色の赤彩を基調とし、一部は粘土によって褐色を呈する。奥壁では紅色の表面に褐色が重ね塗りされたような部分が目立つ。

④棺内奥壁および側壁の上面（蓋石との隙間）：目張りしたかのような状態で褐色粘土の塗布がうかがえる。

こうして彩色された部位を見ると、明らかに前方（玄門～前庭部）から覗いて、見え得る場所を意識的に選択したことが理解される。換言すれば、見えない部位にはほとんど彩色行為が認められないと言える。このことは、石棺を彩色する意味を考察するうえで注目すべき事実である。

彩色壁画と線刻壁画（巻頭カラー、第40図、第7章朽津論文、ソニー株式会社付論）

さて、この石棺には、赤彩を基調とした彩色のみならず、左右の前壁前面（以下、前壁）に彩色による装飾壁画が存在することが明白となった。

まず、彩色壁画の発見に至る経過を略述する。壁画の存在については、既に故 内田才氏が安来市史において²⁴、「この両袖の前面には壁画が描かれているが、その図柄は風化がひどく判明しない。右側袖の左下隅あたりに丹の色彩が比較的良好に残っている」と指摘していたが、その後、誰からも言及される事無く本調査に至ったのである。まさに故人の卓越した観察眼の賜物である。

本調査では、この記載をもとに、まず壁画の有無を検証した。はじめに、壁面の表面に付着したほこりや土砂、緑色の苔等を刷毛で丁寧に除去したところ、何かが描かれていることが肉眼で確認された。しかし、彩色壁画の図文は不明で、壁画表面はかなり風化が進み、信仰対象であった頃の手擦れによると思われる磨耗も著しかった。そのため諸機関の協力を得て、赤外線写真、紫外線写真による画像分析を試みたが、描かれた図文は判然としなかった。そこで、東京国立文化財研究所の川野邊渉氏の指導のもと、ソニー株式会社によるデジタルカメラでの撮影とコンピューターによる画像解析を実施した結果が巻頭カラーの成果である。

ここで、こうした画像解析の成果と肉眼観察（第40図）から得られた所見を整理しておきたい。彩色の痕跡は、右前壁は壁面の左半、左前壁は壁面の右半、とそれぞれ横口に近接する部位を中心に認められる。しかし、明らかに壁画を描いたと推察可能なのは、それぞれ下半部のみに限られる。使用された顔料は、いずれも石棺の赤彩「ベンガラ」よりも一層鮮やかな朱色の「赤色粘土？」（第7章朽津論文参照）と推定され、両者には明らかに意図的な顔料の使い分けが認められる。図文の形状、モチーフは判然としませんが、少なくとも右前壁の左下隅辺りには、長さ約16cm前後の垂下する3条の直線文、そのうちの1～2条と交差するかの長さ約12cmの1条の斜線、これらの直線文の上端に接して三角形の図形（三角文？）、さらにその上方に斜線と横線、また先の直線の上端の左端から左斜め上方にのび、端部が下方へ円形に巻くかのような図形（蕨手文？）が、それぞれ確認される。また、これらの図文から約20cm上方には、横方向の長さ6cm、幅1～2cm前後の紅色の横線が認められるが、これは前壁の彩色のうち唯一ベンガラを使用するもので、壁画との関係は不明である。一方、左前壁の壁画は、右前壁よりもさらに風化と磨耗が激しく、図文はほとんどうかがい知ることが出来ないが、かろうじて長さ10cm以上の垂下する数条の直線や、その上端を結ぶかの長さ約8cmの歪な斜線などを認識することができる。

さて、こうした彩色壁画の他に、右前壁の左下隅付近に線刻壁画らしい数条の凹線が確認された。

図の通り、多数の線が認められるが、これが全て意図的な線刻行為に伴うものか否かは判断し兼ねる。ただし、彩色壁画と一部重なる幅2～3mm、深さ2mm前後のはっきりした1条の縦線とその上端の円形状の図文は、線刻の上面に、彩色壁画の顔料が乗っており、少なくとも彩色壁画が描かれる以前に意図的に刻まれたものと推定される。図文の形状から、矢を放つ人物像とも想像可能だが、描写が稚拙なだけにモチーフの特定は、困難と判断した。

土層堆積状況と遺物出土状況

冒頭で述べたように、戦前の開口以来、それまでの堆積土は全て掘りつくされていたらしい。調査前には、前庭部～羨道～玄門部の一部に多量の土砂と枯れ木が流れ込み、深さ約1m程堆積していた。この二次堆積土中から、須恵器の有蓋高杯片1点(41-2)、前庭部の小横穴から須恵器の杯身片1点(41-1)が出土した他に遺物は一切検出されなかった。

遺物 (第41図)

<小横穴出土>

1は、立ち上がりが内傾気味にのびる須恵器の杯身で、復元口径10.2cmを測る。外面底部周辺に回転ヘラケズリがみられ、他の内外面には回転ヨコナデ、内面底部付近には回転ヨコナデ後不定方向のナデを施す。大谷編年²⁵の出雲4期に相当する。

<前庭部出土>

2は、2方向に透かし孔を持つ有蓋高杯で復元口径12cmを測る。内外面に回転ヨコナデを施し、内面底部付近には回転ヨコナデ後不定方向のナデを施す。前庭部の堆積土上面から採取されたもので、横穴墓との伴関係は不明である。大谷編年の出雲3～4期に相当する。

<伝世遺物(松浦氏所蔵品)>

本横穴墓の開口時の状況は不詳であるが、山本清氏の聞き取り調査²⁶によると、「地主保存の遺物は、金環2、直刀3、須恵器類で、棺内中央に人骨一体があった」とされ、遺物として「須恵器の高46.3センチの大形壺が「右前壁と棺の間に地面をくぼめて置かれていたという」。また、「その他、高杯、小形脚付壺、小形提瓶、小形壺、蓋杯等ある。高脚系無蓋高杯は透かしや沈線のない便化したもの、小形脚付壺も備描写等一切なく、蓋杯も蓋の側と上面との界の突帯の痕跡たる沈線のかすかにあるものと全くないもの」が遺物として紹介されている。そこで、この度は調査に際し旧土地所有者であった松浦令和氏のご好意により、本横穴墓の出土品として現存する以下の資料を借用し記録をとどめた。

須恵器

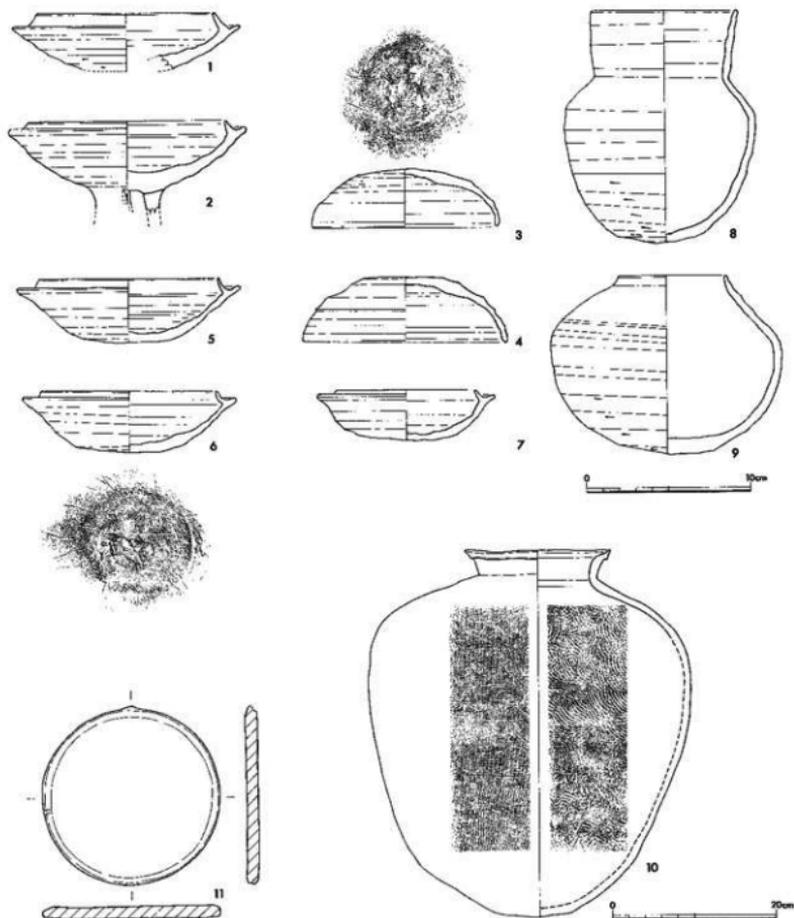
3・4は、杯蓋である。

3は、ほぼ完形で口径11.3cmを測り、天井部外面に直線のヘラ記号がある。外面に天井部と側面の境をなす段、稜線、沈線などは無く、天井部外面に回転ヘラ切り後ヨコナデ、内外面口縁部周辺に回転ヨコナデ、天井部内面に回転ヨコナデ後、巴形をなすナデを施す。大谷編年の出雲5期に相当する。

4は、約2分の1が残存し、外面に天井部と側面を画す浅い段状の稜線が見られ、復元口径12.4cmを測る。天井部外面に回転ヘラ切り後ヨコナデ、内外面口縁部周辺に回転ヨコナデ、天井部内面に回転ヨコナデ後不定方向のナデを施す。大谷編年の出雲5期に相当する。



第40図 穴神1号横穴墓石棺前壁彩色壁画・線刻図文実測図 (S=1/3) (赤色部分は彩色を、青色部分は線刻を示す)



第41図 穴神1号横穴墓出土遺物及び松浦氏所蔵伝出土遺物実測図
(1~9は $S=1/3$ 10,11は $S=1/6$)

5・6・7は、いずれも完形の杯身である。

5は、立ち上がりがシャープで口径10.9cmを測り、杯部外面に回転ヘラ切り後ヨコナデ、内外面口縁部周辺に回転ヨコナデ、底部内面に回転ヨコナデ後不定方向のナデを施す。大谷編年の出雲5期に相当する。

6は、底部外面に直線のヘラ記号があり、口径10.7cmを測り、杯部外面に回転ヘラ切り後ユビナデ、内外面口縁部周辺に回転ヨコナデ、底部内面に回転ヨコナデ後、巴形をなすナデを施す。大谷編年の出雲5期に相当する。

7は、口径8.5cmと小型化したものである。杯部外面に回転ヘラ切り後不定方向のナデ、他の内外面に回転ヨコナデを施す。大谷福年の出雲6期に相当する。

8は、口縁部を2分の1ほど欠損するが、他は完形する広口壺である。やや肩部の張った胴部から若干外反する口縁部がまっすぐのびている。口径8.8cm、器高14.5cmを測り、底部から胴部下半の外面に回転ヘラケズリ、他の内外面に回転ヨコナデを施す。

9は、短頸壺もしくは無頸壺と呼び得るもので、口径6.5cm、器高11.2cmを測る完形品である。底部とその周辺の胴部外面に回転ヘラケズリ、他の内外面に回転ヨコナデを施す。

10は、山本氏が大形壺としたもので、口径18cm、器高45.6cmを測る完形品である。玄室内の手前右隅に据え置かれていたと伝承される。調整は、口頸部内外面を回転ヨコナデし、胴部内面に青海波文を呈する当て具痕、外面に格子目の叩きとその上から施されたカキ目認められる。

土製品

11は、完形で円盤状の土製品である。直径21.8cm、厚さ1.5cmを測り、整円に近い。色調は、淡灰褐色～暗灰色を呈し、焼成は須恵質に近似する。各面とも面取りされ平滑に仕上げられているが調整は不明である。本横穴墓から出土したと伝えられるが、類例は全く知られず性格は不明である。

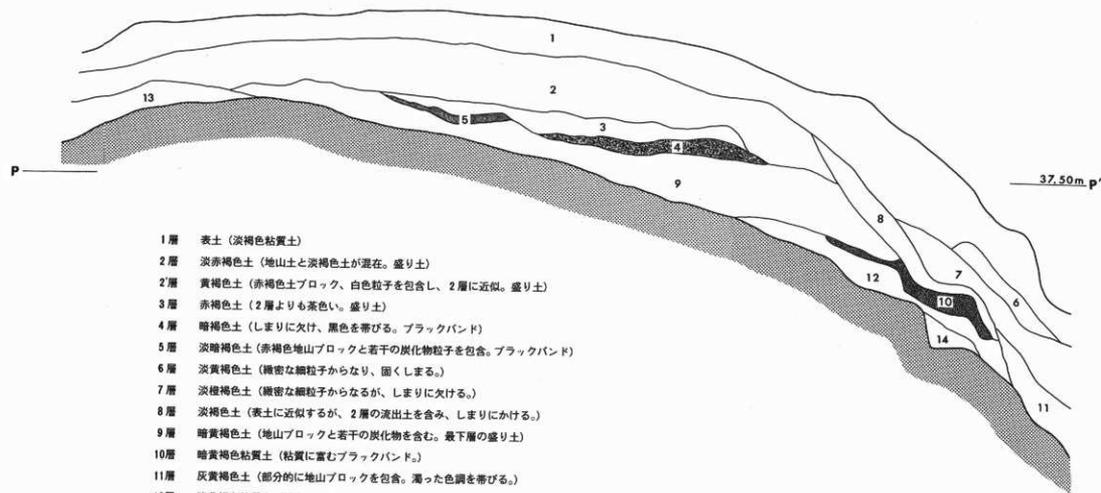
後背墳丘 (第37図、第42図、第43図、第44図)

墳丘自体に埋葬施設を持たず、横穴墓に伴う遺構と推定されるいわゆる「後背墳丘」1基を1号横穴墓の直上の尾根から検出した。

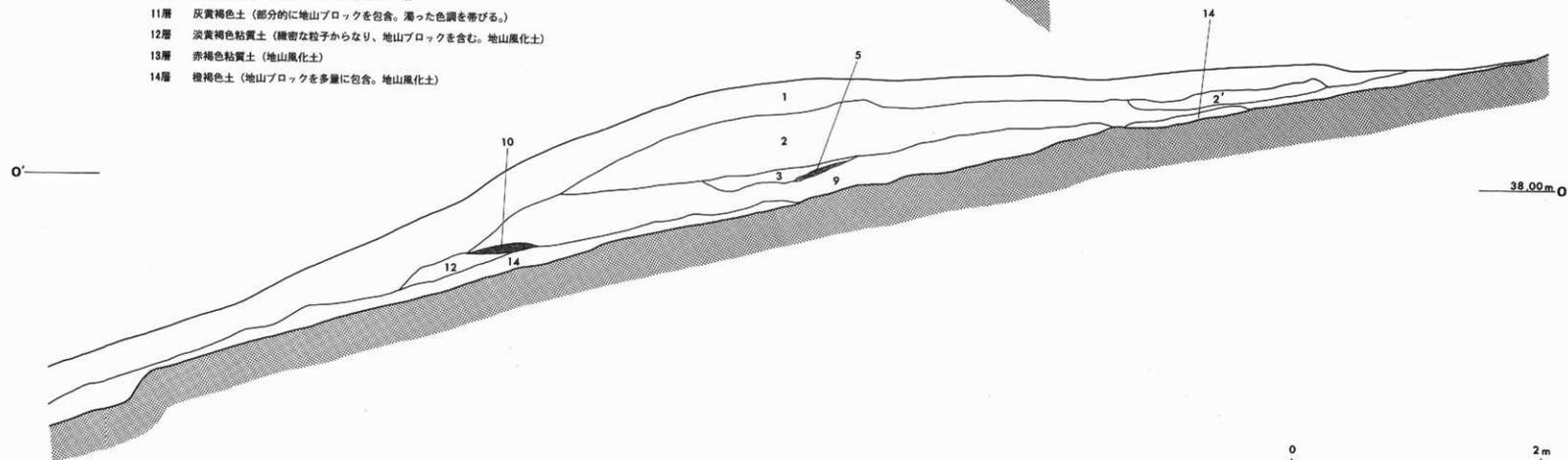
立地 横穴墓が開口する斜面の直上の尾根頂部に立地する。尾根幅があるにもかかわらず、西側斜面(1号横穴墓側)に意図的に寄せて築造されていることから1号横穴墓に伴う可能性が高い。残存部の最高点で標高約39m前後を測る。南側を除き、周囲の見通しは良く、東西に吉佐の小平野と谷を、尾根を隔てた北方に中海をのぞむことが出来る。

規模・形態 調査前、既に竹林と果樹園の耕作によって墳丘の半分以上が削平されていたが、北西部分は地表面観察でも高まりを確認することが出来た。そこで、調査は、墳丘残存部が部分的であると判断し、墳丘を縦横断する土層観察用の畔(ベルト)を設け、地山面までの層位的な掘り下げを基本に実施した。墳丘は、地山上に旧表土層と思われる炭化物を含む土層を挟みつつ盛り土によって築成され、埋葬施設、周溝は一切検出されなかった。盛り土は現存部で最高125cmの厚みを測り、肉眼で容易に分層可能なほど、各層の色調は相異していた。墳形とその規模は、削平により判然としないが墳丘残存部の状況からすると直径7～8m、高さ1.2m以上の円形と考えられる。ただし、南半部の地山面の起伏や後述する須恵器片の出土状況は、前方後円形の可能性を示唆し看過出来ない。なお、調査開始後まもなく重機の誘導を誤り、重機が南北ベルト(O-O')の南端付近を西から東へ寸断し、そのまま尾根を削平しつつ北へ向かい、次には東西ベルト(P-P')の東端付近を寸断し、結果的に北西部を除く墳丘残存部の現地形を大きく破壊してしまった。これは、調査前の地形の把握、記録化はもちろん遺構の性格解明に取り返しのつかぬ失態となった。調査員として、この場を借りて、深く反省し謝罪します。

遺物出土状況(第37図) 後背墳丘の残存部の南側を中心に須恵器の小片が大量に出土した。多くは、地山上もしくは地山上の暗褐色土中から、多少竹根や木根によって動いた可能性もあるが、ほぼ原位置

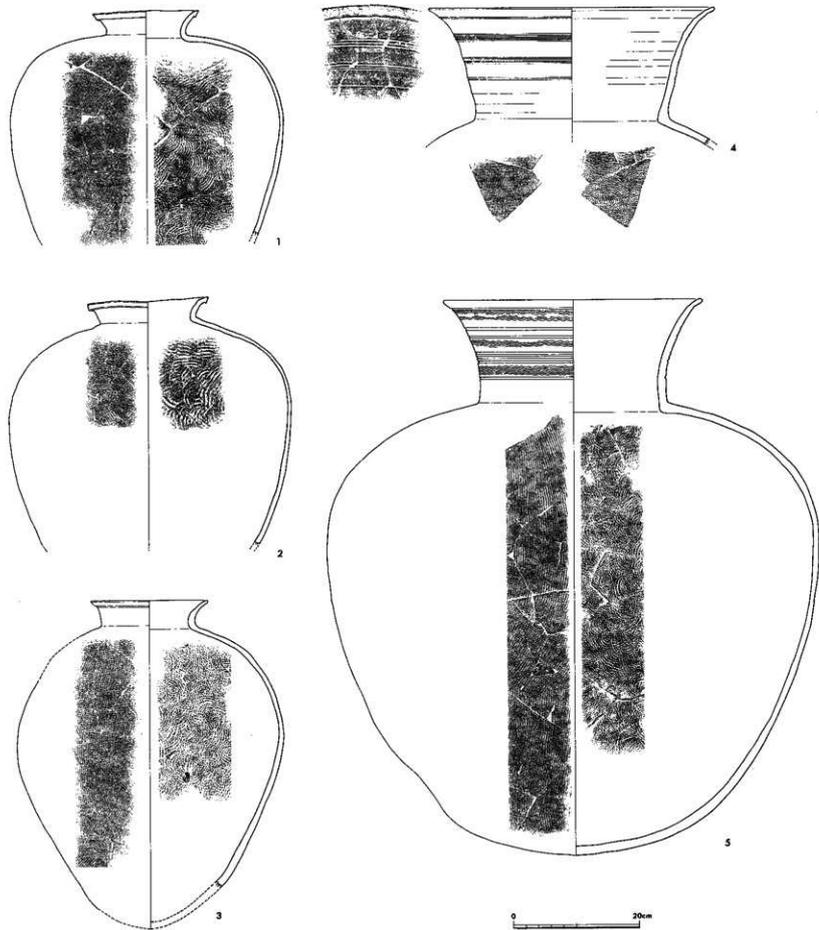


- 1層 表土 (淡褐色粘質土)
- 2層 淡赤褐色土 (地山土と淡褐色土が混在。盛り土)
- 2層 黄褐色土 (赤褐色土ブロック、白色粒子を包含し、2層に近似。盛り土)
- 3層 赤褐色土 (2層よりも茶色い。盛り土)
- 4層 暗褐色土 (しまりに欠け、黒色を帯びる。ブラックバンド)
- 5層 淡暗褐色土 (赤褐色地山ブロックと若干の炭化物粒子を包含。ブラックバンド)
- 6層 淡黄褐色土 (緻密な細粒子からなり、固くしまる。)
- 7層 淡橙褐色土 (緻密な細粒子からなるが、しまりに欠ける。)
- 8層 淡褐色土 (表土に近似するが、2層の流出土を含み、しまりにかける。)
- 9層 暗黄褐色土 (地山ブロックと若干の炭化物を含む。最下層の盛り土)
- 10層 暗黄褐色粘質土 (粘質に富むブラックバンド。)
- 11層 灰黄褐色土 (部分的に地山ブロックを包含。濁った色調を帯びる。)
- 12層 淡黄褐色粘質土 (緻密な粒子からなり、地山ブロックを含む。地山風化土)
- 13層 赤褐色粘質土 (地山風化土)
- 14層 橙褐色土 (地山ブロックを多量に包含。地山風化土)



第42図 穴神1号横穴墓後背境丘土層断面図 (第37図P-P'、O'-O')





第43図 穴神1号横穴墓後背墳丘周辺出土遺物実測図 (1) (S=1/6)

置に近い状態で集中出土している。他に遺構は存在せず、全て後背墳丘に伴うものと判断された。須恵器は、1破片の直径が10cm以下と細小化し、それが数個体分づつかたまって出土している。この状況から、須恵器はこの場で破砕され廃棄されたものと推定される。ただし、既述の通り出土地の周辺、上層部は既に削平された箇所も多く、その際動かされた遺物も無いわけではない。さて、ここで注目されるのは原位置に近いと推定される遺物の出土範囲である。図示したとおり、後背墳丘の南側の尾根の東西に限定されている。その分布状況は、あたかも前方後円墳のくびれ部を中心に分布するとも見てとれる。さらに、須恵器が出土した下層の地山面には、くびれを思わせるごく浅い掘り込みも検出されている。これ以上は推察しかねるが、これらが先に墳形を前方後円の可能性ありと指摘した所以である。

出土須恵器(第43図、第44図) 出土した須恵器片を接合した結果、少なくとも以下の8個体が復元された。

第43図 1、2、3は、口頸部の短い胴部が倒卵形を呈する壺である。

1は、胴部上方の肩部が水平に近く張り出すのが特徴で、口径16.1cm、胴部最大径43.6cmを測り、口頸部周辺の内外面に回転ヨコナデ、胴部外面に格子目印きの後、上半部を中心にカキ目調整を施す。胴部内面には青海波文を呈する同心円文の当て具痕が残る。

2は、口径19.1cm、胴部最大径45.0cmを測り、口頸部周辺の内外面に回転ヨコナデ、胴部外面に格子目印きの後、カキ目調整を施す。胴部内面には青海波文を呈する同心円文の当て具痕が残るが、44-1と同じく他の須恵器よりもその溝幅が広く粗い。

3は、肩部の張りが弱く撫で肩でまさしく倒卵形状を呈する。口径16.1cm、胴部最大径43.6cmを測り、口頸部周辺の内外面に回転ヨコナデ、胴部外面に格子目印きの後、胴部中央部にカキ目調整を施す。胴部内面には青海波文を呈する同心円文の当て具痕が残る。

第43図 4、5は、口縁部が外反する大型甕(大甕)である。

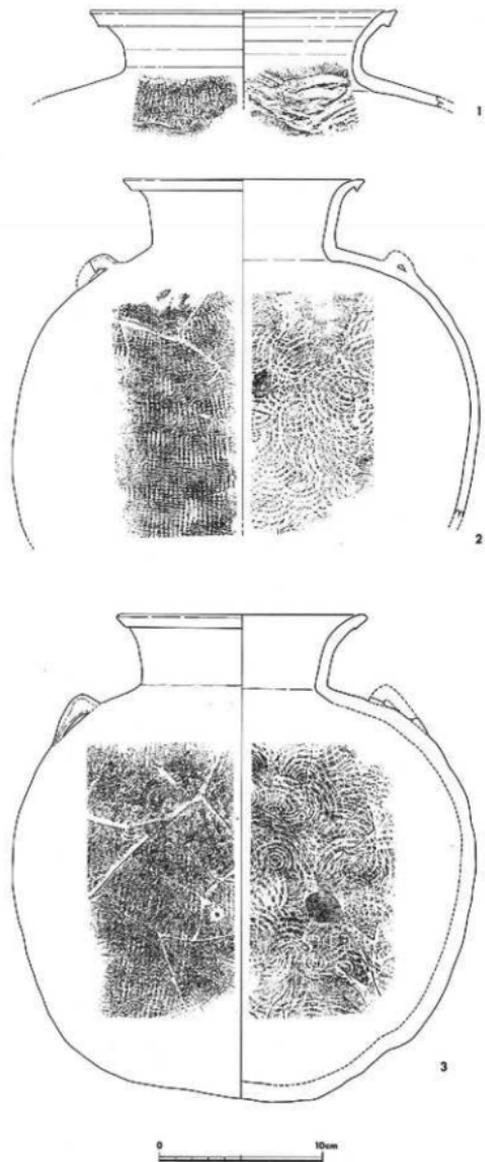
4は口径45.3cmを測り、口頸部外面に波状文と凹線文が帯状となって数帯めぐる。周辺の口頸部内外面に回転ヨコナデ、胴部外面に格子目印きを施し、胴部内面には青海波文を呈する同心円文の当て具痕が残る。

5は、口径41.2cm、胴部最大径78.8cm、器高89.6cmを測り、小片を接合し、約2分の1に復元されたものである。口頸部外面に、波状文と凹線文が帯状となって数帯めぐっている。周辺の口頸部内外面に回転ヨコナデ、胴部外面に格子目印きを施し、胴部内面には青海波文を呈する同心円文の当て具痕が残る。

第44図 1は、口頸部の短い壺である。口径18.8cmを測り、口頸部内外面に回転ヨコナデ、胴部外面に平行印きを施す。胴部内面には溝幅が広くやや刻みの粗い、青海波文を呈する同心円文の当て具痕が残る。

第44図 2、3は、肩部に一对の把手がつくいわゆる二耳壺である。

2は、口径14.3cmを測り、把手(耳)の隙間はわずかで非実用的である。口頸部内外面に回転ヨコナデ、胴部外面に格子目印きの後、横方向のカキ目を施す。胴部内面には、青海波文を呈する同心円文の当て具痕が残る。胴部中程に、破砕時の打点を示唆する放射状の割れ目が観察される。



3は、口径14.4cm、器高30cmを測り、把手(耳)の隙間はわずかで非実用的である。器表面に自然釉が見られ、口頸部内外面に回転ヨコナデ、胴部外面に格子目叩きを施す。胴部内面には、青海波文を呈する同心円文の当て具痕が残る。底部には、別個体の甕片が付着していた。

時期 伝世する遺物は、出土したとされる遺物の1部であるため、時期比定には慎重を要するが、杯身、杯蓋の特徴は、およそ大谷編年の出雲5期もしくは出雲6期の古い段階に相当している。また、遺構との同伴関係には検討を要するが、前底部小横穴から出土した杯身片は、それより若干廻り得る大谷編年の出雲4期に相当している。こうした遺物の型式と家形石棺の型式は、これまでの研究成果に矛盾していない³⁷。したがって、現存する遺物を最大限評価し、後背墳丘を含む本横穴墓の営まれた時期は、古墳時代後期末、実年代にして6世紀末から7世紀初頭と推定することが可能である。換言すれば、およそ6世紀第4四半期から7世紀第1四半期の時間幅の中には、確実に存在していたと考えてよいだろう。しかし、現段階では、築造と最終埋葬行為それぞれの時期比定については、これ以上の確定は不可能である。

第44図 穴神1号横穴墓後背墳丘周辺出土遺物実測図(2)(S=1/3)

(2) 2号横穴墓

立地 (第37図)

吉佐山根1号墳が存在する丘陵から北に派生する尾根の東側斜面、1号横穴墓と尾根を挟んで反対側に開口する横穴墓で、標高は前庭部床面で約30mを測る。前庭部の前面には神代塚古墳やカンボウ遺跡、石田遺跡などがある吉佐町の谷を望み、北には隣接して3号横穴墓が存在する。

前庭部 (第46図)

主軸は、ほぼ東西方向にある。地山を掘削して、床面の幅約190cm、長さが600cm以上の細長い前庭部を作り出している。床面は前庭部前方(東側)に向けてわずかに下方へと傾斜しており、床面の羨道手前(左側壁より)には排水溝らしき溝を設けている。この溝が始まる羨道付近では、約180cmの間、幅18cm前後の更に細い溝が切り込まれており、前庭部前端に向けて次第に幅を広げて、前端付近では幅90cm以上を測る。この溝は羨道部で一端途切れるが、玄室から玄門部にかけて続く溝とはわずかの距離しか隔てておらず、本来的には、一続きのものとして意識され、機能した溝と推定される。両側壁は直角に近く非常に急斜面を呈しており、奥壁との境界は、床面から200cm以上立ち上がる明瞭な直線で画されている。奥壁もほとんど垂直面を呈し、前庭部に立つと見上げる程の柱の高さである。

小横穴 (第47図)

羨道部から約90cm手前(東)の前庭部左(南)側壁に、小横穴1基が検出された。この小横穴は、床面から10cm以上上方に穿たれており、開口部の幅約50cm、高さ約36cmと非常に小型である。室内は平面形が奥に向けて扇形に開く形態で、奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、わずかにドーム状に湾曲する天井に至る。室内の規模は奥行62cm、最大幅74cm、高さ34cmを測る。

入口には人頭大もしくは人頭大より若干大型の自然石が検出され、閉塞用の石と考えられる。ただ入口との間には隙間があることから、木製の閉塞装置の支えのために置かれたものの可能性もある。

室内からは遺物等は検出されず、また人骨等を思わせるものも何ら出土していない。この小横穴の性格については不明だが、その位置から考えて2号横穴に付随するものと考えられる。

羨道 (第46図)

前庭の奥壁のほぼ中央に羨道が開口する。床面は前庭部床面から20cm前後高い段上となり、幅113cm、高さ104cmを測る。1号・3号と同じく奥行が20~22cmと極めて短く、ほとんど閉塞石を受けるための挟り込みの意味しかもっていない。横断面形は、床面よりやや上方に最大幅をもつ釣鐘状を呈す。

閉塞 (第52図)

羨道部と玄門部の境界に、複数の石を組み合わせて閉塞している。玄門部の入り口にはわずかながら隙間があり、若干の移動があったと推定されるが、基本的には原位置を保持している。石はすべて黄色味がかった淡灰褐色の比較的軟らかい石材を用いており、流紋岩質(?)火山礫凝灰岩である。

閉塞は基本的に5枚の角柱状の石の組合せで行なわれている(図52、石A~E)。この5枚の石には全てに加工痕が観察されることから、切石と考えられる。これらの石は、組合せの状況から閉塞の過程がおおよそ推測できる。まずもっとも大形で板状に近い形態の切り石A(最大幅49cm、高さ82cm、厚さ12cm)が玄門入口の左側に置かれる。この際、玄門の壁と石との接着面が小さく、その後の石の

組合せの重量を受けて内側へ倒れる危険性があるため、石Aの内側に支えの石F、Gが置かれたものと推測される。小形の石I、Jもこの時に隙間をうめるために置かれたものであろう。次にやや部厚い石B（最大幅41cm、高さ74cm、厚さ27cm）が石Aにたてかけるように置かれる。この石Bは、現況では石Aに大きく重なってやや左に傾いており、元は直立してもっと右側の石Cに接するように置かれたものと推測される。次に細長い角柱状の石C（幅14cm、高さ63cm、厚さ20cm）が右壁付近に置かれたと考えられる。

これまでの石A、B、Cが置かれた段階ではば玄門前面が塞がれたことになるが、次に隙間をうめると同時に前方への倒壊を防ぐために石D、Eが置かれたものと考えられる。ここで注目されるのは、石D、Eの下端面がともに石A～Cよりも高い位置にあることである。これは、石A～Cが置かれたのち、ある程度土でうめられた後に石D、Eが置かれた結果と推測される。

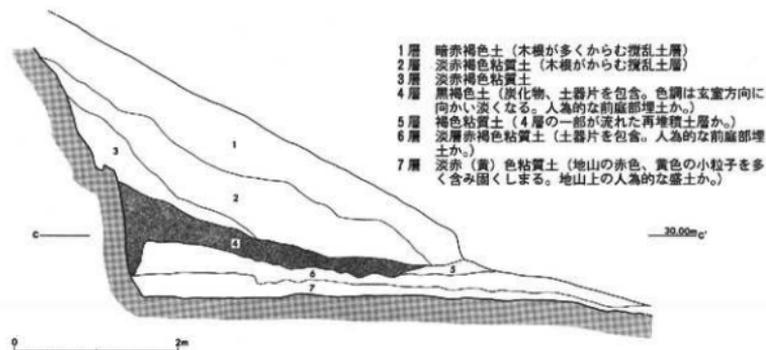
玄門（第46図、第52図）

床面は羨道部と一連の平坦面だが、狭長となり、玄室側が羨道部より若干広い長方形を呈する。長さ145cm、幅が羨道との境界で77cm、玄室との境界で92cmと、天井部までの高さ85cmを測る。役割としては狭長な羨道とみなし得る構造である。床面は玄室側から羨道に向けてわずかに下っており、羨道との境には低いながらも段を設けている。また、玄室から左側壁を掠めて羨道に向う排水溝が続いている。天井の横断面形は羨道と同様に釣鐘状を呈しており、天井のラインは玄室側から羨道に向ってわずかに下っている。

玄室（第46図、第52図）

平面形は、奥行が197cm、幅は玄門側で245cm、奥壁側で215cmと、手前側が広いやや不整な長方形を呈している。床面は、凹凸なく平坦に均され、壁際には、細く浅い溝が廻り、左前壁の玄門付近で中軸の溝と接続する。主軸は、N-85°-Wを測り、前底部から玄門までの主軸を振り直し、一層東西方向に近付けている。

一方、立面形は、縦断面が壁面のやや影らむ三角形を呈し、天井部には長さ48cmと短い横方向の棟線が見られ、床面から棟線の最大高は175cmを測る。棟線は玄室の主軸とほぼ直交し、他の稜線（界



第45図 穴神2号横穴墓前庭部縦断土層断面図（第46図C-C'）